

讚岐国府跡 1

2016.3

香川県教育委員会

序文

讃岐国府跡は、香川県坂出市府中町に所在する古代の讃岐国を代表する官衙遺跡です。江戸時代から昭和40年代まで文献・地名などの研究が行われ、昭和50年代から香川県教育委員会・坂出市教育委員会によって発掘調査が継続して実施しています。これらの発掘調査では、包蔵地のほぼ全域で奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が多く確認されるなど広大な国府域の存在を物語る大きな成果が得られていますが、国府域内部の国衙配置や国庁の確認など様々な課題が提示されることとなりました。

香川県教育委員会は、これらの調査で明らかになった課題や讃岐国府跡の適切な保存措置の検討、遺跡の積極的な活用を図ることを目的として、平成21年度より確認調査を再開し、平成26年度からは史跡指定を念頭においた確認調査を本格化させております。

本書は、昭和52年度に実施された讃岐国府跡2次調査から昭和59年度の9次調査における成果です。これらの現地調査終了後、約30年の時が経っておりますが、現在進めております確認調査の成果と合わせ讃岐国府跡の歴史的評価に役立つと考えております。

最後になりましたが、本報告書を作成するにあたり、地元坂出市府中町の方々、文化庁をはじめとする地元自治体である坂出市教育委員会、助言・指導をいただきました関係者の方々に対して、感謝申し上げます。

香川県埋蔵文化財センター

所長 真鍋昌宏

例言

本書は、香川県坂出市府中町に所在する「讃岐国府跡」の発掘調査報告書である。

1. 発掘調査及び遺物整理事業は、国庫補助事業として実施し、香川県教育委員会が主体となり実施した。本報告書作成に関わる出土遺物及び記録類の整理等の報告書作成作業は平成 25・26 年度に、印刷発行は平成 26 年度に香川県埋蔵文化財センターを担当として実施した。なお、整理後の出土遺物・実測図・写真等は香川県教育委員会が所蔵・保管している。
2. 発掘調査及び遺物整理事業実施に伴う体制等については、第 1 章に記した通りである。
3. 本書の執筆は、遺物整理事業担当の信里芳紀・佐藤竜馬（第 4 章第 3 節 2）が行った。
4. 本書における水準については標高値を使用する。但し、原図等の記載が判明しないものや正確さを欠くものについては敢えて記載していない。
5. 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。また、表現上略号を用いることが適当でないと判断された遺構も存在する。
SB(掘立柱・礎石建物)・SA(柵列)・SD(溝)・SK(土坑)・SP(柱穴)・SX(性格不明)
6. 本書で使用する遺構番号は、以下の調査年度を反映する形で表記し、現地調査時に付与した番号を振替えた。
例：SD78001……………SD(遺構略号)・78(調査年：西暦)0001(各年度に付与した番号)
7. 遺物実測図における種別毎の網掛けは以下のとおりである。



須恵器



施釉陶器



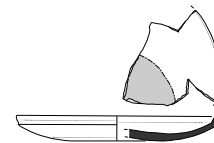
輸入陶磁器



黒色土器



油煙



摩滅痕(硯)

8. 発掘調査及び本報告書作成に際し、文化庁文化財部記念物課をはじめ、多くの機関や方々にご指導、ご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。(敬称略、五十音順)

坂出市教育委員会

大久保徹也 大橋泰夫 川畑 聰 坂井秀弥 馬場 基 橋本雄一 平尾正幸 松本敏三

地図は国土地理院地形図を使用しました。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1	SD79005	52
第1節 調査に至る経緯・経過	1	SD79003 他	52
1. 発掘調査の経緯・経過	1	SE79001	52
2. 整理作業の経緯・経過	1	ST79001	57
第2章 立地と環境・讃岐国府跡の研究史	2	ST79002	57
第1節 立地と環境	2	その他の柱穴出土遺物	58
1. 国府設置前後の綾北平野の政治的動向	4	4. 小結	58
2. 条里地割の形成と駅路	7	第6節 7次調査(昭和55年度)の調査	59
3. 国分寺・国分尼寺・国分寺瓦屋(府中山内瓦窯)	8	1. 概要	59
第2節 讃岐国府跡の研究史	8	2. 層序	59
第3章 調査の成果	13	3. 検出遺構・遺物	59
第1節 各年度の調査地点と基本的な地形の概略	13	SD80010・80014(築地)	59
1. 各年度の調査地点	13	SE80001	67
2. 地形	13	SD80001	68
第2節 2次調査(昭和52年度)の調査	15	SD80008	70
1. 概要	15	SD80002 他	70
2. 層序	15	包含層出土遺物	70
3. 検出遺構・遺物	19	4. 小結	72
SD77001a. b. c	19	第7節 8次調査(昭和56年度)の調査	72
SE77001	19	1. 概要	72
SK77001 他	22	2. 層序	72
段状遺構・7～8層出土遺物	22	3. 検出遺構・遺物	76
段状遺構6層出土遺物	22	SD81007・81008	76
段状遺構5層出土遺物	23	SD81001 他	77
段状遺構4～5層・4層出土遺物	26	4. 小結	79
3層出土遺物	32	第8節 9次調査(昭和59年度)の調査	79
2 トレンチの調査成果	32	1. 概要	79
その他の遺物	32	2. 層序	79
4. 小結	32	3. 検出遺構・遺物	79
第3節 3次調査(昭和53年度)の調査	33	SD84001	79
1. 概要	33	SD84002	79
2. 層序	33	SA84001	82
3. 検出遺構・遺物	33	4. 小結	84
SD78001	33	第4章 総括	85
東部柱穴群	33	第1節 遺物	85
4. 小結	33	1. 分布調査	85
第4節 4次調査(昭和53年度)の調査	37	2. 瓦の出土量とその分布	85
1. 概要	37	3. 官衙関連遺物	93
2. 層序	37	第2節 遺構	93
3. 検出遺構・遺物	37	1. 国衙配置の推定	93
SB78001	37	第3節 古代末期の讃岐国府	96
SB78002	37	1. 遺構分布からみた景観	96
SK78005	37	2. 灯明具	96
SE78001	38	3. 中国産磁器	98
SD78003 他	38		
包含層出土遺物	39		
4. 小結	40		
第4節 5次調査(昭和53年度)の調査	40		
1. 概要	40		
2. 層序	40		
3. 検出遺構・遺物	43		
道路遺構	43		
石組遺構	43		
4. 小結	44		
第5節 6次調査(昭和54年度)の調査	44		
1. 概要	44		
2. 層序	44		
3. 検出遺構・遺物	49		
SB79001	49		
SB79002	51		

挿図目次

図 1	遺跡の位置	図 37	SE79001 平・断面及び出土遺物
図 2	讃岐国府周辺の歴史的環境	図 38	SE79001 井戸枠（その 1）
図 3	綾北平野の大型横穴石室墓・惣社神社遺跡出土遺物	図 39	SE79001 井戸枠（その 2）
図 4	城山城城門と出土遺物・開法寺出土軒瓦	図 40	SE79001 井戸枠（その 3）
図 5	讃岐国府推定図	図 41	ST79001・79002 平・断面及び出土遺物他
図 6	讃岐国府跡における既往の発掘調査地と条里地割	図 42	7 次平・断面
図 7	既往の調査地と地形概念図	図 43	7 次断面及び築地 (SD80010・80014) 断面
図 8	2 次調査平面	図 44	築地 (SD80010・80014) 平面及び遺物出土状況
図 9	2 次調査断面（その 1）	図 45	築地 (SD80010) 出土遺物（その 1）
図 10	2 次調査断面（その 2）	図 46	築地 (SD80010) 出土遺物（その 2）
図 11	SD77001・77002・77003 出土遺物	図 47	築地 (SD80010) 出土遺物（その 3）
図 12	SE77001 平・断面及び出土遺物	図 48	築地 (SD80014)・基底部出土遺物
図 13	SK77001 他出土遺物	図 49	SE80001 平・断面
図 14	SX77001 他出土遺物	図 50	SE80001 出土遺物
図 15	段状遺構 8～6 層出土遺物	図 51	SD80001 他・包含層出土遺物
図 16	段状遺構 6 層出土遺物	図 52	8 次調査平面
図 17	段状遺構 5 層・5～4 層出土遺物	図 53	8 次調査断面
図 18	段状遺構 4 層出土遺物（その 1）	図 54	包含層出土遺物
図 19	段状遺構 4 層出土遺物（その 2）	図 55	SD81008 平・断面
図 20	3 次調査平面	図 56	SD81008 出土遺物
図 21	SD78001 断面及び出土遺物・SD78001 周辺図	図 57	9 次調査平面
図 22	柱穴・包含層出土遺物	図 58	9 次調査断面
図 23	4 次調査平面	図 59	包含層出土遺物
図 24	SB78001 平・断面	図 60	SD84001・84002・柱穴出土遺物
図 25	SE78001・SK78005 平・断面及び出土遺物	図 61	分布調査（古瓦）
図 26	SK78002 他・包含層出土遺物	図 62	分布調査（須恵器）
図 27	5 次調査平面及び包含層出土遺物	図 63	分布調査（黒色土器・土師質土器・輸入陶磁器）
図 28	5 次調査断面	図 64	瓦の出土量と分布（重量）
図 29	石組遺構（苑池）平・断面及び出土遺物	図 65	讃岐国府式
図 30	6 次調査平面	図 66	施釉陶器の産地と変遷
図 31	6 次調査断面	図 67	硯集成
図 32	包含層出土遺物（その 1）	図 68	特殊遺物の分布
図 33	包含層出土遺物（その 2）	図 69	国衙配置想定図
図 34	SB79001 平・断面及び出土遺物	図 70	古代末～中世前期の屋敷地の想定と井戸の分布
図 35	SB79002 平・断面	図 71	灯明具と考えられる資料
図 36	SD79003 他出土遺物		

挿図（写真）目次

写真 1	綾織塚（穴薬師）古墳横穴式石室	写真 22	SB78001 全景 北から
写真 2	城山城門	写真 23	SE78001 井側
写真 3	鴨廃寺塔心礎	写真 24	5 次調査地（右奥に鼓岡社叢）北西から
写真 4	開法寺塔基壇と礎石	写真 25	D トレンチ道路遺構（奥に鼓岡社叢）北から
写真 5	史跡山内瓦窯	写真 26	石組遺構（苑池）北から
写真 6	2 次調査地全景 北から	写真 27	石組遺構（苑池）土層 東から
写真 7	SD77001 を覆う 3 層（礫群）北から	写真 28	6 次調査風景
写真 8	SD77001 全景 北から	写真 29	SB79001 付近 西から
写真 9	SD77001 土層（断面 2）北から	写真 30	標準土層 (A2 東壁) 西から
写真 10	SE77001 井側 北から	写真 31	SB79001 全景 北から
写真 11	SE77001 を覆う 3 層（礫群）南から	写真 32	SP79244 の礎石？検出レベルに注意
写真 12	段状遺構 (B1 グリッド) 南東から	写真 33	SP79224 礎石下位の柱根
写真 13	段状遺構 6 層遺物出土状況 東から	写真 34	SP79243 の礎板石
写真 14	段状遺構 6 層遺物出土状況 南東から	写真 35	SP79238 の柱根と上部の根石？
写真 15	4 層上面検出状況 南から	写真 36	SE79001 上部の礎石状の大型石材
写真 16	4 層土器溜まり 東から	写真 37	SE79001 井戸側
写真 17	4 層土器溜まり 西から	写真 38	SE79001 調査状況
写真 18	2 トレンチ全景 西から	写真 39	ST79001
写真 19	3 次調査風景	写真 40	ST79002
写真 20	SD78001 全景 北から	写真 41	7 次調査地全景 南から
写真 21	4 次調査風景	写真 42	標準土層 (C2 東壁) 南西から

写真 43 築地遺構全景 南から
写真 44 築地遺構断面 南東から
写真 45 築地遺構 SD80010 断面 東から
写真 46 SD80010 下層の讃岐国府式軒瓦
写真 47 SE80001 全景 東から
写真 48 SE80001 底面の礫群
写真 49 SE80001 下層の曲物と裏込の石組
写真 50 SD80001(低地帯) 東から
写真 51 8次調査地北半部全景 南から

写真 52 標準土層 (E4 北壁) 南から
写真 53 SD81008 全景 東から
写真 54 SD81008 断面 西から
写真 55 9次調査地全景 南から
写真 56 SD84001 西から
写真 57 SA84001 と SD84002 北から
写真 58 SD84002 断面 北から
写真 59 SD84002 全景 北西から

写真図版目次

1. 讃岐国府の立地 上が北
2. 遺跡遠景 南から
3. 遺跡遠景 南東から
4. 1 トレンチ 3層礫群検出状況 北から
5. 1 トレンチ 3層礫群検出状況 西から
6. 1 トレンチ 3層礫群内緑釉丸瓦出土状況
7. 3層礫群内讃岐国府式軒丸瓦出土状況
8. 1 トレンチ SE77001 を覆う 3層礫群 南から
9. 1 トレンチ SD77001 完掘状況 北から
10. 1 トレンチ 南部 4層上面遺構完掘状況 南から
11. 1 トレンチ SE77001 北から
12. 1 トレンチ 段状遺構 4層検出状況 南から
13. 1 トレンチ 段状遺構 4層土器群検出状況 東から
14. 1 トレンチ 段状遺構 4層土器群検出状況 西から
15. 1 トレンチ 段状遺構 6層土器群 (B1 区) 検出状況 東から
16. 1 トレンチ 段状遺構 6層土器群 (断面 2 付近) 検出状況 東から
17. 1 トレンチ 段状遺構 6層土器群 (B1 区) 検出状況 南東から
18. 1 トレンチ 段状遺構 6層土器群軒丸瓦 (KF103) 出土状況
19. 1 トレンチ 段状遺構 6層土器群 (B1 区) 検出状況 南から
20. 1 トレンチ 段状遺構 (B1 区) 検出状況 東から
21. 1 トレンチ 段状遺構 (B1 区) 検出状況 南東から
22. 1 トレンチ 段状遺構 (B1 区) 検出状況 東から
23. 1 トレンチ 段状遺構土層 (断面 2 B1 区南) 北東から
24. 1 トレンチ 段状遺構土層 (断面 2 B2 区南) 北から
25. 1 トレンチ 段状遺構土層 (断面 3 A2 区南) 北から
26. 調査前の状況 東から
27. 東部完掘状況 西から
28. 西部完掘状況 東から
29. SD78001 全景 南から
30. SD78001 断面 (南壁) 北から
31. SD78001 断面 (北壁) 南から
32. 調査前の状況 北西から
33. トレンチ全景 北から
34. トレンチ全景 南から
35. SB78001・SD78003 全景 北から
36. SD78006 付近全景 東から
37. SD78006 付近全景 北から
38. SE78001 全景 北から
39. SE78001 下層井戸側の石組 南から
40. 調査前の状況 (奥側の鼓岡社の丘陵) 北西から
41. D トレンチ道路遺構調査状況 南から
42. D トレンチ道路遺構全景 南から
43. D トレンチ道路遺構全景 北から
44. A トレンチ道路遺構全景 北から
45. D トレンチ土層 (下部に道路遺構埋土) 東から
46. D トレンチ土層 (下部に道路遺構埋土) 東から
47. B トレンチ石組遺構 (苑池) 北から
48. B トレンチ石組遺構 (苑池) 西から
49. B トレンチ石組遺構 (苑池) 土層 東から
50. 調査前の状況 (右奥側の鼓岡社叢) 北から
51. F1 西壁土層 東から
52. C1 西壁土層 東から
53. G4・G5 区 6層下位の落ち込み 西から
54. F1 以南 6層上面遺構完掘 北から
55. SB79001 検出状況 北から
56. SB79001 全景 北から
57. SB79001 全景 北西から
58. SB79001 全景 西から
59. SB79001 (SP79238) 柱根 北から
60. SB79001 (SP79238) 柱根・根石検出 東から
61. SB79001 (SP79241) 柱根 東から
62. SB79001 (SP79254) 礎石?(石の下に柱根) 北東から
63. SB79001 (SP79242) 柱根 西から
64. SB79001 (SP79242) 柱根・根石 東から
65. SD79018・79518 全景 南から
66. SE79001・ST79001・79002 全景 北から
67. SE79001 上層の井側と礎石様の大石 北から
68. SE79001 井側と曲物 南から
69. SE79001 縦板と横木の組合わせ状況
70. SE79001 縦板と横木の組合わせ状況
71. SE79001 調査状況
72. A0・A1 築地 (SD80010・80014) 中層完掘状況 北から
73. A0・A1 築地 (SD80010・80014) 下層完掘状況 南から
74. A0・A1 築地 (SD80010・80014) 中層完掘状況 東から
75. A0・A1 築地 (SD80010・80014) 下層完掘状況 東から
76. A0・A1 築地 (SD80010・80014) 完掘状況 南東から
77. A1 築地 (SD80010) 断面 東から
78. A1 築地 (SD80010) 中層土師質土器 (31) 出土状況 東から
79. C1 築地 (SD80010) 中層瓦出土状況 西から
80. C1 築地 (SD80010)・SD80009 完掘状況 西から
81. C1 築地 (SD80010) 中層瓦 (60) 出土状況
82. A0・A1 区 5層上面検出の柱穴群 南から
83. A3 付近 SD80001・80008 完掘状況 南から
84. A6 付近 SD80002・80003 完掘状況 南から
85. A1 付近 SD80002 完掘状況 (奥に SE80001) 南から
86. SE80001 全景 西から
87. SE80001 上層断面 東から
88. SE80001 上層遺物出土状況 東から
89. SE80001 下層曲物検出状況 西から
90. SE80001 底面の礫群 西から
91. C5 付近 SD80001 全景 西から
92. C5 付近 SD80001 断面 西から
93. A10・11 区西壁土層 南東から
94. C1 北壁・東壁土層 南から
95. E4 以西完掘状況 東から
96. E5 以南全景 北から
97. K5SD81012 全景 北から

98. G5 東壁土層 西から
99. A5 付近 SD81008 最上層検出状況 東から
100. A5 付近 SD81008 上層検出状況 東から
101. A5 付近 SD81008 上層遺物出土状況 南東から
102. A5 付近 SD81008 上層完掘状況 東から
103. A5 付近 SD81008 下層完掘状況 東から
104. A6・A7SD81008 下層完掘状況 東から
105. 調査区全景 南西から
106. 調査区全景 南から
107. 調査区中央部（東部）全景 北から
108. 調査区中央部（西部）全景 北から
109. SA84001 全景 北から
110. SA84001 全景 南から
111. SD84001 全景 南東から
112. SD84002（南部）全景 南西から
113. SD84002（南部）全景 北西から
114. SD84002（中部）全景 西から
115. SD84002（中部）断面 北から
116. SD84002（北部）断面 南から

表目次

- 表 1 本書で報告する讃岐国府跡調査一覧
表 2 整理作業の体制
表 3 讃岐国府跡における発掘調査一覧
表 4 各低地帯の変遷
表 5 SD80010 瓦組成グラフ
表 6 SD80010 瓦組成表
表 7 瓦組成表
表 8 讃岐国府跡中国磁器出土点数と県内・外主要遺跡との比較
表 9 調査次数毎の中国磁器組成
表 10 中国磁器組成表

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯・経過

1. 発掘調査の経緯・経過

讃岐国府跡における発掘調査は、昭和52年2月、従来から讃岐国府の所在が推定されていた坂出市府中町本村5059-2番地において宅地造成が計画されたことから、坂出市教育委員会が確認調査を行った（1次調査）。1次調査では8世紀末葉から9世紀前葉の遺物包含層が検出され、須恵器を主体とした遺物が多く出土した。これまで、主に文献・地名・地割から推定されてきた讃岐国府跡において古代の包含層を確認されたことを受けて、香川県教育委員会は昭和52年度に国庫補助事業として遺跡の内容確認と今後の保護措置の検討資料を得ることを目的とした確認調査を実施することとなり、昭和52年12月から昭和53年3月までの間、発掘調査を実施した（2次調査）。2次調査では、中・近世の溝・土坑を始めとして、1次調査で確認された包含層（当時は段差状遺構と呼称）の存在を確認し調査を終えたが、国府域の広がりや構造を把握するためには継続して確認調査が必要と判断されたことから、昭和53年度から昭和56年度までの間、国庫補助による確認調査を継続した。昭和52年度2次調査から昭和53年度4次調査、昭和54年度6次調査から昭和56年度は保存目的の確認調査であり、昭和53年度5次調査と昭和59年度は宅地造成に伴う確認調査である。

昭和53年度から昭和56年度の3～8次調査では、6次調査の8～9世紀の大型総柱建物や7次調査の9～10世紀築地基壇状遺構の検出、各年度における硯・施釉陶器・多量の古瓦や中世の輸入陶磁器など国府・留守所に関係した遺構・遺物が確認されるなど、讃岐国府の存在を証明する良好な資料が得られたが、各年度の調査成果から導き出された課題を検討した上で次年度の調査地点を決定することは行われず、土地所有者の発掘調査の承諾が得られた箇所について調査を展開したことや、整理作業が実施されなかったため調査成果の公表や共有が図られなかった。この点は大いに反省すべきことであり、坂出市教育委員会が宅地造成に伴って実施した昭和63年度の10次調査から平成19年度の26次調査の成果検討や、平成21年度に県教委によって再開された確認調査においても、調査地点の選定等に支障を来すこととなった。

2. 整理作業の経緯と経過

平成21年度より再開した県教委による確認調査が進むにつれて、過去の調査成果の検討の必要性が更に高まった。特に平成23・24年度に国府域南側で実施した29・30次調査において、正方位をもつ7世紀代の大型建物や8世紀から10世紀の区画・建物群の一角が確認されるに及んだ。平成25年度からは29・30次調査の対象となった国府域南部のエリアを中心として史跡指定を目的とした確認調査を実施し、合わせて未了であった既往の調査の整理作業を行

調査回数	年度	調査期間	調査面積 (㎡)	調査地点	調査主体	調査担当者
1	昭和51年度	昭和52年2月	-	府中町 5059-2	坂出市教育委員会	川畑 迪
2	昭和52年度	昭和52年12月15日～昭和53年3月31日	427	府中町 5059-2 5088-1	香川県教育委員会・坂出市教育委員会	松本敏三
3	昭和53年度	昭和53年10月2日～昭和54年1月13日	108	府中町 5181	香川県教育委員会	唐木裕志・大山真充
4	昭和53年度	昭和53年10月2日～昭和54年1月13日	193	府中町 5133-1	香川県教育委員会	唐木裕志・大山真充
5	昭和53年度	昭和53年12月4日～12月27日	56	府中町 5117-1	香川県教育委員会	唐木裕志・大山真充
6	昭和54年度	昭和54年12月6日～昭和55年3月31日	493	府中町 5138	香川県教育委員会	牟礼良典・斎藤賢一・渡部明夫
7	昭和55年度	昭和55年11月1日～昭和56年3月31日	396	府中町 5087-1	香川県教育委員会	中野 保・藤好史郎
8	昭和56年度	昭和56年12月1日～昭和57年3月31日	462	府中町 5193-1・5192-2	香川県教育委員会	斎藤賢一
9	昭和59年度	昭和59年5月24日～6月12日	120	府中町 5133-4	香川県教育委員会・坂出市教育委員会	東原輝明

表1 本書で報告する讃岐国府跡調査一覧

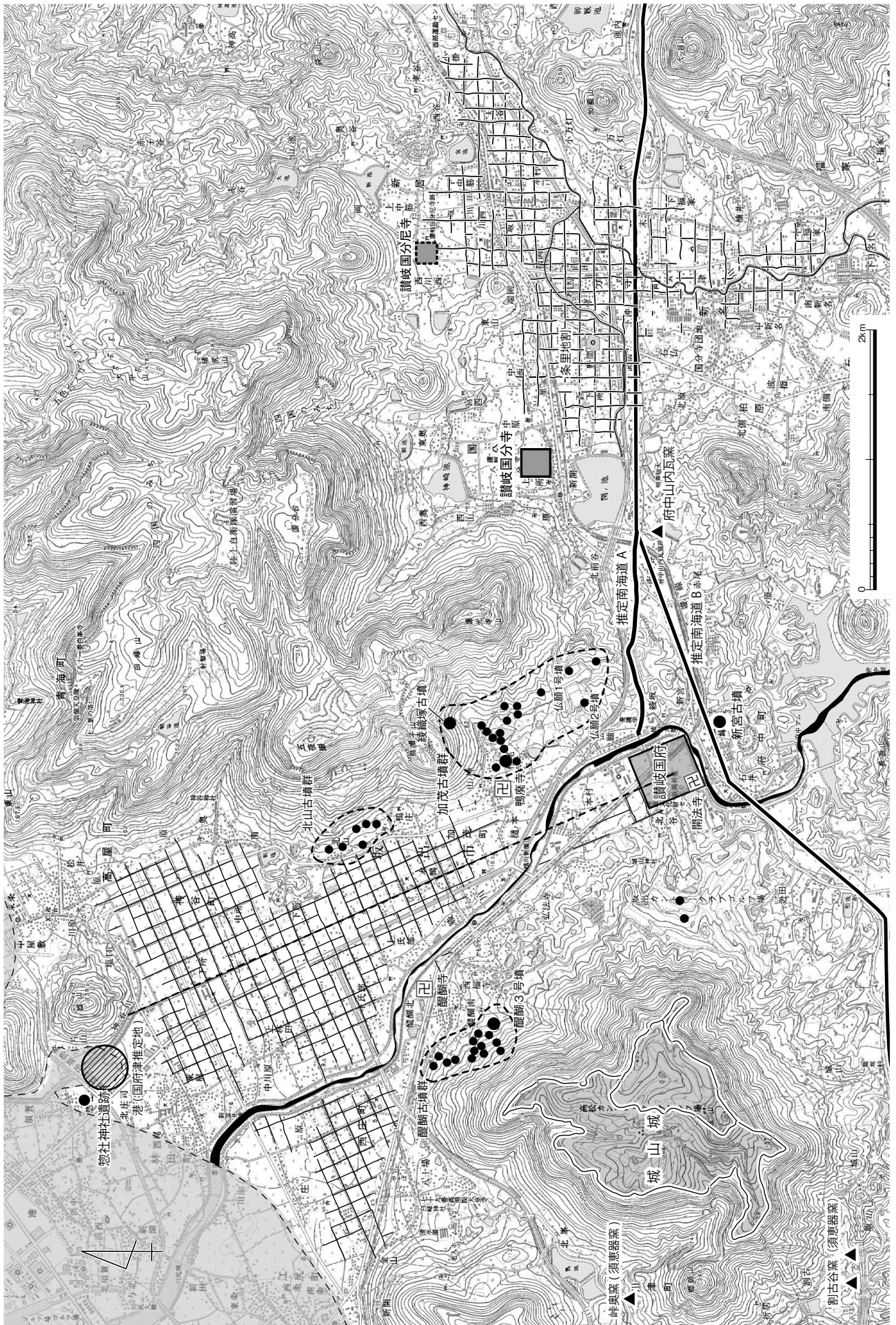


図2 讃岐国府周辺の歴史的環境

れている。東側の大内郡から刈田郡までの11郡の大半は、南部の阿波国境となる阿讃山地から瀬戸内海へ延びた南北に細長い郡域が設定され、その中央部を駅路である南海道が貫いている。『和名類聚抄』(935年)で讃岐国府は阿野郡(現在の坂出市、高松市国分寺町、綾川町)に所在すると記す。後の『白峰寺縁起』(1406年)には「国府甲知郷鼓岳」とみえ、『寛永十年讃岐国絵図』での甲知郷は、府中・新宮・逃田・陶村・畑田とされ、この甲知郷は『和名類聚抄』の甲智郷の遺称地名と考えられるが、国府所在地を絞り込むには広域過ぎる。駅路や国府津との関係など交通アクセスや、国府内に所在した開法寺の存在、これまでの考古学的資料の在り方からみて、旧阿野郡内でも現在の坂出市府中町本村を中心としたエリアに国府を比定することは妥当であろう。

讃岐国府は、旧阿野郡域を北流する中規模河川である綾川の下流域に発達する矮小な沖積平野に立地する。ここでは、この沖積平野を「綾北平野」と仮称しておく。細かくみると西側を城山、東部を五色台山塊、南部に低丘陵に囲まれた綾北平野の南端部の標高約15～18mの段丘・扇状地面上に立地する。国府周辺では綾川が北へ鋭角に屈曲する流路形状をとることから、国府域の存在を間接的に示すものとして注目された。明治24年歩兵第十二聯隊/陸地測量部作成地図には現在の流下形状を示すが、この河川形状は近代以降の河川改修である可能性が高い。

1. 国府設置前後の綾北平野の政治的動向

大型横穴石室墳・古代山城(図3.4)

古墳時代後期の6世紀代は古墳築造が極めて低調であり、TK209型式併行期の7世紀前葉には、城山、五色台山塊の裾部を中心として、大型横穴式石室墳が相次いで築造される(図3)。その先駆けとなるのは新宮古墳であり、その後醍醐3号墳、穴薬師(綾織塚)がやや遅れて築造されるが、これらは玄門立柱をもつ石室形式と規模、方墳という共通性をもっている(香川県埋文セ2013)。また、詳細な記録作成が行われていないものの、穴薬師(綾織塚)古墳が含まれる加茂古墳群の山ノ神2号墳、醍醐3号墳が含まれる醍醐古墳群には醍醐1・2・7号墳などの類似する石室形式・規模をもつ大型横穴式石室墳が存在していることから、7世紀前葉には同時多発的に多くの大型横穴式石室墳が築造されたと考えられる。また、これらはTK217併行期の7世紀中葉には新規築造は停止し追葬期間となり急速に古墳築造が停止する。古墳築造が停止した後、若干の時間差をもって7世紀後葉には古代山城の城山城が築城される。城山城は、神籠石系の古代山城であり、土塁・石塁による二重の城壁をもつ複郭構造をもち、内郭には城門(4上段)・水門が残り、外郭の総延長距離は約4.2kmに及ぶ。発掘調査は行われていないものの、過去に城内西部の平地地より7世紀末葉の須恵器が一括して出土(図4上段)しており、屋嶋城など朝鮮式山城と同様に7世紀後葉の築城時期を推定できる。城山城の廃城時期については資料がみられないが、門礎と考えられる「ホロソ石」「マナイタ石」がすべて据え付け途上で放棄されており築城未了とみられることから、讃岐国府が設置される8世紀には廃城となっていたと考えられる。

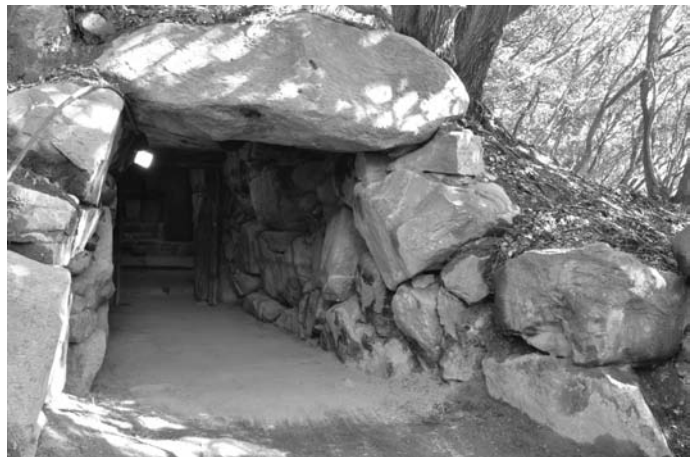


写真1 綾織塚(穴薬師)古墳横穴式石室



写真2 城山城門

古代寺院（図4）

綾北平野には少なくとも開法寺・鴨廃寺・醍醐寺の古代寺院が知られている。特に開法寺は、『菅家文草』にみられる国府内の古代寺院として、讃岐国府とともに古くから知られていた。また、開法寺は「国府寺」「国府付属寺院」の典型例として取り上げられることも多い（角田 1938. 1958. 藤井 1978. 木下 1983.）。古くは『全讃史』（1840年）に弘法寺・妙楽寺とともにみえ、大正期の岡田唯吉による調査にも塔跡の高まりと3基の礎石の存在が報告されている（岡田 1942）。『府中村史』（1961年）には、現在の開法寺池から石仏が出土したと記す。昭和36年の開法寺池堰堤内の調査、昭和45年の塔基壇の発掘調査（川畑・松本 1977）以降、坂出市教育委員会による11次に及ぶ調査が行われており、塔・講堂・僧坊の存在が確認されている。開法寺池内から石仏が出土していることからみて、伽藍は西方に広がることが予想される。開法寺の創建年代については、豊浦寺系とされる十葉素弁蓮華文軒丸瓦（図4下半部上段）などから白鳳期でも古い段階の7世紀第3四半期が想定されてきたが、弁区が平滑になって

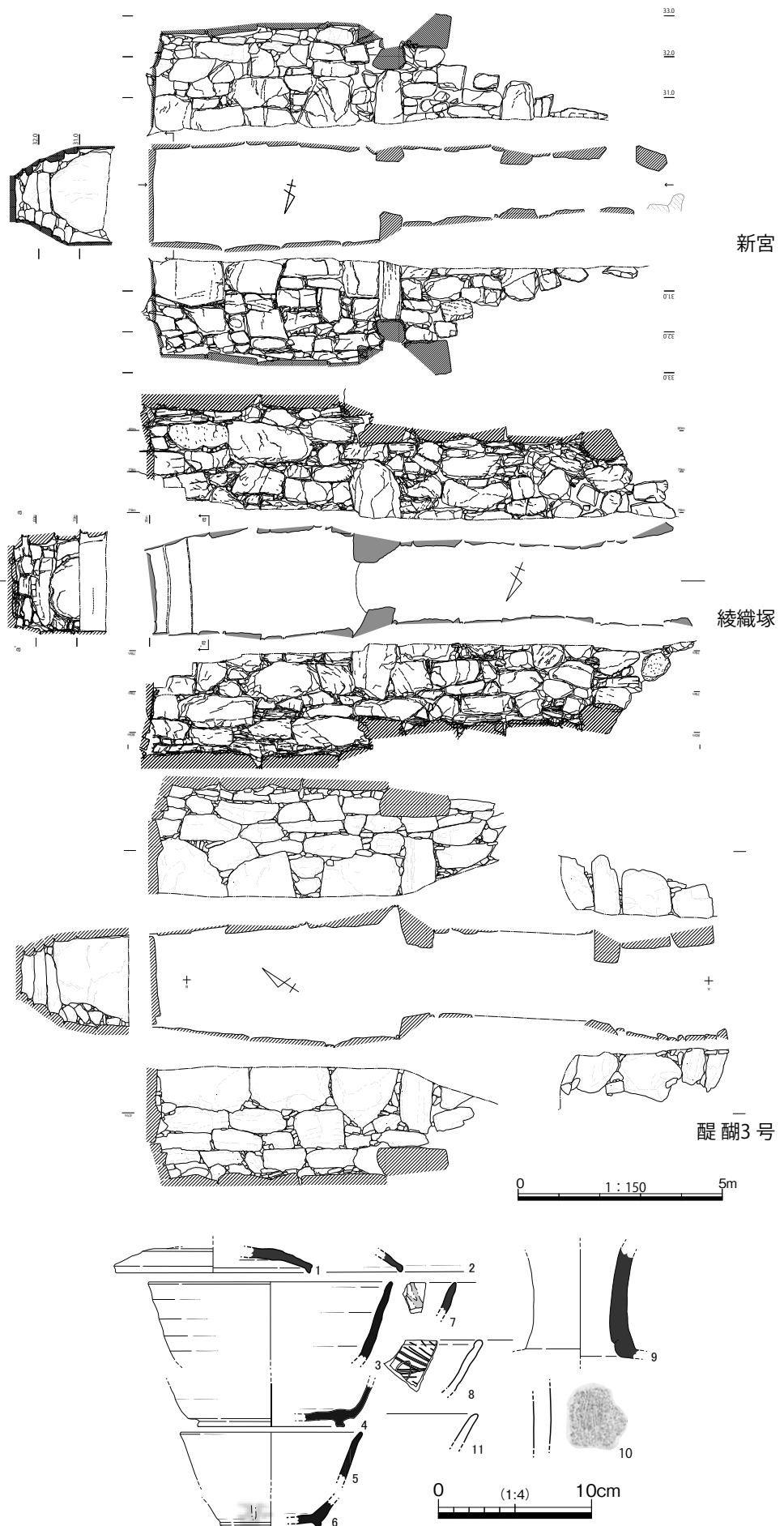


図3 綾北平野の大型横穴石室墓・惣社神社遺跡出土遺物

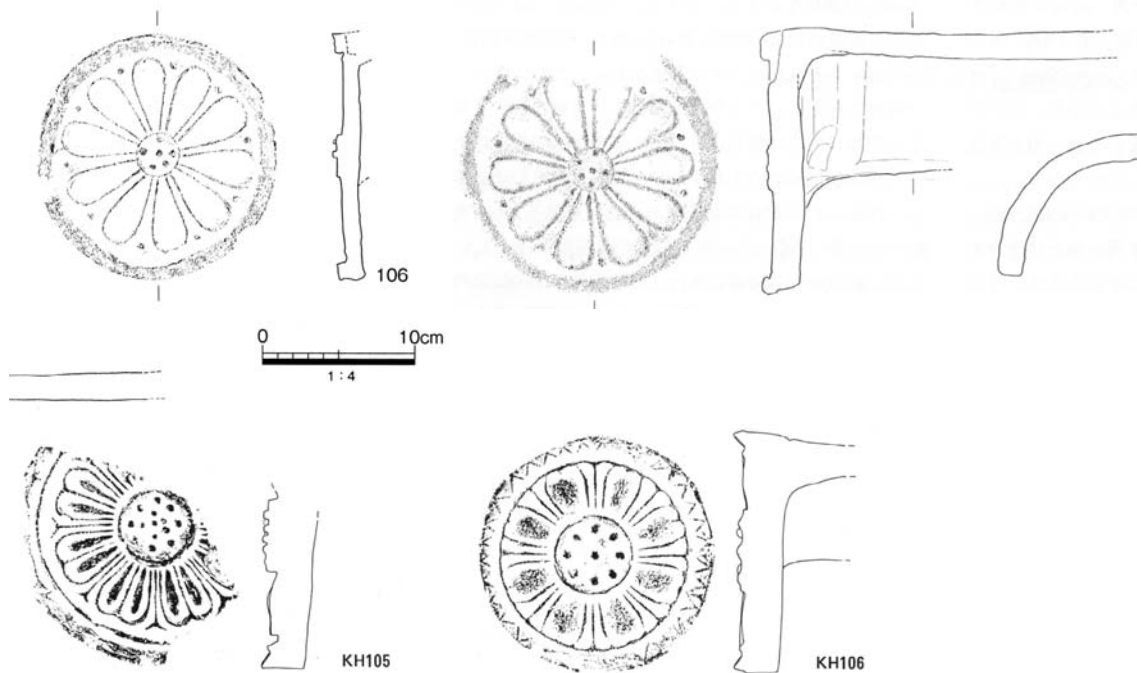
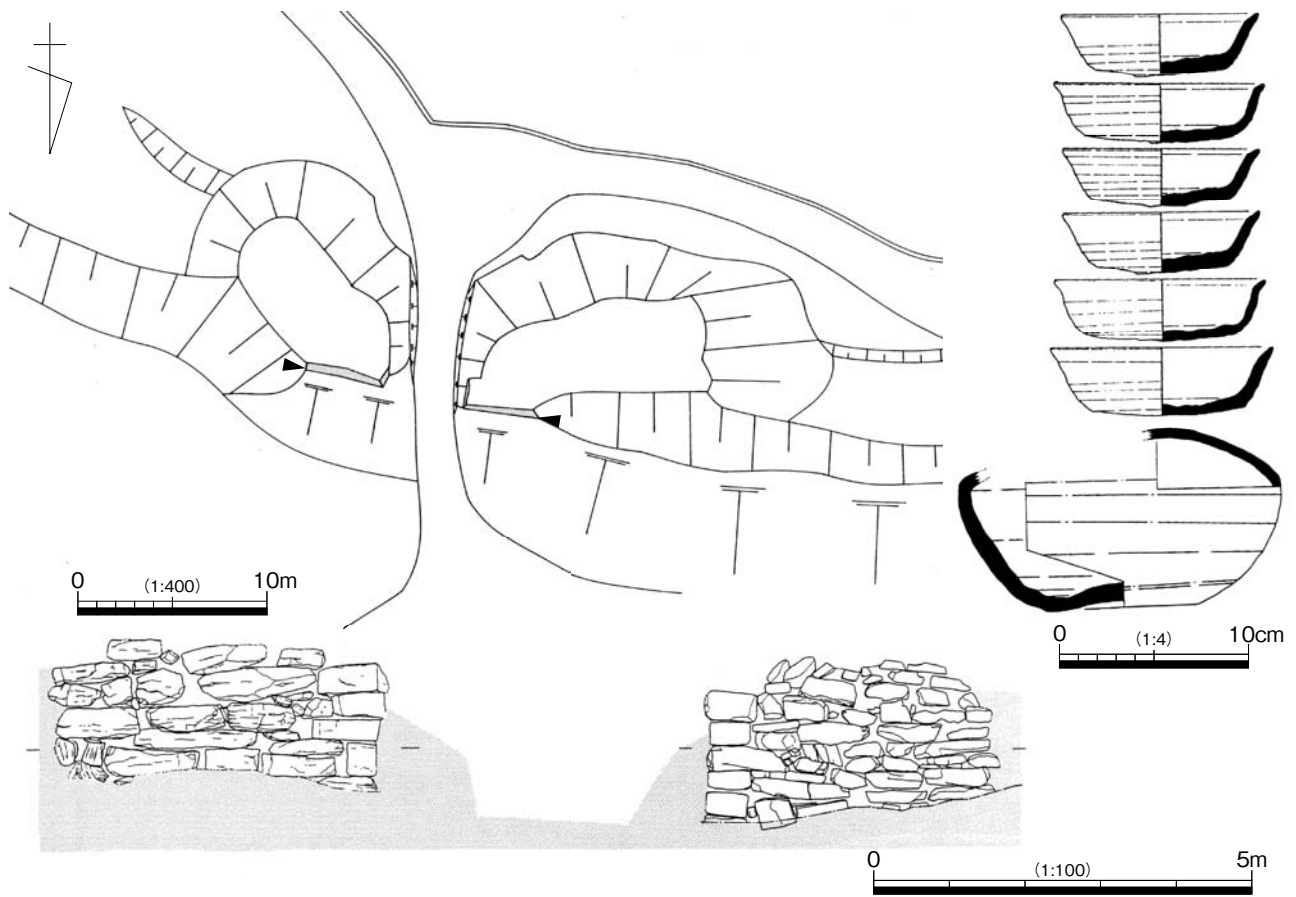


図4 城山城城門と出土遺物・開法寺出土軒瓦

おり退化が進み、出土点数も極めて少量に止まる。地方における豊浦寺系の年代が問題となる。昭和45年の塔跡の調査時には、塔礎石及び基壇方位が周辺の条里地割と方位を違えることが指摘され、白鳳期創建とされたが、渡部明夫が検証した結果（渡部1983）、これらの方位は条里地割に合致することが明らかになり、近年の調査では塔を含めた伽藍建物が10～11世紀に廃絶し、数回の改修を経ていることが明らかになっている。下層に創建時の遺構が埋もれている可能性が残るが、現在遺存している伽藍建物は、条里地割に合致していることや比較的多く出土している八



写真3 鴨廃寺塔心礎

に古瓦が散布している。鴨廃寺と同様に川原寺系の八葉複弁蓮華文軒丸瓦から奈良時代初頭の創建（高松市歴史資料館 1996）が推定されているが、鴨廃寺と同様に地方における川原寺系の年代観の検討如何によっては今後時期が動く可能性がある。開法寺・鴨廃寺と同様に8世紀前葉以降の年代を想定した方がよいだろう。

2. 条里地割の形成と駅路（図1.3）

綾北平野北部には、北24°西の条里地割が明瞭に遺存する（図2）。讃岐における条里地割の形成については、7世紀末葉から8世紀初頭の年代観が想定されている（森下1997）。綾北平野において、条里坪界溝の調査は進んでいないが、讃岐国府跡における地下以降の確認状況から、綾北平野においても条里地割の施工は7世紀末葉から8世紀初頭に行われたと考えられる。出石・木下らの先行研究によって指摘された条里地割の南北基準線とされた「馬さし大貫（往還）」をはじめ、その一部は讃岐国府周辺にも確認できる（図1）。また、この「馬さし大貫」のライン上となる讃岐国府跡28次調査において、8～10世紀に比定され道路側溝（幅員6.5m）・路盤の可能性ある南北溝・石敷き遺構を検出しており、出石・木下が指摘したように国府から延びる南北路が存在する可能性がある。（香川県教委2011）。「馬さし大貫」の北端部付近には、東西方向に砂帯が発達し、その砂帯南部が潟湖状の低地となっているが、砂帯先端部付近の惣社神社遺跡からは、8・9世紀段階の須恵器・畿内系土師器を多量に採集することができる。発掘調査は実施されていないため詳細は不明ながら、港湾施設（国府津）の存在を暗示している可能性がある（図3下段）。

駅路である南海道は、讃岐国府西側の国分寺町側にみられる条里余剩帯から、綾坂を越えて「セイリュウ」と呼ばれる東西路で讃岐国府内に入り、先の「馬さし大貫」と十字街を形成とする案（木下1975. 推定南海道A）、讃岐における里界線と条里余剩帯（南海道）が対応関係から、綾坂を越えて木下が想定した東西ラインよりも約150m南側に想定する案（金田1995）、国分寺所用瓦窯である府中山内瓦窯近傍の前谷地区に局所的に存在する条里地割から新宮古墳北側を通り綾川南岸に従来から甲智駅屋が想定されている石井地区を抜け額坂峠へ向かう案（推定南海道B）がある。綾坂を越えるルートは近世の丸亀街道、前谷から石井へ至る綾川南岸ルートは近世の伊予街道にほぼ重複し、江戸期検地帳においても「大道」「往還」等の古地名が多くみられるが、それ以前に遡及させる資料を欠いている。綾坂越えのルートで讃岐国府に入る場合、それより西側は城山東麓の山地が障害となる。駅路敷設の年代については、丸亀平野における四国学院大学構内遺跡における7世紀末葉から8世紀初頭の検出事例（善通寺市教委2003）や、高松平野や丸亀平野にみられる条里余剩帯の存在及び里界線との対応関係（金田1988）などからみて、駅路敷設が条里地割に先行して行われたと考えられる。条里地割・駅路の成立年代は、讃岐国府の成立とも深く関わるものであり、今後とも検討する必要がある。



写真4 開法寺塔基壇と礎石

3. 国分寺・国分尼寺・国分寺瓦屋（府中山内瓦窯）

讃岐国分寺・国分尼寺は、讃岐国府が所在する旧阿野郡内に造営されている。讃岐国府から推定南海道を通り谷部と小丘を越え約2 km東へ進むと高松市国分寺町の小規模な谷底低地に至る。この国分寺町側の谷底低地にも綾北平野とは方位の異なる北²°西の条里地割が広がっており、国分二寺は低地北側の五色台山塊に寄った位置に造営されている。近年の研究では、国分寺域の四至が条里阡陌線と合致することや、国分尼寺も確認調査が進み南北方向で並列する金堂・講堂・尼坊の中軸線が条里阡陌線と合致することが明らかになっている（木下1997. 渡邊2014）。伽藍配置等については、各報告書を参照していただきたいが、近年の瓦の研究により国分寺は8世紀中葉の小規模伽藍の整備を経て8世紀後葉に本格的な造営が行われたと考えられている（渡部2006）。国分尼寺は、国分寺に遅れ8世紀後葉に造営が開始され、8世紀末葉には完了したとする（渡部2006）。国分二寺の造営年代は国府における瓦葺建物の出現年代とも関係して今後とも検討が必要である。



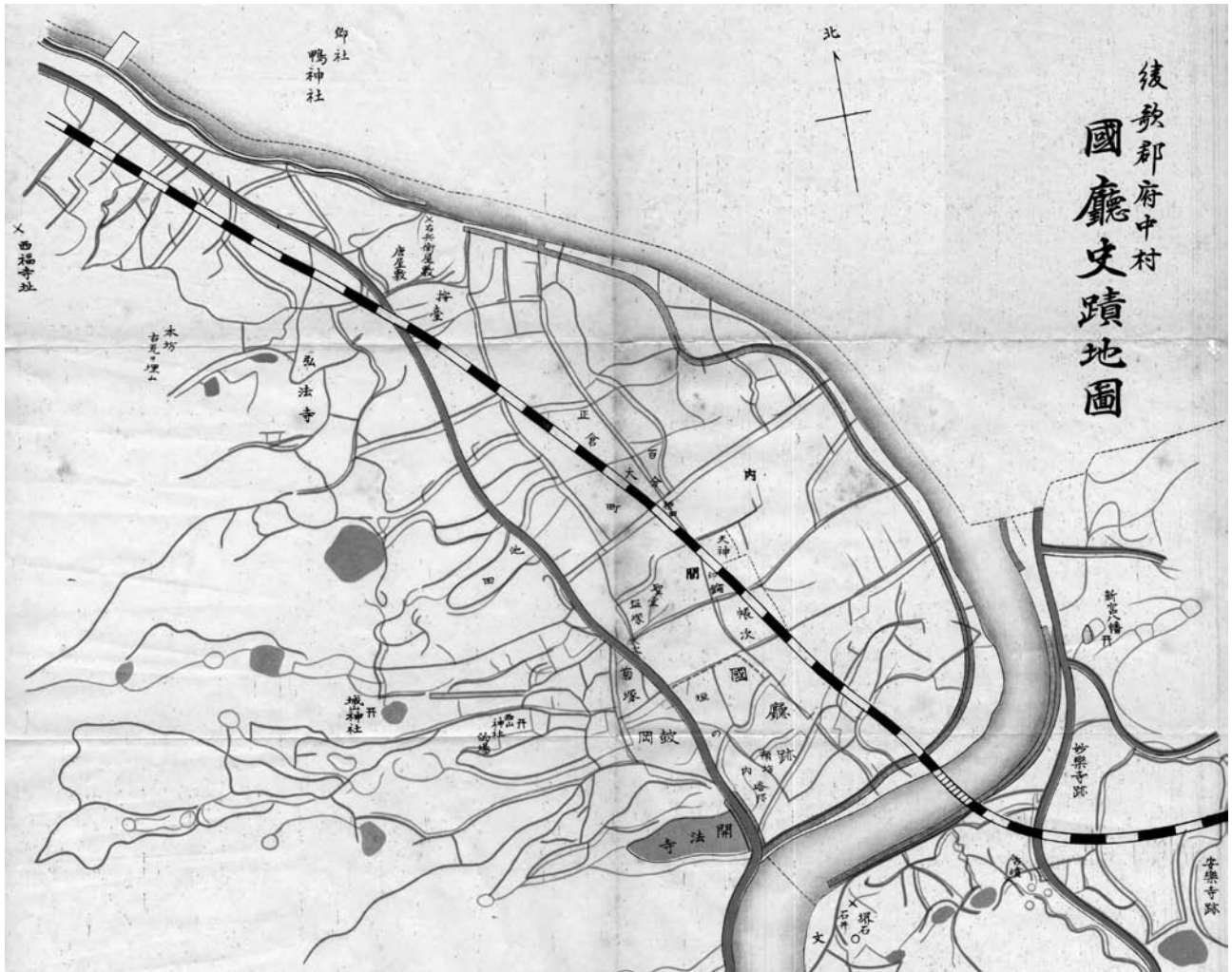
写真5 史跡山内瓦窯

国分二寺の瓦屋となるのが府中山内瓦窯である。府中山内瓦窯の位置は、国府と国分二寺のほぼ中間に位置し、上記南海道の2説のいずれを採るにしても駅路沿に設置されていることになる。国分二寺の造営監理や資材・焼成瓦の運搬に駅路沿に構築地点が選定された可能性が高い。大正11年の『史蹟名勝天然紀念物調査報告書1』において10基の瓦窯が確認されていたが、近年の研究によって14・15基の窯体の存在が推定されている（渡部2006）。窯体には、有段窖窯2基に加えて有牀式平窯が2基確認されているが両者の焼成型式・年代観は明らかではない。府中山内瓦窯が国分二寺専用の瓦屋であることからみて、有牀式平窯は8世紀後葉である可能性は高く、讃岐国で最も遡る事例であろう（渡部2006. 渡邊2009）。

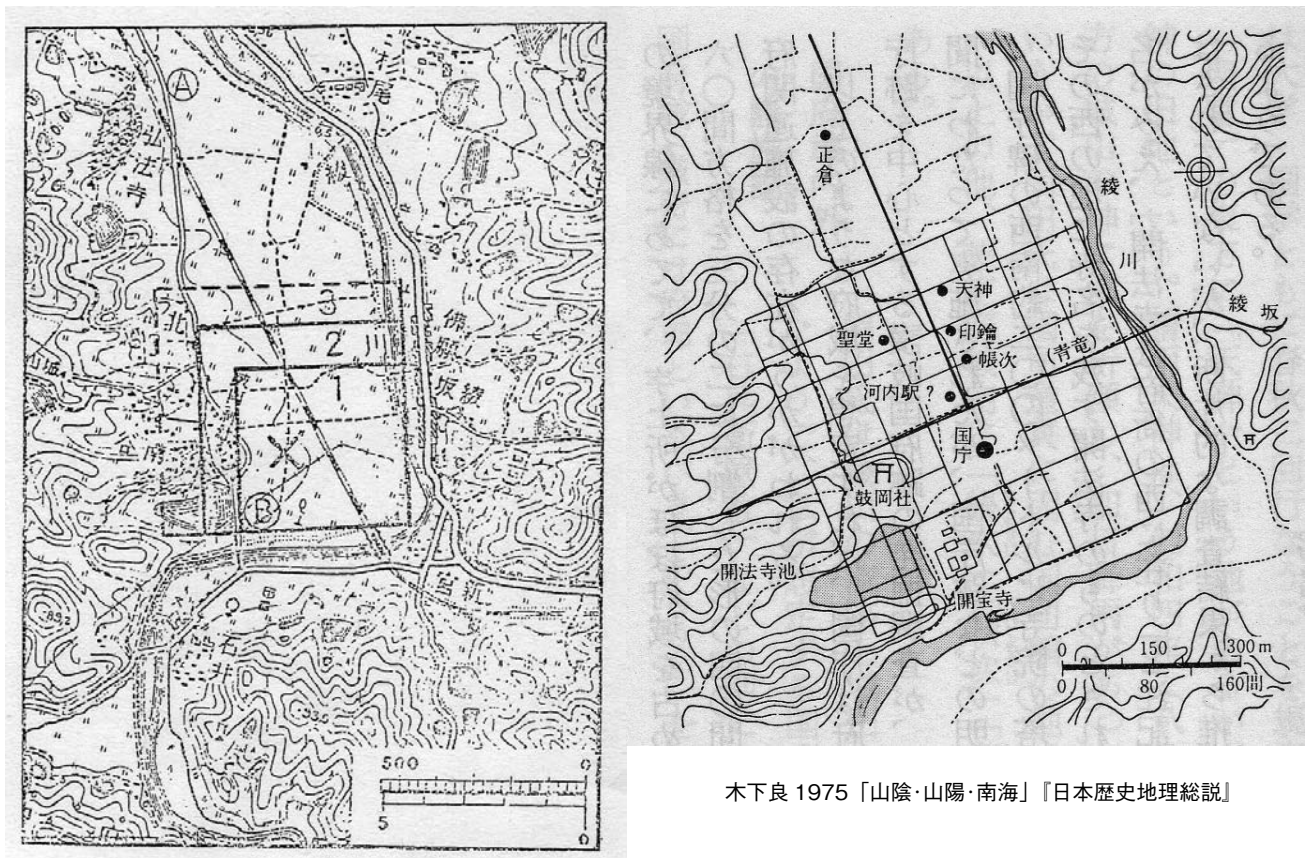
第2節 讃岐国府跡の研究史（図5）

讃岐国府の所在地を示す史料は、『和名類聚抄』（935年）に「国府阿野郡に在り」、高野山の学僧である道範の讃岐流配（1243年）の際の日記『南海流浪記』には国府から守護所（宇多津）まで2里という記載がみられるが、旧阿野郡内での国府所在地の具体的な絞り込みは難しい。

讃岐国府をめぐる研究については、江戸期から明治・大正期の地名・文献を中心とした考証・研究にはじまる。江戸期においては、当初、18世紀中葉以前に成立した『玉藻集』『南海治乱記』等では、国府そのものではなく国司であった菅原道真の館を阿野郡滝宮に比定することからはじまり、18世紀中葉以降の『綾北問尋鈔』『全讃史』『讃岐名所図会』等では、府中村に国府が推定される。後者は府中そのものの地名や、『菅家文草』を引用した開法寺や府中村内の地名考証が付加されはじめる。明治期の研究では『香川懸史』（1909）に「讃岐国庁跡 府中村鼓岡ノ東南ニアリ」と記され、江戸末期の考証を継承する。大正期には、地元漢学者の赤松景福による『香川新報』の1916～1917年の連載記事に府中村への国府所在地推定の根拠として印鑰・聖堂・帳次などの地名を挙げて紹介した。1919年の史蹟名勝天然紀念物保存法の成立後は、香川県史蹟名勝天然紀念物調査会による調査が行われ、その成果は『史蹟名勝天然紀念物調査報告』（1929年）に掲載されるが、同調査会の委員の岡田唯吉は1926年に建立された讃岐国庁顕彰碑の落成に際して講演を行い、府中村への讃岐国府所在地比定の根拠として上記の国府関連の地名研究を挙げ、地図上でこれらの地名の分布状況から国府域の広がりやを明示するとともに、国庁について『菅家文草』の記載から開法寺池東側に具体的な所在地点を推定した（図5 岡田1942年に再録）。岡田の研究は、この段階での江戸期以来の地名研究を総括するものであり、その後の歴史地理学を中心とした研究に大きな影響を与えた。以上、江戸期から大正期にかけての考証・研究は、既刊の文献において詳細に論じられているのでそちらを参照していただきたい（香川県埋文セ2010）。



岡田唯吉 1942 「讃岐國府遺蹟考」 『鎌田共済会叢書第四輯』 鎌田共済会調査部



木下良 1975 「山陰・山陽・南海」 『日本歴史地理総説』

藤岡謙二郎 1958 「都市と交通路の歴史地理学的研究」

図5 讃岐国府推定図

乗松 2010)。

昭和になると 30 年代以降に歴史地理学の研究（藤岡 1958. 出石 1974. 木下 1975 ほか）が先行して行われ、50 年代以降は発掘調査が主体となる。藤岡謙二郎は、これまでの地名研究に加えて、讃岐国府周辺で鋭角に北へ流路変更する綾川の屈曲した形状に着目し、方 4・5・6 町の国府域を想定し、方 5 町が最も適合するとした（図 5 藤岡 1958）。出石一雄は、讃岐国府が所在する綾川下流に分布する条里地割を検討し、国府域の中央部を南北に通過する地割が綾北平野の里界線や「馬さし大貫」と呼称される古道に相当することや、岡田唯吉が目した国府域の東西方向の地割が条里壱阡陌に合致しないことから、国府設置以後に条里地割が施工され、両者が密接な関係をもつことを指摘した（出石 1974）。木下良は岡田が総括した地名研究や出石の進めた条里地割の研究を統合した上で、新たな視点として国府域の東方の綾坂から鼓岡社北側への東西路を駅路として馬さし大貫との十字街を形成する地点を中心点と推定し、周辺の地割や藤岡が目した綾川の屈曲する流路形状から、40 間方格を基準とした方 8 町の国府域を想定し、十字街の南側の現在の讃岐国庁顕彰碑が立つ付近に方 2 町の国府域が所在することを述べた（図 5 木下 1975. 1977）。

昭和 50 年代からは、本書で報告する香川県教育委員会を主体とした確認調査が開始され、地名研究や歴史地理学研究で提示されたモデルの検証が開始される。渡部明夫は、昭和 52 年度から昭和 56 年度までの発掘調査成果を検討し、国庁などの国衙中枢を形成する遺構があまり確認されていないが、5 次調査の大型総柱建物、6 次調査の築地基壇遺構、硯・緑釉陶器の多量出土、緑釉瓦（軒先瓦）の出土からみて、讃岐国府の所在地そのものは揺るがないが、発掘調査面積の制約から詳細な構造や木下が指摘した条坊の存在については今後の課題としつつ、6 次調査の築地基壇遺構の存在から木下が想定した国庁の位置を国府域の北側に求めようとした（渡部 1983）。昭和 50 年代の確認調査後に刊行された『新編香川叢書考古篇』（1983）『香川県史』（1988 年）では、確認調査で国衙関連の遺構・遺物は検出されて

回数	年度	機関	面積	主たる遺構	主たる遺物	文献
1	昭和 51	坂出市教委		平安整地層、鎌倉時代溝	須恵器、黒色土器、土師質土器	-
2	昭和 52	香川県教委	427	平安時代整地層、鎌倉時代溝、鎌倉時代土坑	須恵器、黒色土器、土師質土器、緑釉陶器、古瓦	1
3	昭和 53	香川県教委	108	平安時代大溝・方形柱穴	須恵器、土師質土器	1・2
4	昭和 53	香川県教委	193	奈良～平安時代建物、鎌倉～室町時代建物、溝、井戸	須恵器、土師質土器、讃岐国府式軒丸瓦、古瓦	1・2
5	昭和 53	香川県教委	56	道路遺構（丘陵裾カット面）柱穴	須恵器、土師質土器、緑釉陶器、古瓦	2
6	昭和 54	香川県教委	493	飛鳥時代正方位溝、奈良時代総柱建物、平安時代井戸	須恵器、土師質土器、緑釉陶器、灰釉陶器、讃岐国府式軒丸瓦、古瓦	1・3
7	昭和 55	香川県教委	396	奈良時代溝、平安時代築地、平安時代末井戸	須恵器、土師質土器、緑釉陶器、越州窯系青磁、古瓦	1・4
8	昭和 56	香川県教委	462	奈良～平安時代溝、鎌倉～室町時代溝、柱穴	須恵器（墨書）、土師質土器、緑釉陶器多数、山茶碗	1・6
9	昭和 59	香川県教委坂出市教委	120	平安時代大溝、柵列（掘立柱塀）	須恵器、緑釉陶器、古瓦	7
10	昭和 63	坂出市教委	45	平安時代溝・井戸・鎌倉時代柱穴群	須恵器、土師質土器、瓦器、古瓦	8
11	昭和 63	坂出市教委	25	奈良～平安時代道路側溝	土師質土器	8
12	平成 2	坂出市教委	36	谷地形、古代包含層	古瓦多数	9
13	平成 3	坂出市教委	26	平安時代末～鎌倉時代柱穴	土師質土器片	10・27
14	平成 3	坂出市教委	4	-	須恵器、土師質土器	10・27
15	平成 3	坂出市教委	180	平安時代溝、鎌倉時代柱穴群	須恵器、土師質土器、青磁碗	10・27
16	平成 4	坂出市教委	184	飛鳥時代建物、奈良時代建物、平安末～鎌倉時代柱穴群、井戸	須恵器、土師質土器、国府式軒丸瓦、古瓦	11・28
17	平成 6	坂出市教委	17	-	-	12・29
18	平成 6	坂出市教委	6	飛鳥時代溝、奈良時代方形柱穴	須恵器、畿内系土師器	12・29
19	平成 6	坂出市教委	7	-	-	12・29
20	平成 6	坂出市教委	7	平安時代大溝、柱穴	須恵器、土師質土器	12・29
21	平成 7	坂出市教委	39	奈良時代溝、平安時代？落ち込み、鎌倉時代柱穴	須恵器、土師質土器	13・30
22	平成 11	坂出市教委	27.5	平安時代柱穴群、鎌倉時代土坑墓	土師質土器、青磁碗	14・31
23	平成 13	坂出市教委	16	平安末～鎌倉時代柱穴群、集石遺構	須恵器、土師質土器、古瓦	15・32
24	平成 15	坂出市教委	2	遺物包含層	須恵器、黒色土器	16・34
25	平成 16	坂出市教委	10	-	-	17・35
26	平成 19	坂出市教委	4.5	鎌倉時代包含層	須恵器、土師質土器、古瓦	18・36
27	平成 21	香川県教委	45	平安時代末柱穴、鎌倉時代建物	須恵器、土師質土器、青磁碗、白磁碗	19・23
28	平成 22	香川県教委	38	奈良時代大溝、道路遺構、平安時代石列、大溝	須恵器、土師器、緑釉陶器、古瓦	20・22・24
29	平成 23	香川県教委	253	飛鳥時代大型建物、奈良時代溝、平安時代築地	須恵器、土師質土器、緑釉陶器、讃岐国府式瓦、古瓦、石帯	37
30	平成 24	香川県教委	255	奈良～平安時代方形区画、建物、鎌倉時代柱穴群、溝	須恵器、土師器、灰釉、緑釉陶器、古瓦、墨書土器	37
31	平成 25	香川県教委	220	奈良～平安時代大型建物、大溝	須恵器、土師器、灰釉、緑釉陶器、古瓦	38
32	平成 26	香川県教委	408	平安時代大型建物、区画溝、大型土坑、低地帯	須恵器、土師器、灰釉、緑釉陶器、古瓦、墨書土器	-

表 3 讃岐国府跡における発掘調査一覧

いるものの少量に止まり、現状で国府域・国庁域を確定するまでは至っておらず、更なる確認調査が必要としている。昭和 50 年代の確認調査の後の平成 19 年度までは坂出市教育委員会による宅地造成等に伴う確認調査が行われたが、この間、讃岐国府跡に言及した論考はみられない。

こうした状況の中、平成 21 年度から香川県教育委員会によって讃岐国府跡の実態解明を目指した讃岐国府跡探索事業が開始された。調査は、坂出市府中町のみならず綾川下流域の坂出市加茂町・林田町・神谷町・高屋町まで広げ、国府に関係した古地名、遺物分布、地形調査を実施するとともに、小規模ながら確認調査を再開した。国府に関係した古地名は府中町以外で採集できなかったが、府中町内でもこれまでの研究で国府関連とされた「印鑰」「正惣」などが江戸末期の検地帳にみられず、その多くは近代以降に生成した可能性が判明するなど地名から遡及可能な限界性が明らかになった。また、讃岐国府成立の歴史的環境を考えるために、新宮古墳・穴葉師（綾織塚）古墳等の 7 世紀前半代の大型横穴式石室墳の測量調査を実施した。これらの調査成果については、既刊の調査報告書を参照していただきたい（香川県埋文セ 2011. 2013. 2014）。

平成 21 年度から再開された確認調査が進む中、佐藤竜馬は既往の調査成果を俯瞰し、7 世紀から 13 世紀までの讃岐国府の遺構配置からみた国衙配置の変遷モデルを提示した。同一地点に形成されなからとも、奈良期から平安後期の点在する国衙から、平安末期から鎌倉期までの凝集する屋敷地などの景観が復元され、讃岐国府特有の軒先瓦や古瓦の出土状況の偏在性、輸入陶磁器や燭台形土器の多量出土の指摘など、遺構・遺物に目配りした初めてのモデルであり、今後の調査計画に大きな影響を与えた（佐藤 2012）。

以上、極めて簡略化した形で讃岐国府跡の研究を振り返った。これからも数多くの研究が行われると考えられるが、その際に考古学的事実の提示・解釈がより一層重要になることは疑いない。

1. 香川県教育委員会 1982 『讃岐国府跡－国庫補助による国府跡確認調査概要』
2. 香川県教育委員会 1979 『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和 53 年度』
3. 香川県教育委員会 1980 『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和 54 年度』
4. 香川県教育委員会 1981 『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和 55 年度』
5. 香川県教育委員会 1981 『讃岐国府を探る－坂出市府中町の国府跡確認調査から－』昭和 56 年度第 1 期埋蔵文化財資料展
6. 香川県教育委員会 1982 『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和 56 年度』
7. 香川県教育委員会 1988 『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和 59～62 年度』
8. 香川県教育委員会 1989 『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和 63 年度』
9. 香川県教育委員会 1991 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成 2 年度』
10. 香川県教育委員会 1992 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成 3 年度』
11. 香川県教育委員会 1993 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成 4 年度』
12. 香川県教育委員会 1995 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成 6 年度』
13. 香川県教育委員会 1995 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成 7 年度』
14. 香川県教育委員会 2000 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成 11 年度』
15. 香川県教育委員会 2002 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成 13 年度』
16. 香川県教育委員会 2004 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成 15 年度』
17. 香川県教育委員会 2005 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成 16 年度』
18. 香川県教育委員会 2008 『香川県文化財年報 平成 19 年度』
19. 香川県教育委員会 2010 『香川県文化財年報 平成 21 年度』
20. 香川県教育委員会 2011 『香川県文化財年報 平成 22 年度』
21. 香川県教育委員会 2013 『香川県文化財年報 平成 23 年度』
22. 香川県教育委員会 2011 『平成 22 年度香川県内遺跡発掘調査 讃岐国府跡発掘調査概報』
23. 香川県埋蔵文化財センター 2010 『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 21 年度』
24. 香川県埋蔵文化財センター 2011 『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 22 年度』
25. 香川県埋蔵文化財センター 2012 『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 23 年度』
26. 香川県埋蔵文化財センター 2013 『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 24 年度』
27. 坂出市教育委員会 1992 『坂出市内遺跡詳細分布調査報告 平成 3 年度国庫補助事業報告書』
28. 坂出市教育委員会 1993 『坂出市内遺跡詳細分布調査報告 平成 4 年度国庫補助事業報告書』
29. 坂出市教育委員会 1995 『坂出市内遺跡詳細分布調査報告 平成 6 年度国庫補助事業報告書』
30. 坂出市教育委員会 1996 『坂出市内遺跡詳細分布調査報告 平成 7 年度国庫補助事業報告書』
31. 坂出市教育委員会 2000 『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成 11 年度国庫補助事業報告書』
32. 坂出市教育委員会 2002 『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成 13 年度国庫補助事業報告書』
33. 坂出市教育委員会 2003 『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成 14 年度国庫補助事業報告書』
34. 坂出市教育委員会 2004 『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成 15 年度国庫補助事業報告書』
35. 坂出市教育委員会 2005 『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成 16 年度国庫補助事業報告書』
36. 坂出市教育委員会 2008 『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成 19 年度』
37. 香川県教育委員会 2014 『平成 23・24 年度香川県内遺跡発掘調査 讃岐国府跡発掘調査概報』
38. 香川県教育委員会 2015 『平成 25 年度香川県内遺跡発掘調査 讃岐国府跡発掘調査概報』

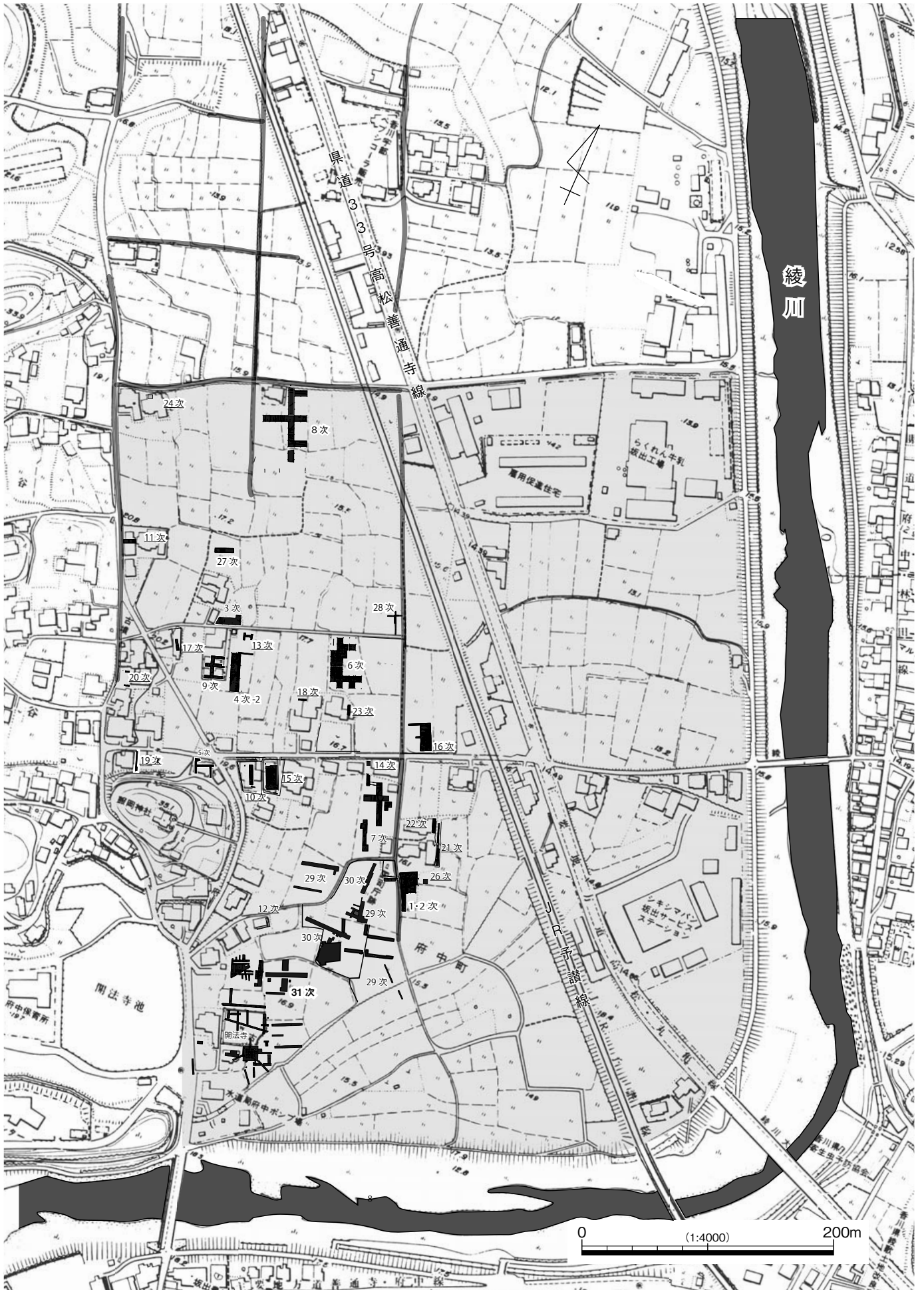


図6 讃岐国府跡における既往の発掘調査地と条里地割

第3章 調査の成果

第1節 各年度の調査地と基本的な地形の概略

1. 各年度の調査地点（図6）

讃岐国府跡の発掘調査は、平成26年度までで32回を数える。これらの中で、本報告書で報告するのは昭和52年度2次調査から、昭和59年度の9次調査までである。図6には、各調査回数における調査地点を示してある。埋蔵文化財包蔵地としての讃岐国府跡における調査は、包蔵地範囲の西部に集中する。国府域比定の根拠となった方6町説に関連する綾川の屈曲部及びその周辺となる包蔵地東部での調査事例が少ない。その存在の是非を含め、国府域が包蔵地範囲に納まるかどうかについては、今後の試掘・確認調査が必要である。

2. 地形（図7）

讃岐国府が立地する段丘・扇状地は、現況や発掘調査成果から概ね東西方向の低地帯によって複数の単位に分割することができる（図7）。各低地帯の年代を推定する資料は限られるが、発掘調査成果に依拠して讃岐国府内の微地形の把握を試みる。

低地帯1は、綾川に隣接した位置にあるやや乱れた地割が展開する低位部であり、29・32次調査において西側縁辺部が8～9世紀に後背湿地、10～12世紀に整地されている状況が確認された。後背湿地以外に複数時期の河道が交錯している可能性もある。縁辺部においては整地等の人的な干渉を受けているが、全体的に古代の段階での土地利用は盛んではなかったと考えられる。

低地帯2は、鼓岡社が乗る丘陵南裾部を南西から北東方向へ抜けている。7・12・29・30次調査によって、8世紀段階には低地帯であり、中央に排水路と考えられる溝が穿たれている。堆積相からみて、現状のような平坦化は主に14世紀以降の耕地化に伴って進行したものとみられる。

低地帯3は、鼓岡社北側の現地表面や18・23次調査においてその存在が推定できる。18次調査では低地帯上位の堆積土より8世紀前半の須恵器・畿内系土師器が出土し、23次調査では埋没平坦化した低地帯上面より12～13世紀の柱穴群が掘り込まれている。低地帯埋積土には粗砂が多く含まれ、低地帯1とは堆積の様相が大きくことなる。この状況はこれより以北の低地帯4～6においても同様であり、これら低地帯間の微高地上に形成された8・9世紀の溝の中には粗砂層で埋没するものも多くみられなど、概ね低地帯3付近を境にして扇状地面に変化することや、8・9世紀段階にも扇状地の形成が継続していた可能性がある。

低地帯4は13次調査で確認されており、13次調査付近から派生する扇状地面の浅谷とみられる。下位が粗砂層、上層が細粒化したシルトで埋没しているが、年代を推定できる資料を欠いている。

低地帯5は、現地表面及び27次調査によって想定されるもので、南西方向から北東方向に延びる。粗砂から中粒砂によって12世紀までには埋没している状況が確認されているが、それ以前については推測できる資料がない。

低地帯6は、24次調査で確認されている。上部の耕作土とみられる灰色シルトの層相からみて、14世紀以降には平坦・耕地化されていたとみられるが、埋積時期を把握できる考古遺物がみられない。

以上、微地形を分割する単位となる各低地帯について、発掘調査成果から機能・埋没時期を想定したのが表4である。

	7c	8c	9c	10c	11c	12c
低地帯1	後背湿地	後背湿地	後背湿地	整地・遺構形成？	整地・遺構形成？	整地・遺構形成
低地帯2		排水溝	凹地	凹地	遺構形成？	遺構形成
低地帯3					遺構形成？	遺構形成？
低地帯4			遺構形成？	遺構形成？	遺構形成？	遺構形成
低地帯5				洪水砂	洪水砂	遺構形成
低地帯6	？	？	？	？	？	遺構形成？

表4 各低地帯の変遷

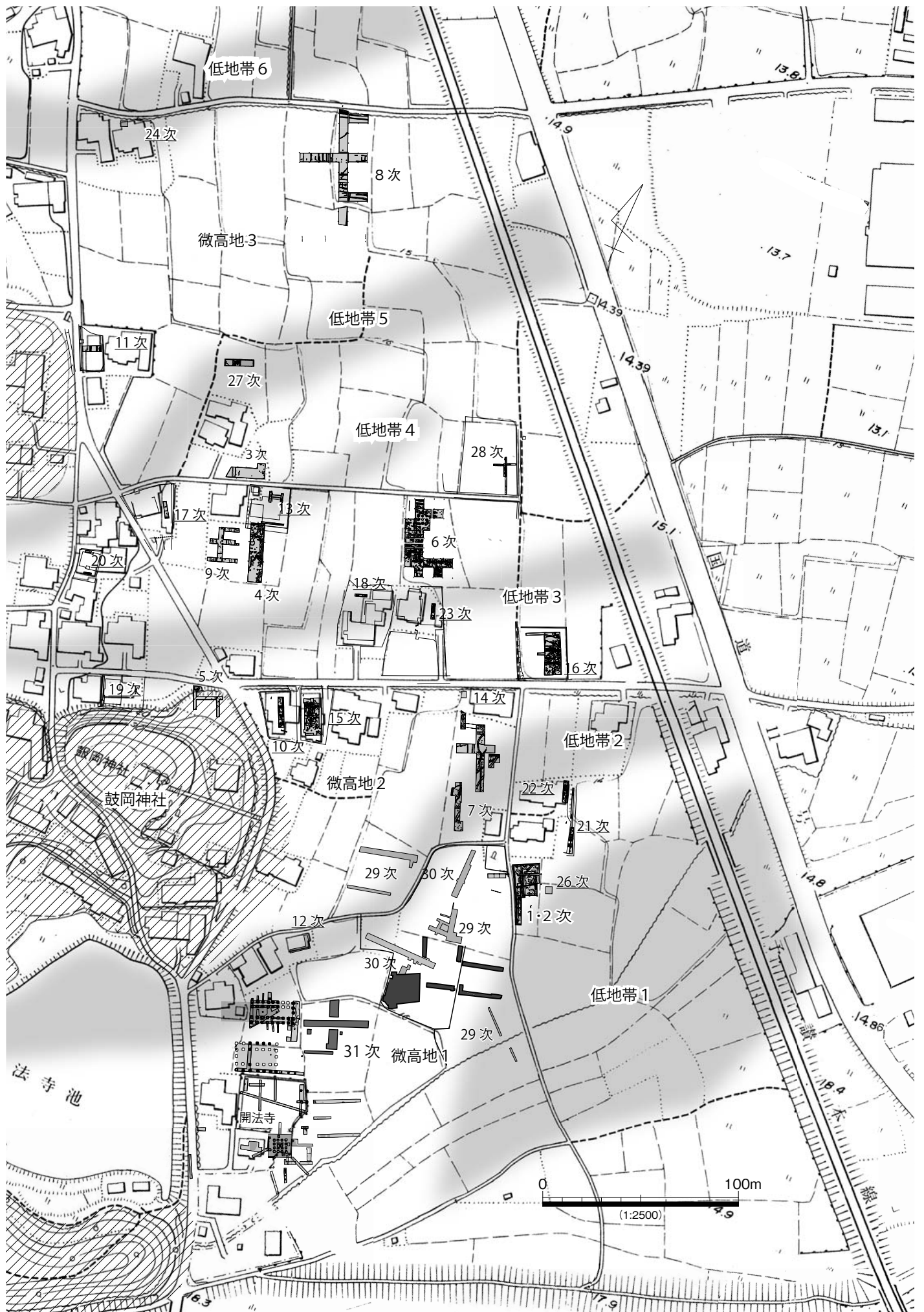


図7 既往の調査地と地形概念図

12・13世紀段階にはこうした低地帯に関係なく広範囲に遺構が形成されているが、これまでの調査成果をみる限りそれ以前の段階については、完全に微地形を克服している様子は窺えない。低地帯3～5と隣接する微高地縁辺は、既往の調査成果における堆積相からみて、9世紀を前後する時期においても埋積が行われていた可能性もある。したがって、国衙を配置する際に大幅な地形改変を行わなければ、こうした微地形に対して一定程度の制約は受けるものと考えられる。

第2節 2次調査（昭和52年度）の調査

1. 概要（図8）

調査対象地は、国府域南部の段丘上に位置し、近傍には、大正期の讃岐国庁碑が所在する。調査は2本のトレンチ調査を行い、5059-2番地に設定した調査区を1トレンチ、讃岐国庁碑に南接する5088-1番地を2トレンチと呼称する。各トレンチは南北軸が北20°西の傾きの6m四方のグリッドを基準として設定しており、遺物の取り上げもこれに準じて行った。1トレンチが所在する地筆と2トレンチの地筆との間は市道を挟んでおり、1トレンチと2トレンチの現在の地表面の比高差は約1.3mを測り、明確な段差を伴っている。また、この市道は、綾北平野の条里地割である北24°西の方位を示す南北路であり、「馬さし大貫」と呼ばれ条里南北基準線や讃岐国府と国府津が想定される海浜部の林田地区を繋ぐ南北路に相当する。調査着手以前の地筆の状態は両トレンチの地筆ともに水田である。

2. 層序（図9.10）

全体の堆積相を1トレンチの成果に基づき説明を加える。1層は現在の耕作土であり、古代から近代の遺物を含む。2層は旧耕作土であり、下位の3層との関係からみて近世段階の耕作土層とみられる。3層とする灰褐色、灰茶褐色系の粗砂混粘質土は、上位と下位で層相が異なる。上位とした3-1層は灰茶褐色の粘質土であり、1トレンチほぼ全域で2層下位に水平堆積するもので、中世から近世の遺物を含む。3-2層とする下位層は、全体の層相は3-1に近いものであるが、層内に多量の礫と古代から近世初頭の遺物を含むもので、1トレンチ西部のSD77001やSE77001上面を中心に確認された。分布状況や多量の遺物の包蔵状況からみて、2トレンチ側の西方の段丘上の削平に伴う整地層である可能性が高い。後述する緑釉丸瓦片（図11-12）や、讃岐国分寺系軒平瓦（SKM01B、図12-73）は本層からの出土である。4層は炭化物・焼土粒、黒褐色粘土の儀礫を多く含む灰褐色系の粘質土であり1トレンチのほぼ全域にみられるが、SD77001を境として東へ移るに従い層厚を増していく。層相からみて自然堆積層とは捉えられない。層界は不明瞭ながら細分可能な箇所では上位を4-1層、下位を4-2層として調査を進めた。4-2層上面の層界付近では、12世紀代の土師質土器を主体とした遺物集中が認められた。2トレンチにおいても4層に対比される層準が確認されているが、1トレンチ西端との0.5m以上の比高差があることからみて、現況の市道を挟み1・2トレンチ間にみられる明瞭な段差については4層が形成された12世紀に遡る可能性が高いことや、2トレンチが所在する調査地西側の微高地上面の削平もこの時期に行われ東側の微高地斜面下部を整地したことが想定される。また、SD77001・SE77001は本層を切り込んで形成されており、出土遺物が示す年代にも矛盾がみられない。5層から8層は、分布域が1トレンチSD77001より東側に限られる。この部分は、後述する基盤層である9層が概ねSD77001を境として段状に落ち込む箇所に対応するものであり、5～8層はこの落ち込みを埋め立てた整地土であると捉えられる。5層は暗灰褐色系の粘質土であり、上面及び下面は緩やかに東へ下る。層内に偽礫や炭化物を多く認めることから自然堆積層とは考えられない。出土遺物は須恵器・土師質土器・瓦片がやや多く含まれ、これらの年代は10世紀末葉から11世紀を示している。6層から8層は灰褐色系の粘質土であり、9層起源の黄褐色粘土の儀礫や炭化物、須恵器を主体とした遺物を多く含む。層相からみて自然堆積層とは考



写真6 2次調査地全景 北から

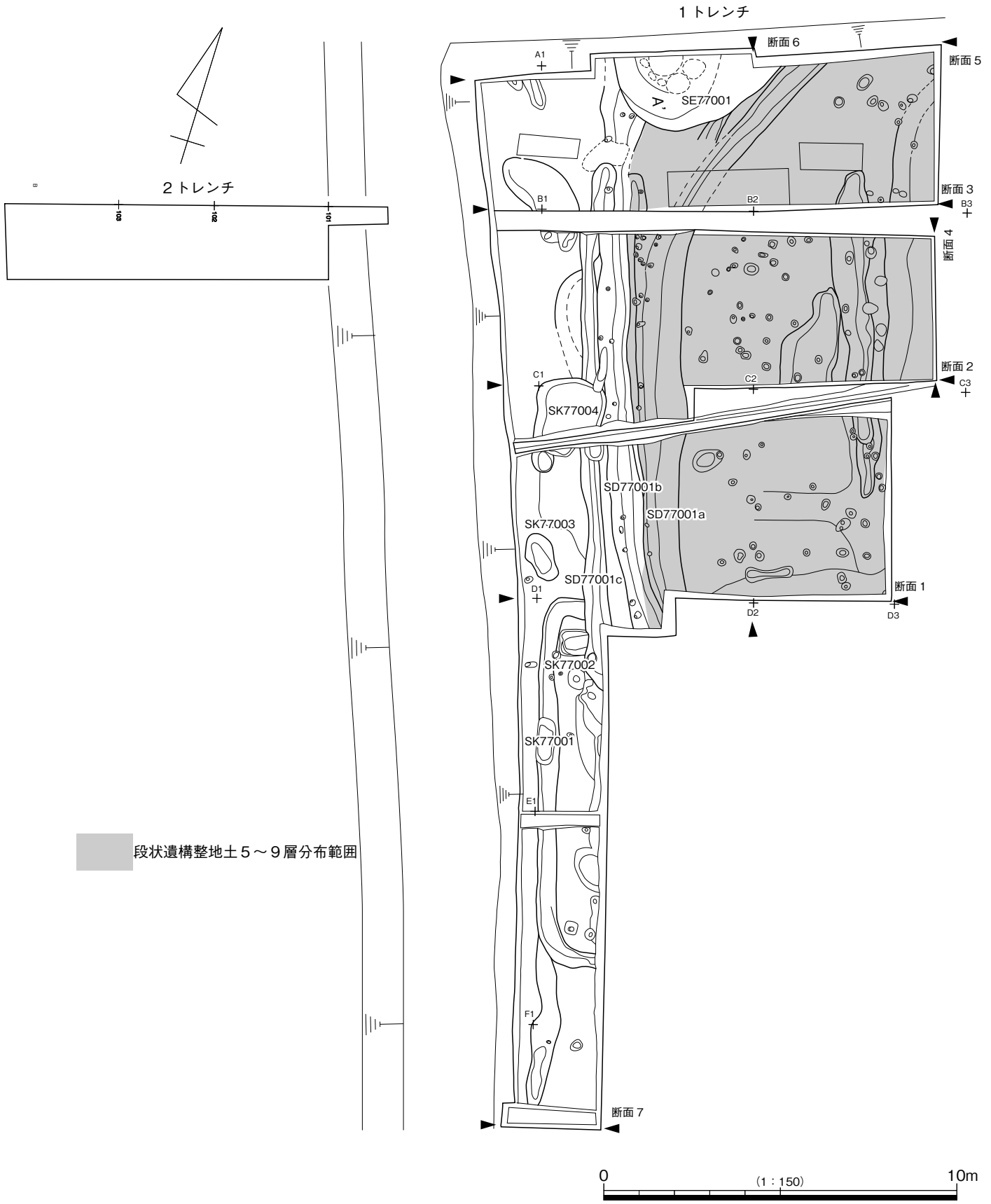


図8 2次調査平面

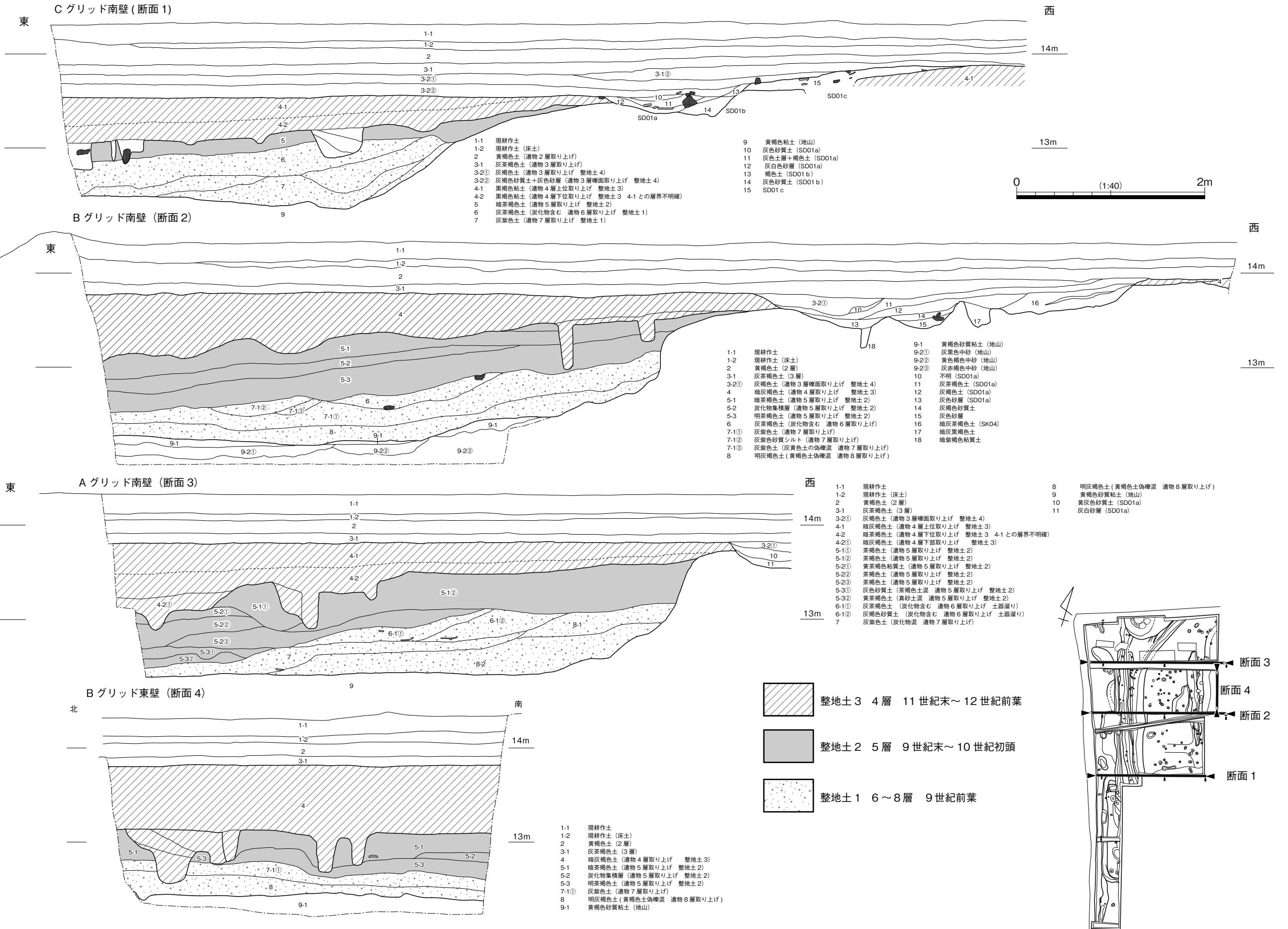


図 9 2 次調査断面 (その 1)

えられず、整地土とみた方がよい。また、6層から8層は段状の落ち込み内に安定的には分布しておらず、箇所によって組合せを違える。この点は、6層から9層が一連の整地土であることを示唆する。6層には9世紀前葉の須恵器供膳具を主体とした土器群が多く含まれるが、7・8層からの遺物の出土は少量に止まるため、6層から8層にかけて行われた整地作業の最終段階で6層の土器群が廃棄されたと考えることができる。9層は古代の基盤層の黄褐色粘土である。近年の確認調査により、9層に対応する黄褐色粘土～シルトの上部には、縄文晩期の土器片が含まれることが明らかになっているので、本層は弥生時代前期までには堆積が完了し、それ以降の時期の基盤層となっていたと考えられる。9層上面のラインは、断面1の箇所ではやや緩やかであるもののSD77001東側で急激に落ち込み、これより東側では平坦化する様相をみせる。これは平坦面造成を目的として西側から続く微高地斜面を人為的に削平した痕跡と捉えることができる。削平時期については、9世紀前葉に形成されたと考えられる6層から8層の年代観、特に最下面となる8層と9層との境に暗色帯とみえる古土壌に相当する層準が確認できることからみて、8世紀中葉以前の造作と推定しておきたい。

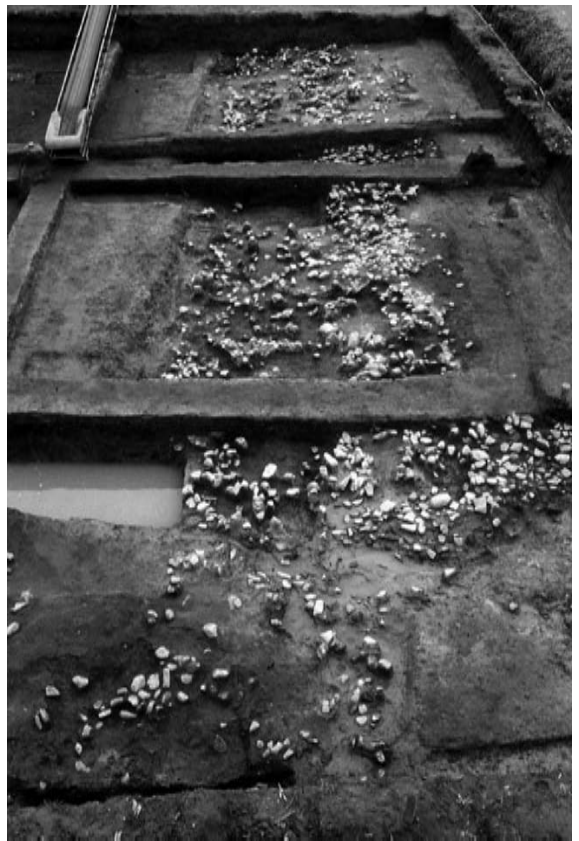


写真7 SD77001を覆う3層(礫群)北から

以上、全体の堆積相からみて、本次調査地は微高地西側斜面部に相当し、8世紀中葉以前に平坦面の造成・整地を意図した削平(9層上面)があり、8世紀中葉(6～8層)・10世紀末から11世紀(5層)、12世紀(4層)、中世末から近世(3-2層)にみられた複数回の整地作業が行われたと考えられる。微高地斜面部に位置することからみて、各整地作業に伴い調査区西側の微高地が度々削平され、微高地平坦面の拡張が行われたと推測できる。また、微高地平坦面が活発に行われた時期は9世紀前葉から12世紀に絞り込むことができるし、この時期が讃岐国府跡の存続期間に含まれる点は重要である。

3. 検出遺構・遺物

4層上面遺構

SD77001a. b. c(図9.10.11)

1 トレンチ西部で検出された南北方向の溝である。最上層は先述した礫を多く含む中世末から近世初頭の整地土である3-2層に覆われるものの、中位より下では3条に分かれ、東からa・c・dの符号を与えた。a～cの流路の内、最終的に機能していたのは流路aであり、中位から上位が3-2層で埋められている。

図11-1～18は最終埋没層である3-2層からの出土遺物である。12は緑釉丸瓦である。周縁はすべて破断面となっており、凸面に施釉が認められる。現状で、讃岐国府跡における施釉瓦はこの1点のみである。地方官衙において緑釉瓦が出土するのは極めて稀であり、軒先を飾るなど部分的な使用に止まるものであろう。16.17は複弁11葉蓮華文軒丸瓦であり、讃岐国府特有の文様をもつ(讃岐国府式)。18は瓦当部が剥離しているが、焼成の雰囲気からみて16.17と同じく国府式となる可能性が高い。図11-19～21はSD77001a、図11-22～24はSD77001b、図11-25～44はSD77001c出土資料、図11-45～52はSD77001の中で帰属する流路が絞り込めない一群である。また、近世に属する資料については、時間的な関係から図化を見送った。これらの出土遺物や、3-2層と4層との層位関係からみて、本溝は13世紀から17世紀頃に機能した遺構と推定しておきたい。図11-53～72の資料についてはSD77003からの出土遺物であるが、原因が欠落しており、遺構の絞り込みが困難である。

SE77001(図12)

1 トレンチ北端で検出した石組井戸である。上位に大型石材下位に中・小型石材を円形に配し井戸枠とする。上

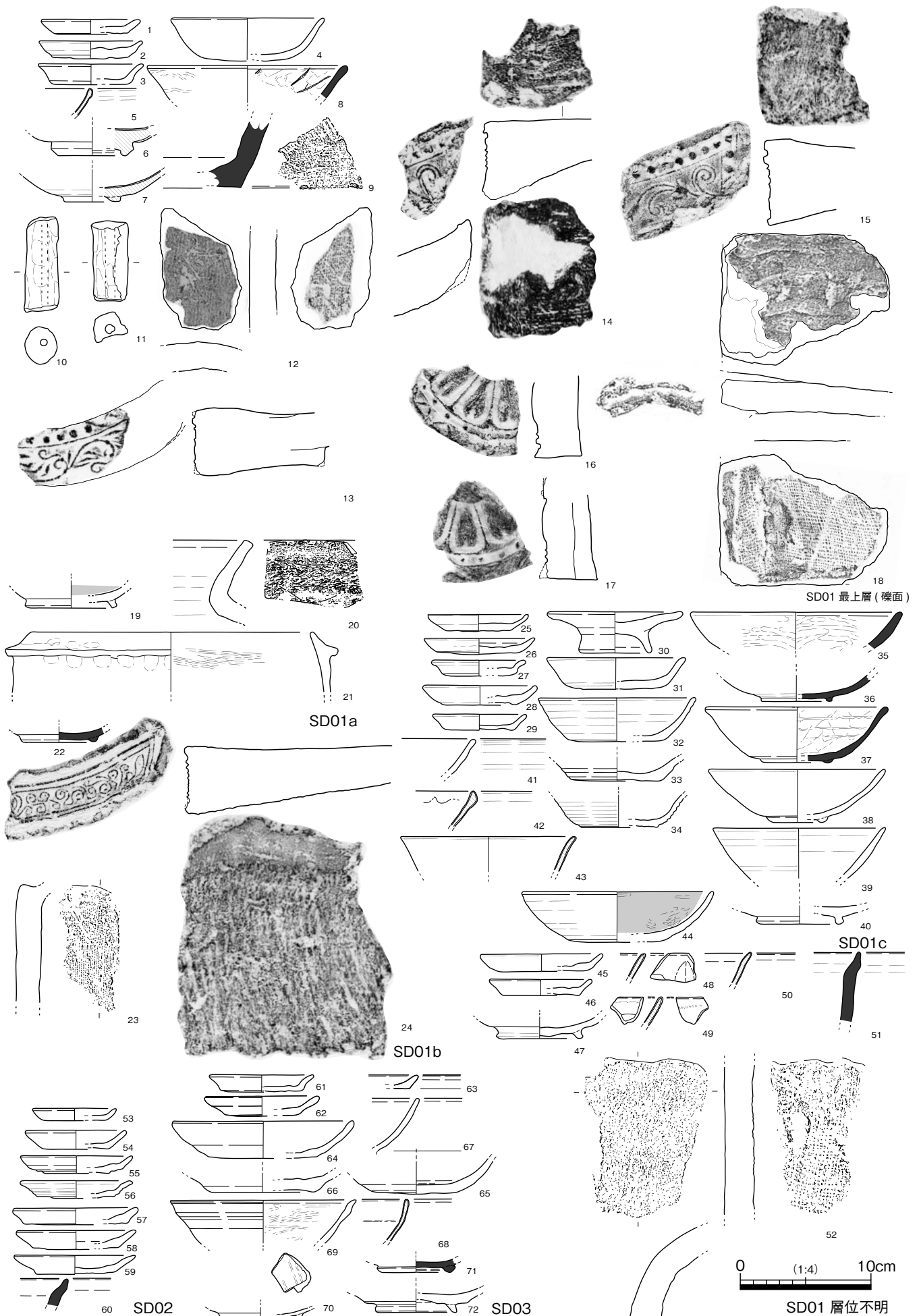


图 11 SD77001 · 77002 · 77003 出土遺物

部西側は石材が抜き取られているが、実績報告書等には遺存する上位大型石材には五輪塔が転用されたことが記されている。井戸枠内部の埋土は、最上層、上層から中層、井戸側内の下層に大別され、下層は廃絶直後に漸移的に流入した青灰色粘質土、上層から中層は西側井戸枠石材抜き取り後に流入した黄褐色粘土と灰色粘土の互層、最上層はSD771001を埋める3-2層となる。出土遺物は上層から出土した讃岐国分寺式軒平瓦SKM01B(図12-73)のみ図示したが、調査時にはSX771002として符号を与えていた可能性があり、図13-131～142は本遺構からの出土遺物であるかもしれないが確定はできない。掘り方が4層上面を切って穿たれていることや3-2層によって最終埋没していることから、13世紀から近世初頭の帰属時期が推定できるが、裏込め土の調査は行っておらず、これ以上の構築年代の絞り込みは困難である。また、SD77001aと前後関係をもつが、確認できる資料を欠いている。県内で中世後半に石組井戸の事例が少ない点を考慮すれば、SD77001aに後発する形で中世末に構築され近世初頭にSD77001aとともに埋め戻された可能性が高い。

SK77001 他(図13.14)

これらの遺構は、原図の欠落等により確実な平面位置が絞り込めない一群を一括した。4層上面遺構の帰属時期を窺う参考資料として実測図を提示しておきたい(図13-74～180、図14-181～252)。

段状遺構・7～8層出土遺物(図15)

図15-253.254は7～8層より出土した遺物である。253は十葉素弁蓮華文軒丸瓦で開法寺KH101型式に比定される。254は黒色土器杯で、県内でも最初期の所産であり讃岐国府以外の類例に乏しい。ケズリによって成形された平底の底部からやや膨らみをもって立ち上がり、口縁端部を軽く面取りするもので、6・5層にも類似品がある。

段状遺構6層出土遺物(図15.16)

図15-255～338、図16は6層から出土した遺物である。本層出土遺物については、既に公開されている(渡部1980、片桐1995、香川県教委2007)。本書に掲載した資料は、香川県教委2007に掲載された資料を除き新たに実測作業を行ったものである。329は須恵器双耳杯、330は須恵器円面硯である。331～334は須恵器転用硯であり、331.332は蓋内面、333は皿の見込みが極度に磨滅している。334は甕胴部片を転用しており内面に磨滅痕をもつ。周辺すべてが転用後の破断面となっており、転用時は更に大きい破片であったと考えられる。341～347は黒色土器杯で、344を除き口縁端部に軽く面取りを行う共通点がある。348は黒色土器高杯であろうか。類例に乏しく判断できない。356は玉縁式丸瓦。図化した資料以外にも若干の瓦片が出土している。357は



写真8 SD77001 全景 北から



写真9 SD77001 土層(断面2) 北から



写真10 SE77001 井側 北から

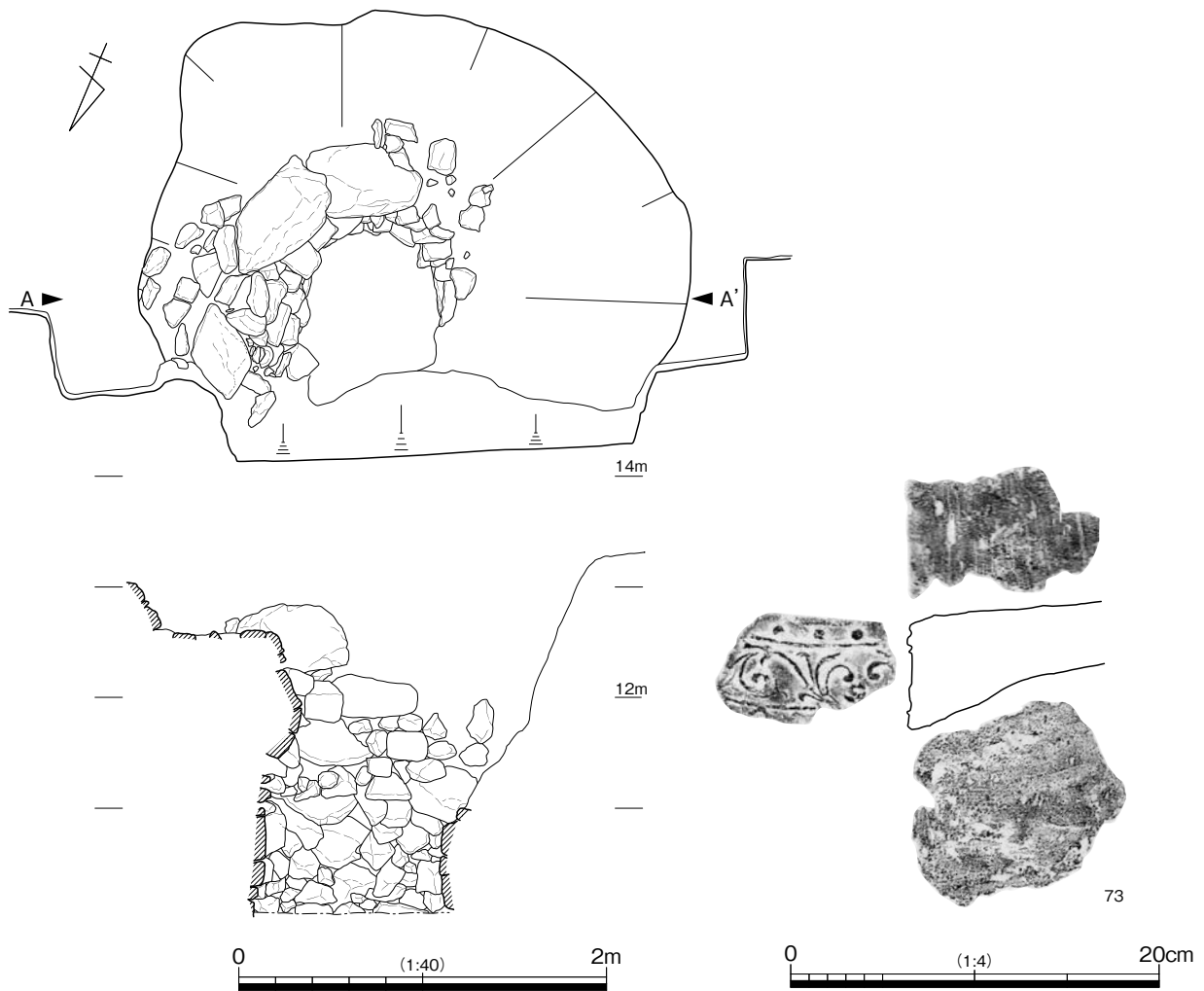


図 12 SE77001 平・断面及び出土遺物

瓦埴であり、ケズリを入念なナデで消去する。358～365は、本来上位の5～4層に帰属すべき資料が混入したものと考えられる。

混入資料を除き須恵器を中心としたこれらの遺物群は、9世紀前葉の中での時間幅で捉えられる。6層に集中していることや平面的なまとまりをもって出土していることからみて、微高地上を削平した際に古相を示す遺物を巻き込みながら、9世紀前葉の整地作業に伴って廃棄された一群と判断できる。

段状遺構5層出土遺物(図17)

図17-366～400は5層から出土した一群である。

366～373、375、376の須恵器、381の黒色土器杯は、形態等からみて本来的には下位の6層に帰属すべき資料である可能性が高い。375は須恵器転用硯で、蓋内面に磨滅痕がある。転用に際して摘部を裁ち落していると考えられる。376は須恵器転用硯で、甕胴部片を転用する。すべての側縁が破断面で構成される。

377の須恵器鉢は形態・胎土・焼成から搬入品であることは確実であり、西播磨相生・龍野窯跡群における落矢ヶ谷6号窯出土品に類例がみられる。379は高台部内面の沈線、釉からみて、近江産の緑釉陶器碗とみられ10世紀代に比定される。380は灰釉陶器碗であり、9世紀後半の猿投産と考えられる。

399の八葉複弁蓮華文軒丸瓦は、鴨廃寺のKM107B型式であり、讃岐国府では本資料1点のみ出土している。400は



写真 11 SE77001 を覆う 3層(礫群) 南から

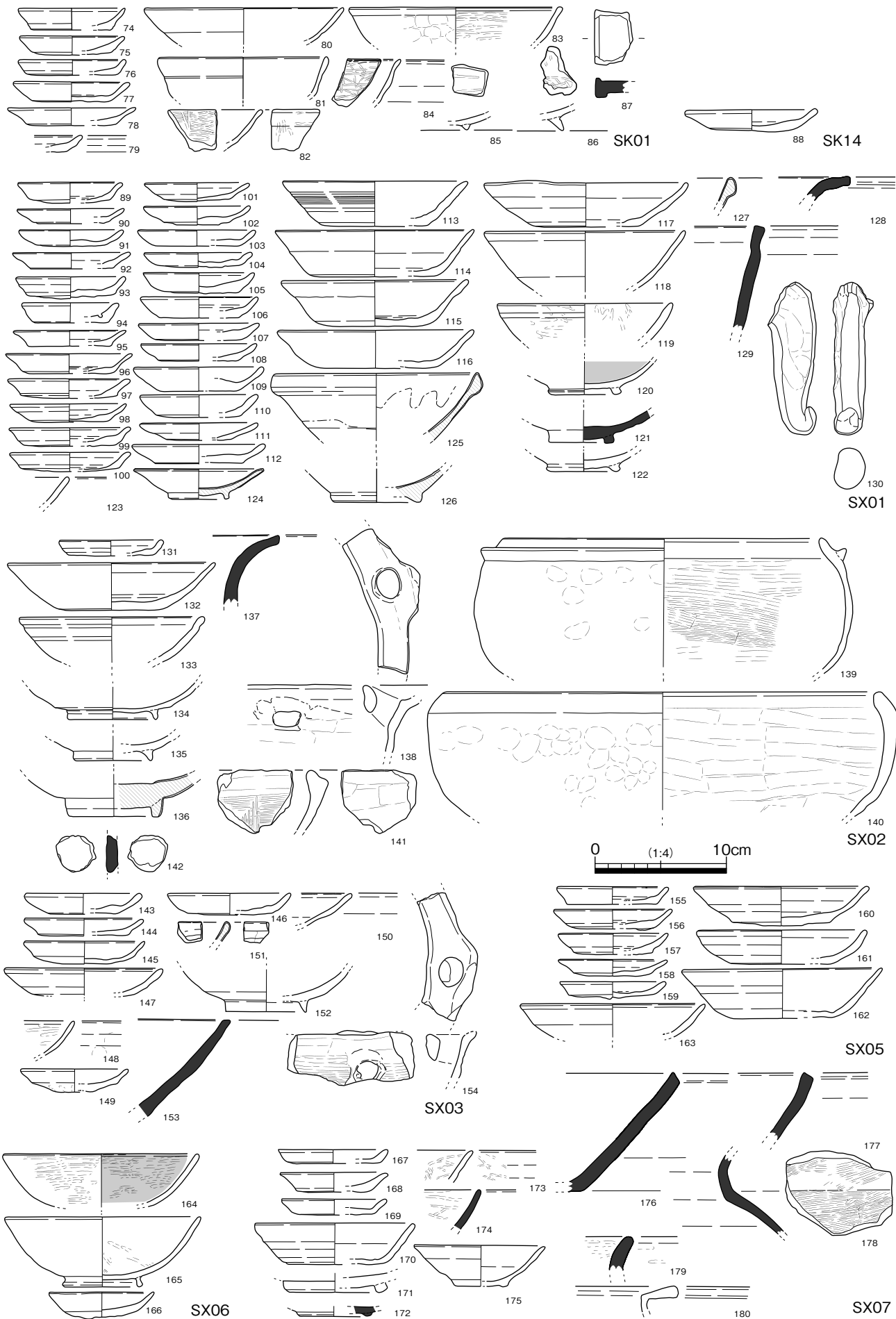


图 13 SK77001 他出土遺物

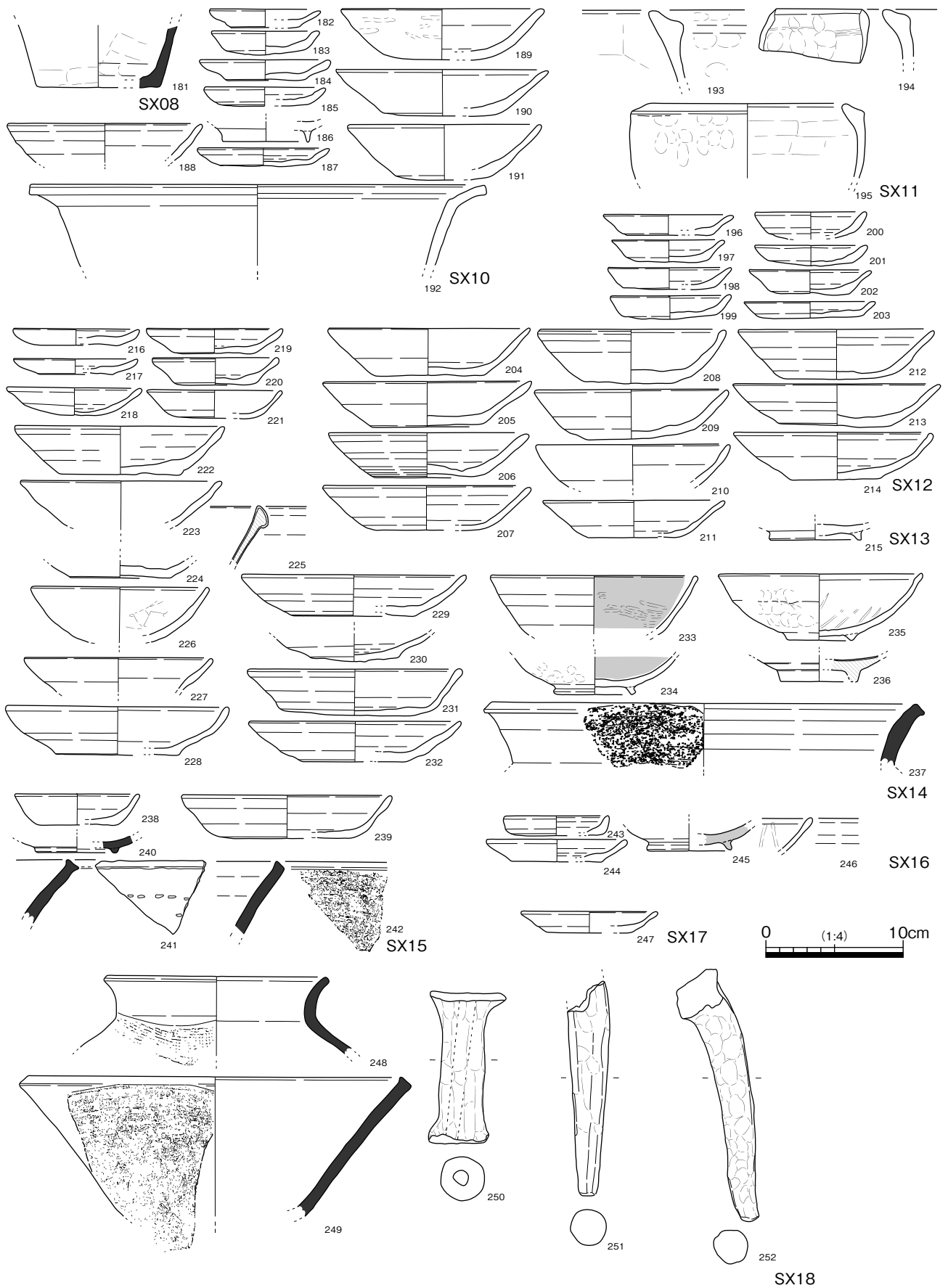


图 14 SX77001 他出土遺物



写真 12 段状遺構 (B1 グリッド) 南東から



写真 13 段状遺構 6 層遺物出土状況 東から



写真 14 段状遺構 6 層遺物出土状況 南東から



写真 15 4 層上面検出状況 南から



写真 16 4 層土器溜まり 東から



写真 17 4 層土器溜まり 西から

瓦埴であり、6 層出土の 357 と同様の胎土・調整・色調をもつ。本来的には 6 層に帰属する資料かもしれない。

これら 5 層出土遺物は、古相を示す下位からの混入品を除き、10 世紀末葉から 11 世紀に帰属する資料とみることができる。

段状遺構 4～5 層・4 層出土遺物 (図 17. 18. 19)

図 17-401～429 は、4 層と 5 層の層界の漸移層として取り上げた一群で、図 18～図 19-626 は 4 層下位上部で土器溜りを形成していた資料である。土師質土器皿・杯の中には、内面を中心に煤状の物質が付着するもの (図 18-469. 513. 518. 522. 524. 529. 530) がみられ、灯明具として使用された可能性が高い。612 の須恵器は、壺状の体部に脚部状の付設部があるもので、器種は不明とせざるを得ない。須恵器図 613 は注口部の破片であり、水瓶と考えられる。614 は須恵器円面硯の脚部片、616 は須恵器風字硯である。617 は瓦質焼成の須恵器風字硯。622 は六葉単弁蓮華文軒丸瓦であり、讃岐国分寺 SKM21 型式とみられる。文様から平安後期以降の所産と考えられるが、SE77001 出土の

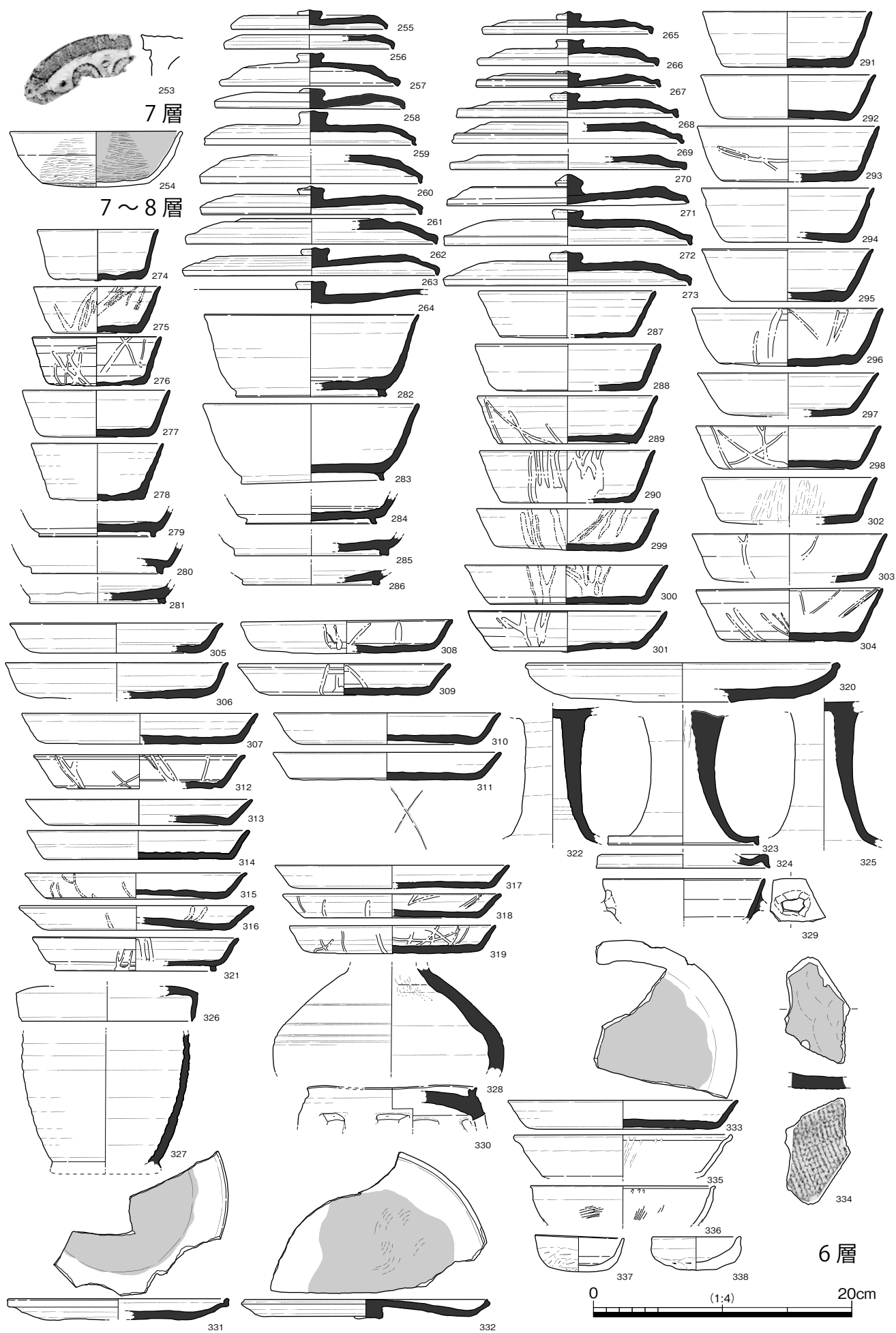


图 15 段状遺構 8~6層出土遺物

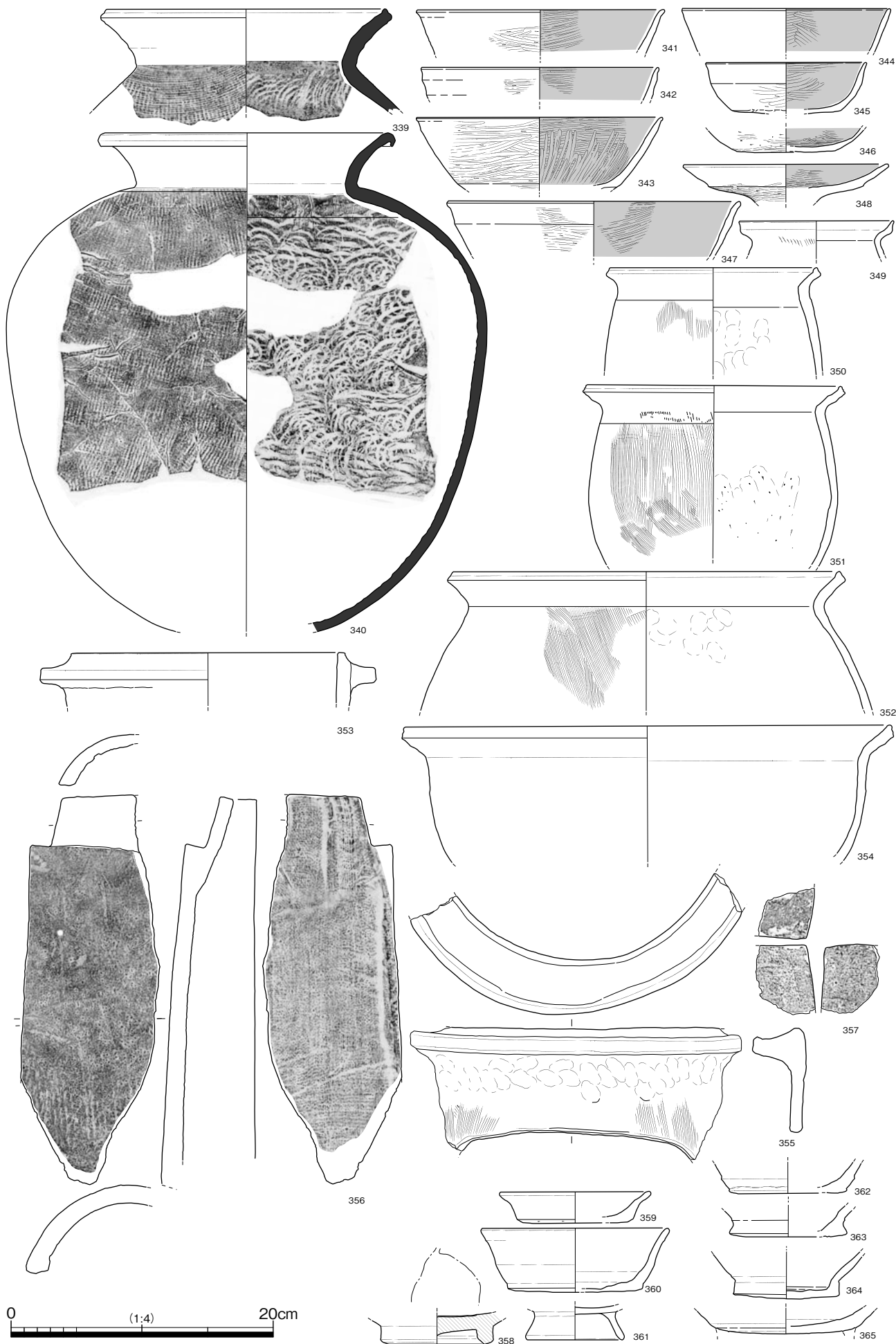
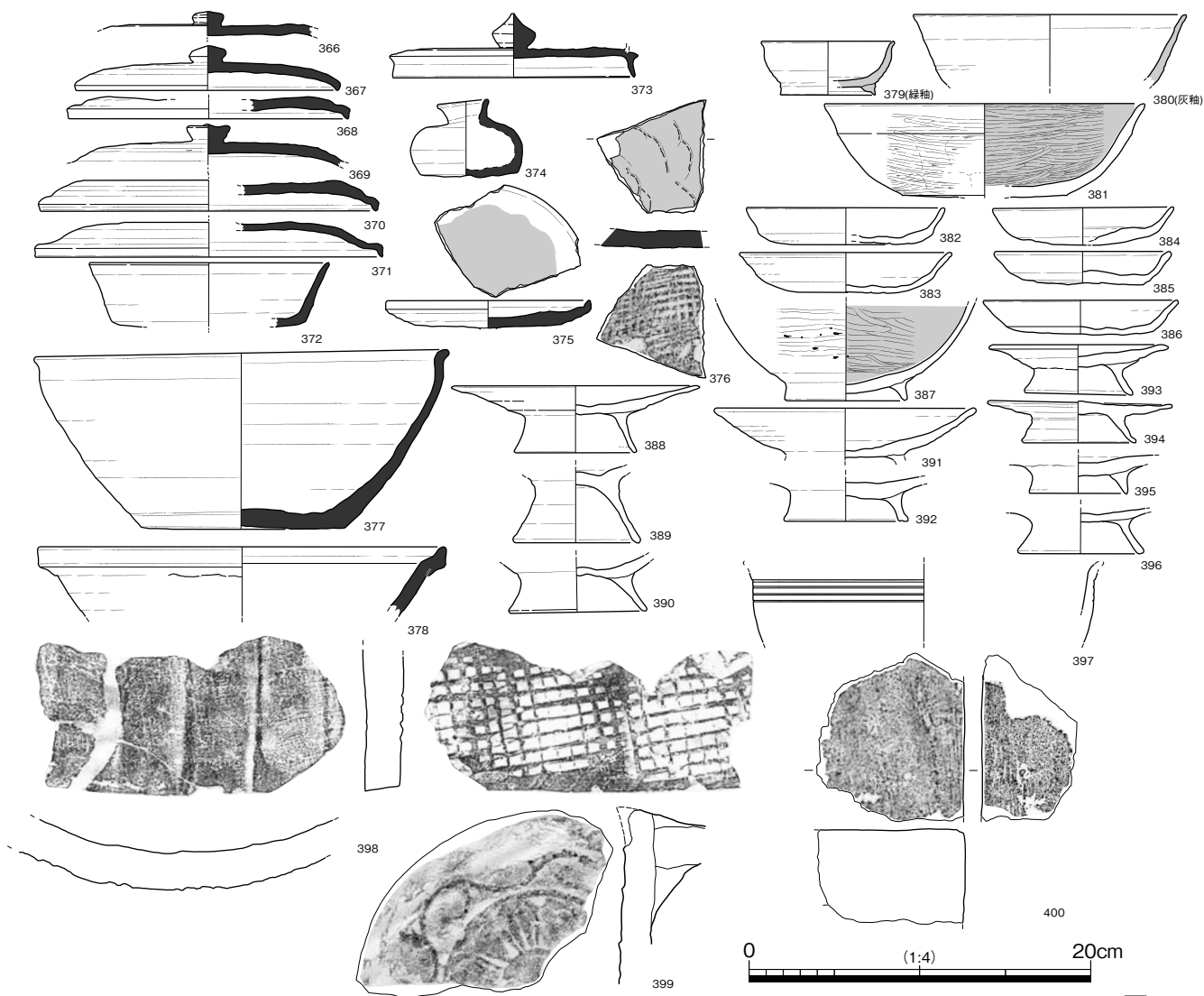
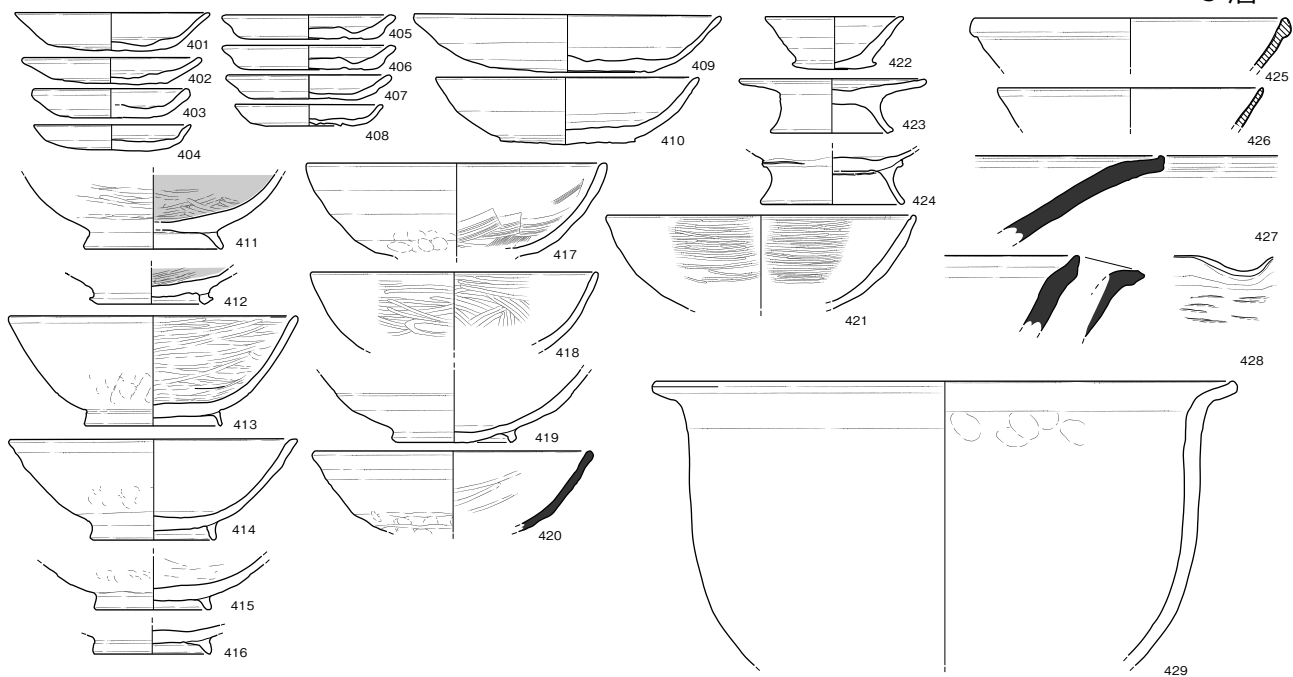


图 16 段状遺構 6 層出土遺物



5層



5~4層

图 17 段状遺構 5層・5~4層出土遺物

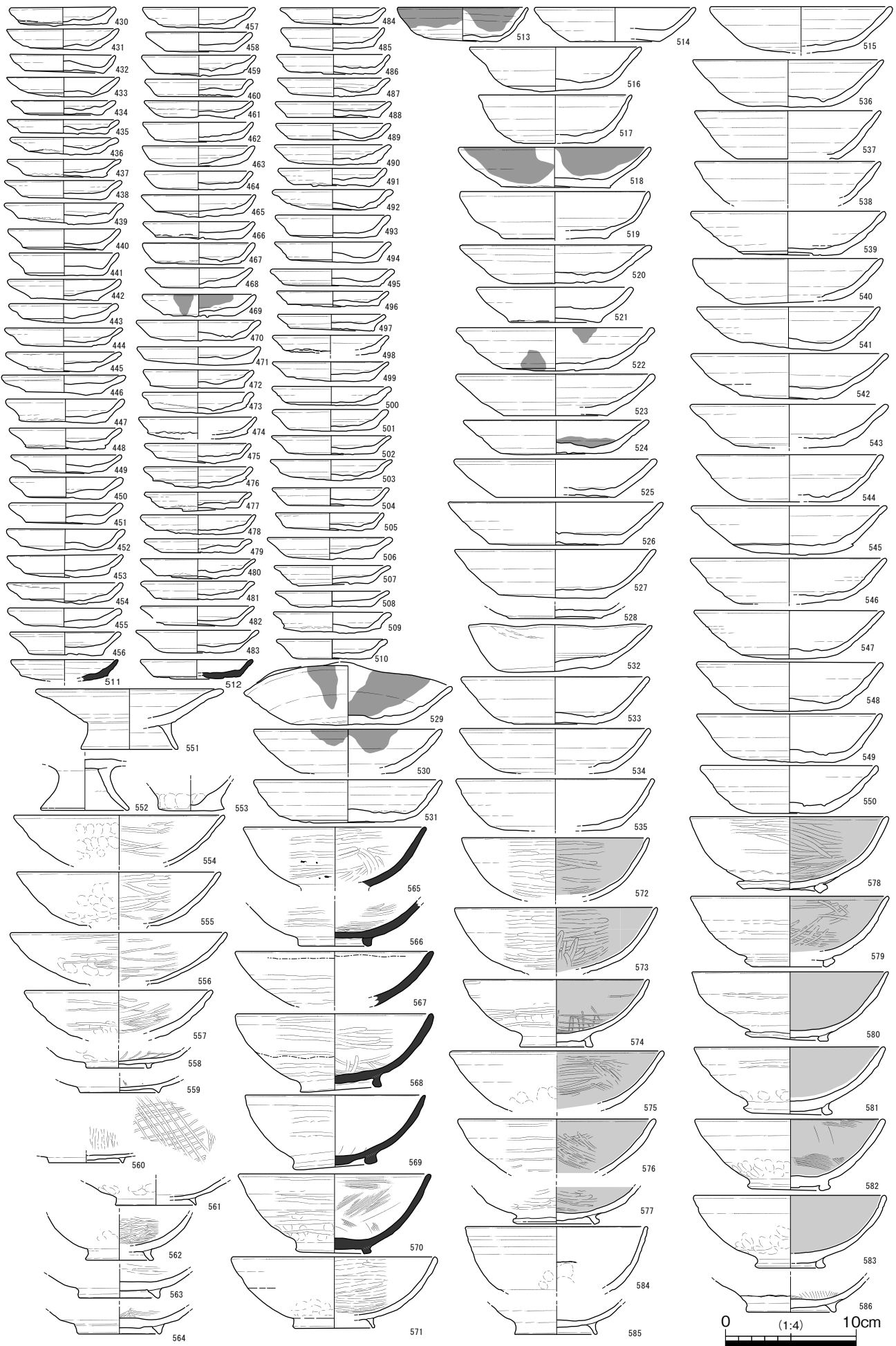


図 18 段状遺構 4 層出土遺物 (その 1)

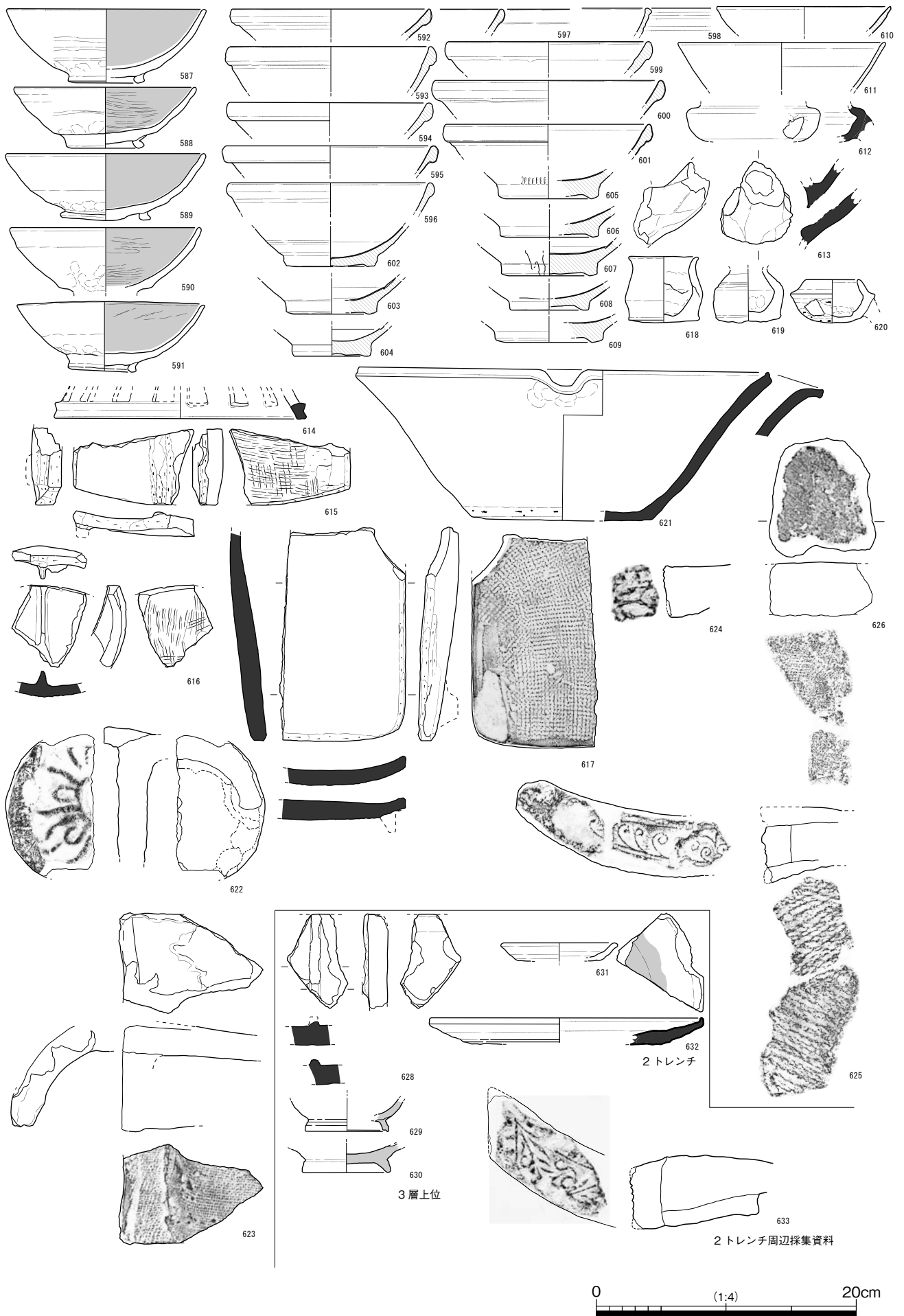


図 19 段状遺構 4 層出土遺物 (その 2) ・ 3 層上位 ・ 2 トレンチ出土遺物

SKM01B(図12-73)と共に複数時期に涉って讃岐国分寺と同型式の瓦が確認できる点は注意される。623は瓦当部が剥離する軒丸瓦であり、接合方法や焼成の雰囲気やSD781001最上層出土の図11-18に酷似するため、讃岐国府式の丸瓦部となる可能性が高い。624は上外区に珠文、内区に唐草文がみられる軒平瓦の小片であり、類似する資料が25次調査で出土品にみられる(香川県埋文セ2013)。軒丸瓦625は瓦当部外区が剥離しており、内区の唐草文以外の文様構成が不明となる。626は瓦埴であり、焼成は不良で土師質となっている。

3層出土遺物(図19)

図19-628～630は3層上位からの出土遺物で、特徴的な資料のみ提示した。628は須恵器風字硯であり、硯面に突帯が辛うじて残存する。629は緑釉陶器碗であり、貼り付け高台及び内面沈線より近江産で10世紀代に比定される。630は山茶碗である。

2トレンチの調査成果(図8.19)

本トレンチは、讃岐国庁碑の南側で東西方向に設定された調査区である。原図が欠落していることから、詳細は不明であるが、写真記録等により概要を把握することができる。基本層序は、1トレンチ西部と同じであり、現在の耕作土下位には1トレンチ4層に対比される黒褐色粘質土があり、その下位が弥生時代以降の基盤層である黄褐色シルト～極細砂となっている。写真から



写真18 2トレンチ全景 西から

判断して、現地表からこの基盤層までの深度は約0.6mと推定できる。トレンチ中央部の4層相当の黒褐色粘土上面で炭化物を多く含む土坑1基検出され、基盤層上面ではトレンチ東端付近において不定形の土坑が1基検出された。4層相当の黒褐色粘土上面の土坑は12世紀以降、基盤層上面の土坑は12世紀以前と考えられるが、出土遺物等の資料は得られていない。また、本トレンチは、綾北平野の条里南北基準線、「馬さし大貫」と呼ばれた南北路の線上に位置、または隣接することになるが、調査範囲内では溝等の遺構は確認されていない。28次調査において確認した南北溝及び石敷路盤の可能性のある南北道路遺構も2次調査地点までは延びていないことになる。

図19-631.632は本トレンチ出土遺物であるが、層位は不明となっている。須恵器転用硯(632)は蓋内面を硯面とするもので、極度に磨滅している。

その他の遺物(図19)

図19-633は2トレンチを設定した5088-1番地の西側水路の工事中に出土した偏行唐草文軒平瓦であり、開法寺KH202型式に比定される。讃岐国府側において、比較的多くみられる開法寺同范瓦である。

4. 小結

2次調査では9世紀以前の平坦面(段状遺構)造成に端を発し、微高地斜面部における9世紀前葉から12世紀まで継続する旺盛な土地造成、国府廃絶後の中世後半から近世初頭にかけての耕作地を主体とした土地利用が明らかになった。この中で注目される点は、9世紀前葉から12世紀に継続した整地土に伴う遺物の供給源が調査地西側の開法寺伽藍東側の微高地上面と考えられる点である。29次調査以降の調査で検出されている微高地上の建物群の存続期間を推定する重要な資料とすることができる。

第3節 3次調査（昭和53年度）の調査

1. 概要（図20）

3次調査地は、国府域中央部西寄りの麓層面上に位置し、トレンチの北側には崇徳上皇関連の伝承地である「盃塚」が所在している。調査地付近の麓層面はかなりの起伏を呈しているが、国府域内では高所に位置している。トレンチは条里地割を基準として東西方向に設定し、柱穴群が確認された東部側のみに北へ拡張を行った。調査前の土地利用は畑地である。

2. 層序（図20）

現在の耕作土（1層）及び床土（2層）の下位は、調査区中央から西部を中心に黄褐色粘土の基盤層が露出するが、調査区東端付近では中世の遺物包含層である暗灰褐色砂質土を挟んで基盤層に至る。調査地が東側へ向かって傾斜する麓層面であることからみて、本来的には遺物包含層は全域に存在していて、調査区中央から西部付近では後世に削平されたとみられる。また、基盤層を含め全体の層相が中粒砂から粗砂を多く含む。

3. 検出遺構・遺物

SD78001（図20.21）

トレンチ西端で確認した大溝である。上面幅約1.8m 残存深度0.4mで条里地割に合致した北24°西の方位で直線的に南北に開削されている。底面付近にはラミナが認められる粗砂層が堆積しており、中位から上位は粗砂と黒褐色系粘土の偽礫を多く含む埋め戻し土で満たされる。検出位置からみて、谷4を挟んで9次調査SD84002と同一溝となることは確実であり、13次調査で確認された谷4の埋没年代を想定する材料となる。図21-1～5は出土遺物であり、いずれも中位から上位の埋め戻し土から出土している。須恵器甕（4）鉢（5）など7世紀代に遡る可能性がある資料も含まれるが、須恵器杯（1）や土師質土器杯（2）の形態からみて、10世紀に埋め戻されたと考えられる。6は須恵器蓋の内面を陸・磨墨面とする転用硯であり、強い磨滅痕が認められる。これらの出土遺物や、後述する9次調査SD84002からの出土遺物の年代観を合わせると、本大溝は9世紀に開削され、10世紀に埋め戻されたと考えられる。流水が認められるのは確かであるが、西から東へ傾斜する地形面に直交する形で開削されている点や規模からみて、国衙施設を区画する大溝と考えられる。

東部柱穴群（図20）

トレンチ東部では柱穴群が検出されている。小型で円形の柱穴は、図20トレンチ東壁面土層に表現されているように、4層とした12世紀の包含層を切り込むことから、それ以降の時期の所産と考えられる。但し、やや大型の柱穴が存在するとされており、調査区を北へ拡張した際に検出したSP78068からは土師質土器皿（図22-7）、土師質土器杯（図22-8）が出土している。土器相からみて、12世紀後半～14世紀前半の所産と考えられるが、調査範囲内で他の柱穴と組み合わせ建物を構成するような状況はみられない。図22-9は包含層である4層から出土した白磁皿である。

4. 小結

SD78001は、9次調査SD84002と接続する大溝である。規模や流下方向、9次調査SA84001を合わせて検討すると、本大溝は調査地西側に想定される国衙施設を圍繞する可能性がある。圍繞された国衙の範囲は明確にはできないが、今後の調査における重要な資料となるものである。



写真19 3次調査風景



写真20 SD78001 全景 北から

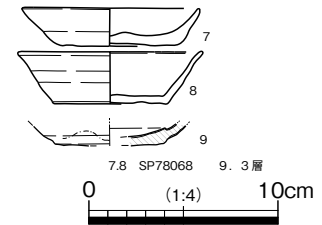


図22 柱穴・包含層出土遺物

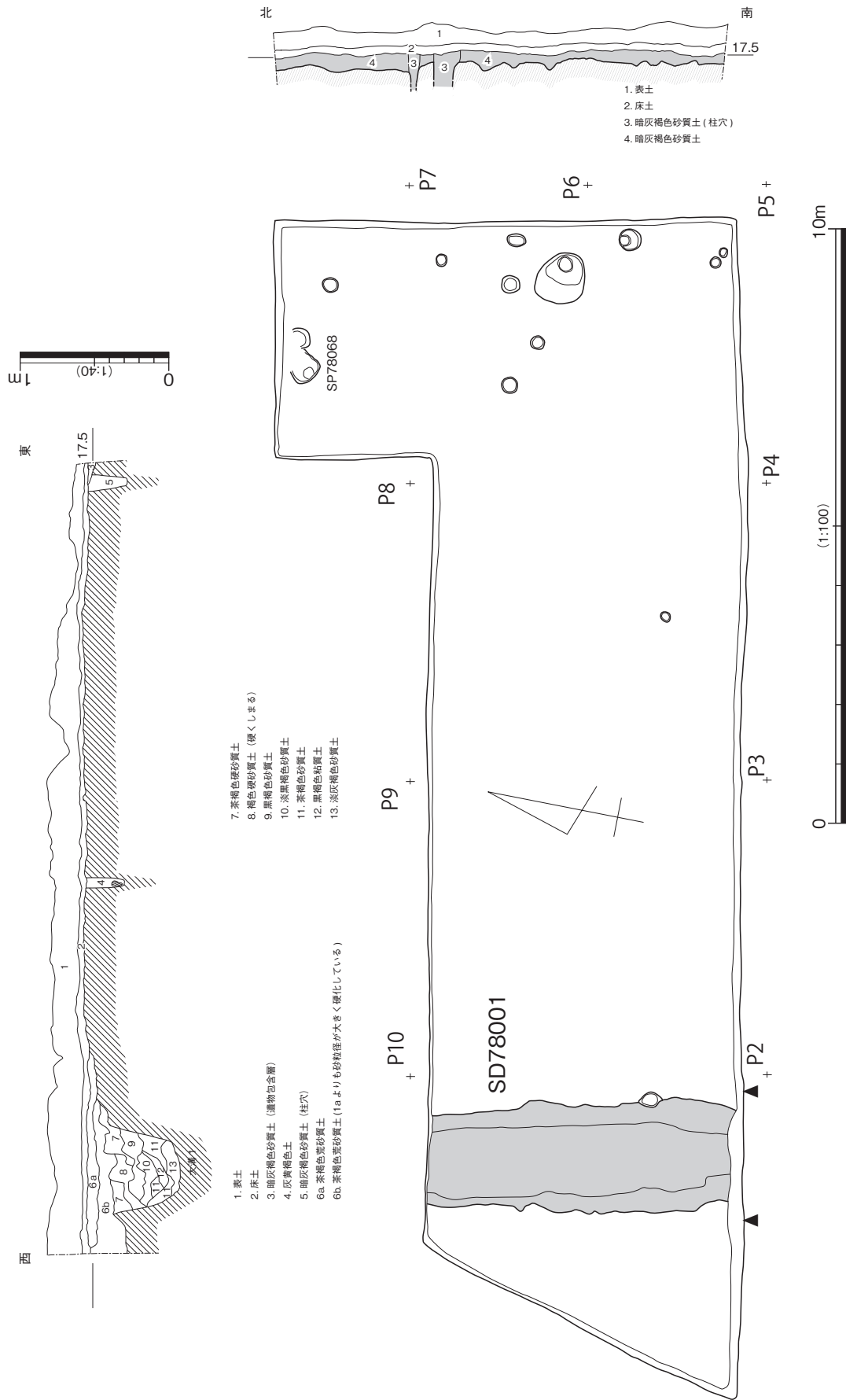


図 20 3次調査平面

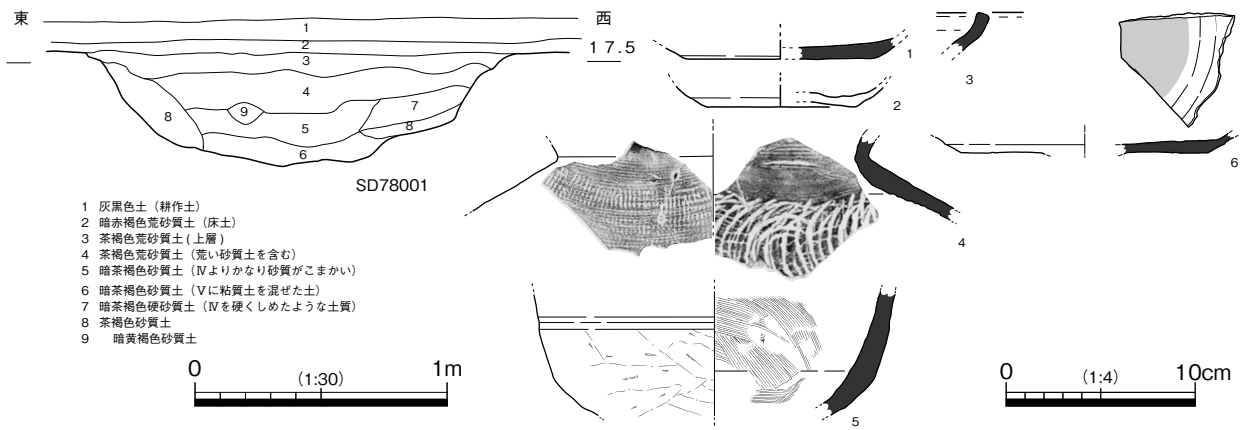


図 21 SD78001 断面及び出土遺物・SD78001 周辺図



圖 23 4 次調査平面

第4節 4次調査（昭和53年度）の調査

1. 概要（図21.23）

昭和53年10月から開始した3次調査の途上、新たに南側の5133-1番地においてトレンチ調査を開始しており、4次調査として報告する。4次調査地は、13次調査で確認された低地帯4を挟んだ南側に南北方向で長さ30m幅7mトレンチを設定している。調査の結果、トレンチ南東部で古代に遡る可能性がある掘立柱建物1棟（SB78001）と中世前期の土坑（SK78005）が確認されたが、他の多くの遺構は、中世末葉から近世初頭の資料が中心となる。調査前の土地利用は水田である。



写真21 4次調査風景

2. 層序（図23）

溝部分を除き、トレンチ全域において現在の耕作土（1層）・床土（3層）直下で古代の基盤層である黄褐色粘土が露出する。黄褐色粘土の上面の標高は17.6m前後を測り、トレンチ北東部へ向かって僅かに傾斜しているが、概ね平坦となっている。調査地点が麓屑面に相当することから、基盤層及び遺構埋没土に粗砂を多く含んでいる。

3. 検出遺構・遺物

SB78001（図24）

トレンチ南東部で検出した掘立柱建物である。柱穴の掘方は一辺が約0.6mの隅丸方形を呈し、条里地割に合致する北24°西の方位をもち約2.2m間隔で3基並ぶ。周辺の遺構分布からみて、南北棟の西側の桁行の一部を検出したと考えられる。柱穴底面には、直径0.15mの柱の当たりと考えられる窪みが残されているが、柱穴掘り方の残存深度は浅いところで約0.2mしか残存しておらず、上面はかなりの削平を受けていると考えられる。時期決定可能な出土遺物はみられないが、柱穴掘り方の形状や建物方位からみて、奈良・平安期に属する建物と考えられる。

SB78002（図23）

トレンチ北部で検出した掘立柱建物である。約2.4mで並ぶ対面した北・南両側の桁行2間分を検出しているが梁行は調査区外となる。東西棟となる可能性が高いが、全体の規模・構造は不明である。

柱穴が後述するSD78005.78006を切り込んで構築されており、近世以降の建物と考えられる。

SK78005（図25）

トレンチ北西部で検出した土坑であり、直径約2.2m残存深度約0.2mを測り、SE78001に切られる。出土遺物（図25-1～11）の中でも瓦器碗を中心とした年代観から、12世紀末～13世紀初頭に形成された土坑であると考えられる。

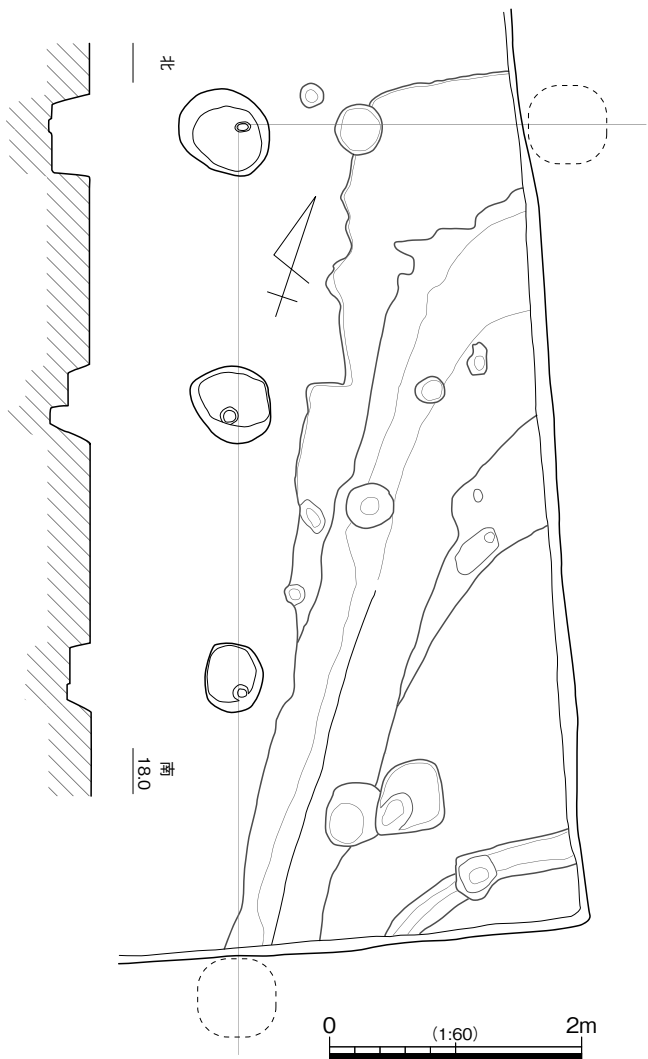


図24 SB78001 平・断面

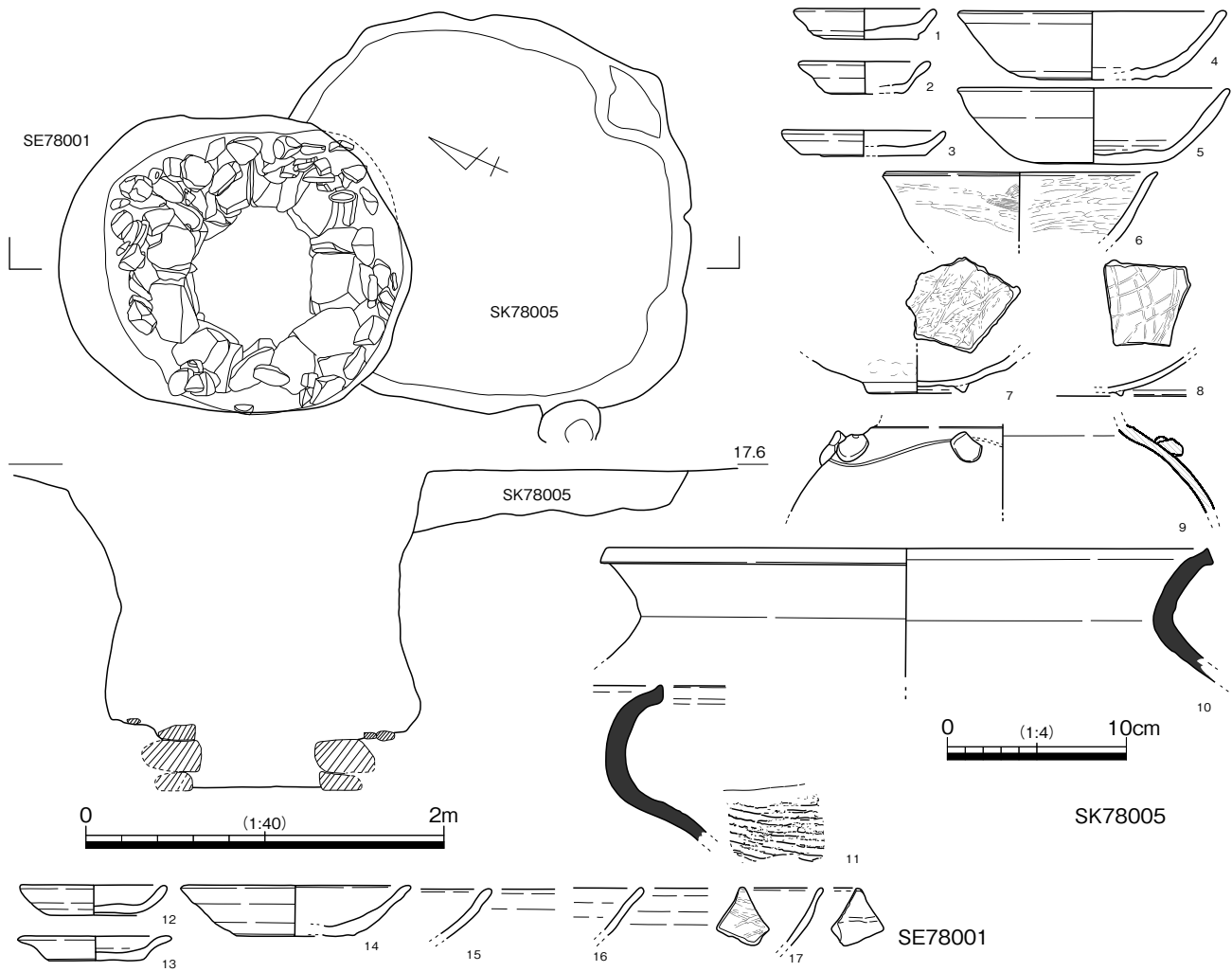


図 25 SE78001・SK78005 平・断面及び出土遺物



写真 22 SB78001 全景 北から

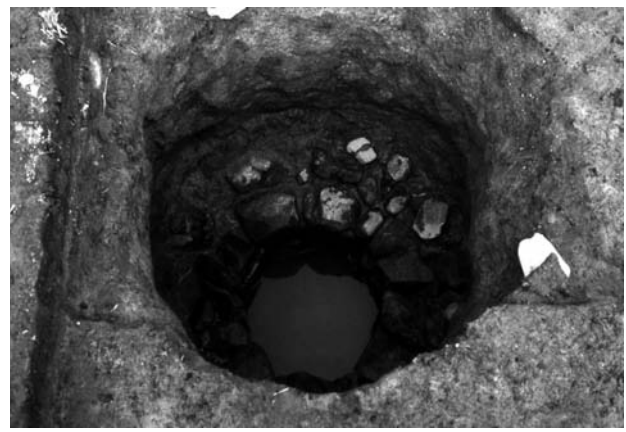


写真 23 SE78001 井側

図 25-9 は褐釉陶器四耳壺の肩部片である。

SE78001 (図 25)

トレンチ北西部の SK78005 を切る井戸である。長軸約 2m 短軸 1.6m 深さ 1.8m の楕円形の掘り方をもち、石積による枠が底面より 3 段遺存している。底面は基盤層下位の礫層まで到達しており、調査中にも盛んな湧水がみられた。掘り方及び石積内より土師質土器皿 (図 25-12)、枠内の埋没土から土師質土器皿 (13) 土師質土器杯 (14~16) 瓦器椀 (17) が出土した。SK78005 を切り込むことから 13 世紀以降の所産であることは明らかであるが、実績報告書では現在確認できる遺物の他に備前焼播鉢や施釉陶器皿の出土を認めており、構築時期は近世以降に下る可能性が高い。

SD78003 他 (図 23. 26)

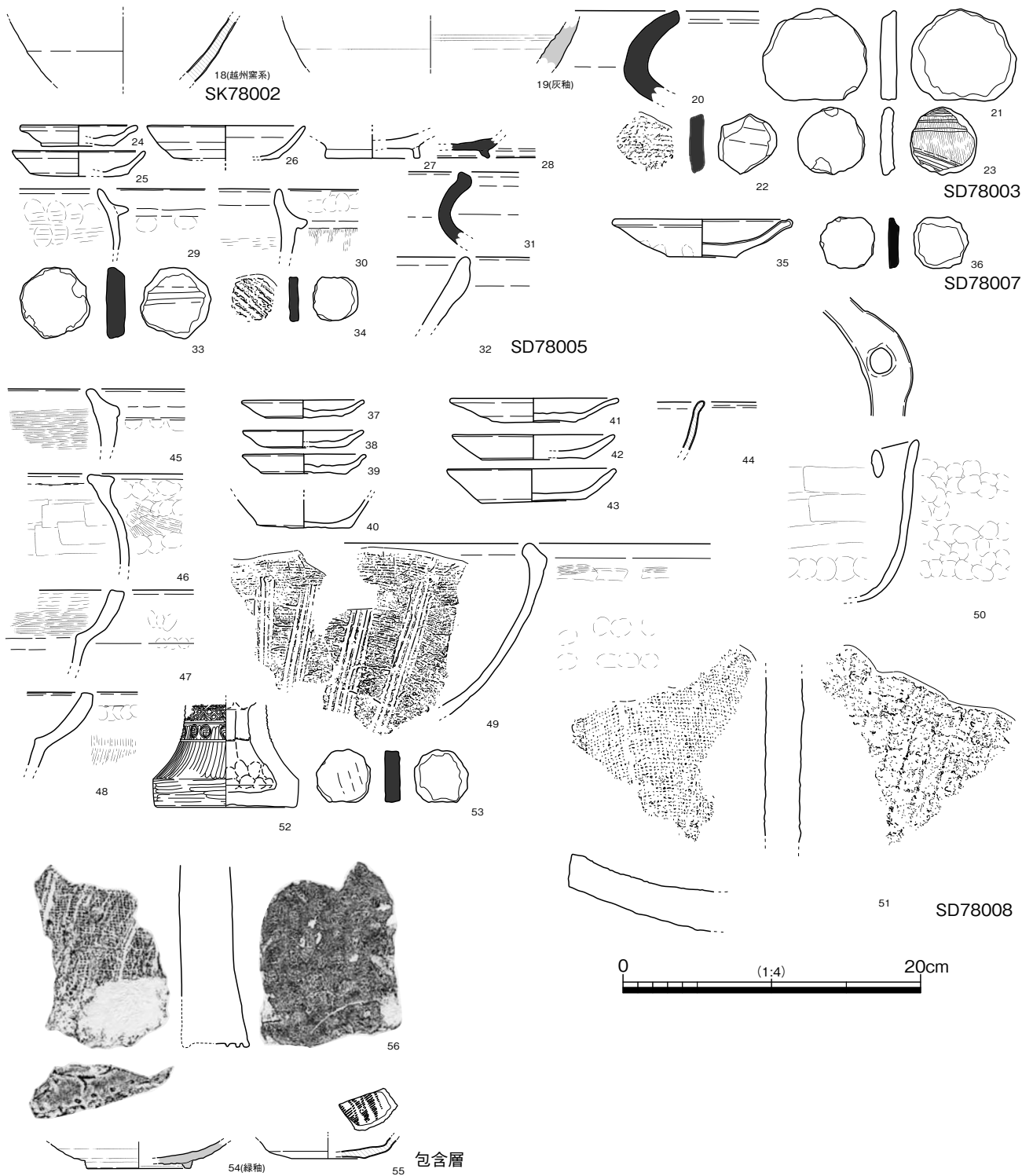


図 26 SK78002 他・包含層出土遺物

トレンチ内では多くの溝を検出した。流下形態から自然流路とみられる SD78004 と切り合いによる前後関係から最も後出する SD7807 を除き、SD78003、78005、78006、78008 は同様の埋没土をもって屈折・併走する。平面形態や分布状況から、屋敷地あるいは屋敷地内の建物群を区分する同時併存した溝群と考えられる。

図 26-19～51 は出土遺物であるが、15 世紀代の中世後半期の遺物に交じって近世初頭に下限をもつ土師質土器把手付鍋（図 26-45、46、50）がみられる。溝の継続期間をこれらの遺物の時間幅を当てることも不可能ではないが、屋敷地や建物群に伴うという機能を考慮し、ここでは近世初頭の年代を想定しておきたい。

図 26-19 は SD7803 に混入した状態で出土した灰釉陶器壺であり、猿投あるいは美濃産の 10 世紀代の所産とみられる。包含層出土遺物（図 26）

代表的な 2 点のみ図化している。図 26-59 は近江産の緑釉陶器椀であり 10 世紀代に比定される。55 は同安系青磁

皿である。

4. 小結

検出遺構の大半は中世後半以降となったが、国府に関係した遺構としてSB78001の存在を挙げることができる。SB78001は、全容は不明ながら、奈良・平安期の曹司を構成する小規模な建物となる可能性がある。また、3次調査SD78001や後述する9次調査SD84002によって圍繞されると考えられる国衙範囲を考える上でも、本次調査区において古代の遺構が希薄な点は重要な資料となろう。

第4節 5次調査（昭和53年度）の調査

1. 概要

5次調査は、府中町5117-1番地に対して宅地造成に伴う届出が行われたことから、急遽、4次調査と並行して確認調査が実施されたものである。調査地は鼓岡社が乗る丘陵の北東裾であり、「セイリュウ」と呼ばれた南海道推定ラインとされる東西路を西へ延長した箇所に対応し、Bトレンチに隣接して「内裏泉」と呼ばれ崇徳上皇が利用したとの伝承がある井泉が残されている。調査はAからDまでの4本のトレンチを設定して行われているが、現況でA・C・Dトレンチは1枚の平坦な水田面、Bトレンチは北側一段下の畑地である。



写真24 5次調査地（右奥に鼓岡社叢）北西から

2. 層序（図27.28）

基本層序について、層序対比が可能なA・B・Cトレンチを中心して説明を加える。Dトレンチにおける2層より下位層については、細分が進むことで層序対比が困難なことによる。1層は現在の水田耕作土であり、2層は数層に細分されているがA・C・Dトレンチでは現在の耕作土に伴う床土に、Bトレンチでは近世から近代の耕作土に相当するとみられる。3層・4層は中世前半期の遺物包含層であり、古代の遺物もみられるが12世紀を下限とし、Cトレンチを中心に4層上面から穿たれる柱穴を確認している。5層は上段部に設定したAトレンチでは5a層、下段部のBトレンチでは5b層として符号を与えている。5a層は、丘陵裾部カットによる道路遺構内の基盤層である花崗岩盤直上にみられる灰茶褐色粘土（Dトレンチでは7層に相当か）であり、10世紀後葉～11世紀前葉の遺物を含む。5b層はBトレンチの石組遺構上部を覆う湿地性堆積部で、形成時期が判明する遺物は出土していない。6層は、Bトレンチの石組遺構内の黄褐色粗砂から成る堆積物でありラミナが認められる。以上のように、全体の層位関係からA・Dトレンチにおいては、10世紀後葉以前に丘陵裾がカットされた点や、Bトレンチの石組遺構も同様の時期に形成されたことが明らかに



写真25 Dトレンチ道路遺構（奥に鼓岡社叢）北から

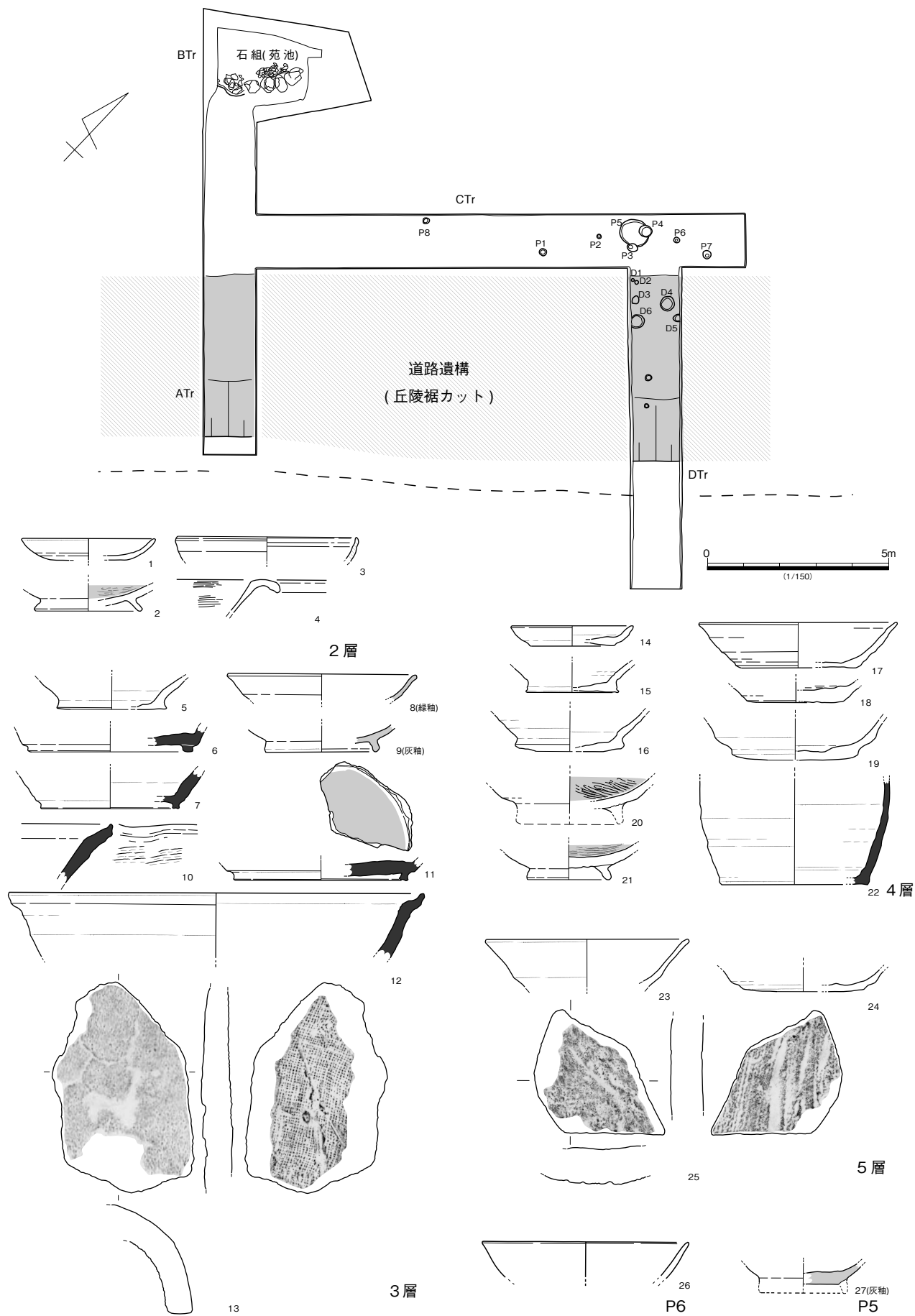


図 27 5次調査平面及び包含層出土遺物

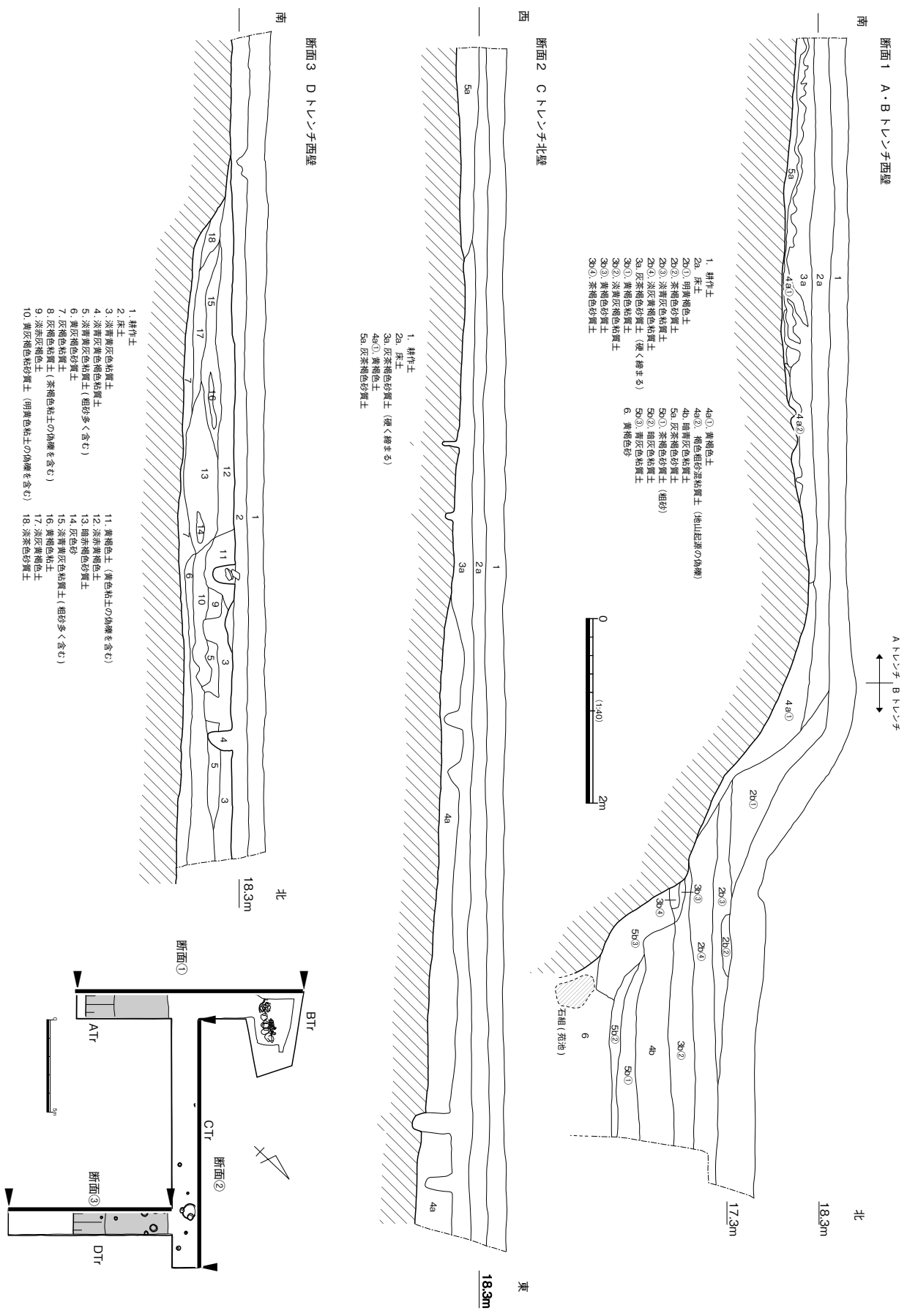


図 28 5 次調査断面

なった。

図 27-1 ~ 25 は、各層からの出土遺物である。4 は 2 層出土の焙烙口縁である。8 は緑釉陶器皿であり、美濃あるいは近江産の 9 世紀末葉から 10 世紀初頭の所産とみられる。9 は灰釉陶器碗であり、猿投窯産の 9 世紀後半の所産と推定される。11 は 3 層より出土した須恵器転用硯であり、見込みを硯面に転用する。

図 27-26、27 は 4 層上面から掘り込まれる柱穴からの出土遺物である。26 は C トレンチ P6 から出土した土師質土器碗。27 は D トレンチ柱穴 D5 から出土した灰釉陶器碗で美濃産の 10 世紀前半の所産とみられる。



図 29 石組遺構 (苑池) 平・断面及び出土遺物

3. 検出遺構・遺物

道路遺構 (図 27. 28)

A・D トレンチにおいてみられる丘陵部を構成する花崗岩盤をカットとして明瞭な平坦面を形成した痕跡が確認された。カット部分は、南北幅約 5m 残存深度約 0.6m を測るもので、条里地割に合致した方向で東西に延びる。東西に帯状に延びる点や、底面において



写真 26 石組遺構 (苑池) 北から

柱穴が確認されず建物造営に伴うものでないことなどからみて、切通状に丘陵裾をカットしたと考えられることから、道路遺構として報告する。前述したとおり、カット面を覆う 3・4 層には 12 世紀代を下限とする遺物が含まれ、A トレンチのカット面直上の 5a 層から出土した土師質土器杯 (図 27-23. 24) の形態からみて、10 世紀後葉から 11 世紀前葉以前に形成された可能性が高い。

石組遺構 (図 29)

B トレンチで検出した石組遺構である。B トレンチの中央で南部の道路遺構が乗る花崗岩盤が急速に落ち込み 5b 層

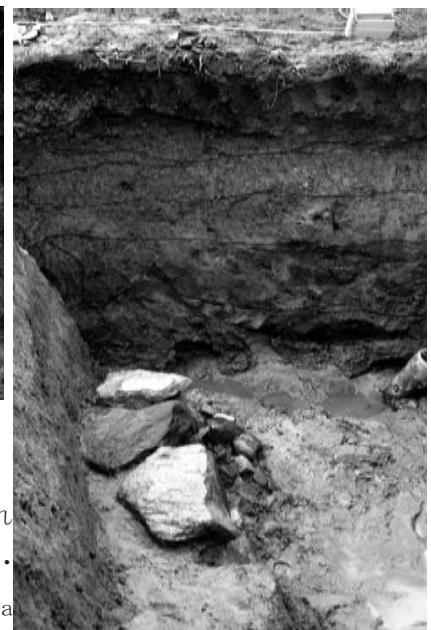


写真 27 石組遺構 (苑池) 土層東から

とした湿地性堆積物が広がる。石組は5b層を除去した段階で検出された。石組は、花崗岩盤の落ちに沿って東西方向で直線的に検出され、下部に拳大の砂岩円礫・安山岩の垂角礫を敷き詰め、その上部に長さ約0.4m厚さ約0.1～0.2mの花崗岩の方形石材を高さ約0.4m、2・3段に涉って垂直積を行っている。石組内部には上位にラミナが認められる黄褐色粗砂(6層)があり、図28の断面図に表現されていないが写真から判断して、これより下位は滞水状態を示す青灰色粘土が堆積しているとみられる。最深部までの掘り下げを行っておらず、石組内部の深さは不明である。調査範囲が限られているが、単なる石積護岸とは考え難い。内部に流水砂石組内部に堆積した黄褐色粗砂から9世紀後葉～10世紀前葉と推定される須恵器杯(図29-28)が出土し、上層が12世紀を下限とする3・4層に、詳細な形成時期は不明ながらも5b層に被覆されていることから、10世紀前葉以前に属する遺構であることは確実である。詳細は今後の調査が必要であるが、検出状況や帰属時期からみて、苑池の一部である可能性を指摘しておきたい。

4. 小結

小規模な調査であったが、鼓岡社が乗る丘陵部裾をカットした10世紀後葉以前の道路遺構や苑池の可能性のある10世紀前葉以前の石組遺構を確認するなど大きな成果が得られた。道路遺構は、従来から想定されている南海道推定ライン上で検出されているが、それに該当するものかどうか直ちに判断することは困難である。但し、当該期の国府域内の連絡を意図した道路であることは指摘できよう。

第5節 6次調査(昭和54年度)の調査

1. 概要(図30)

6次調査は、府中町5138番地で行われており、その選定理由は、周辺に「印鑰」などの古地名が存在していたことに依る。調査地は西から東へかなりの傾斜地が一端緩斜となる麓層面の先端部付近に相当し、調査地南側の18・23次調査では、麓層面を開析する谷地形(低地帯3)が、北側には13次調査で確認された低地帯4が存在することが予想される。調査では、7世紀後半代の正方位溝、8・9世紀の大型総柱建物、12世紀の建物群(柱穴群)、12世紀の縦板組井戸などを検出し、長期間に渉る遺構形成が明らかになった。調査は、条里地割の方向での5mグリッドを基準としてトレンチ設定が行われている。



写真28 6次調査風景

2. 層序(図31.32.33)

現代の耕作土である1層の下位にみられる2～5層は、近世から近代にかけて連続して形成された旧耕作土である。6層として網掛け表現する灰黒色粘質土は、国府域のほぼ全域で確認でき12世紀代を下限とした遺物を含む包含層である。ほぼ水平に堆積していることや、層内に炭化物・焼土粒・遺物をやや多く含むことからみて、自然堆積層ではないことは明らかであり、遺構の形成に伴う旧地表面の削平等に起因して人的に形成されたと考えられる。この6層の分布と層厚、後述する10層下位の基盤層である黄褐色粘土の上面から、調査区内の微地形を概観する。6層は調査区西壁となる断面①では北部から南部にほぼ均一な層厚(中央部で厚いのはSD79006部分となる)で分布しているが、南端部のG1グリッドでは途切れ、基盤層の黄褐色粘土が露出する。この状況は断面④とするH2グリッド南壁においても同様であり、調査区南西部が小高くなっていて、元来存在していた6層は近世以降の耕作に伴い削平されたと考えられる。一方で、東西方向の断面となる断面③とするG3～G5グリッド北壁では、6層がやや層厚を増して東へほぼ水平に広がりを見せるのに対して、基盤層である黄褐色粘土は下降していき、6層との間に7～10層とする層厚約0.3mの遺物包含層が介在している。7～10層中にも6層と同様に一定量の焼土・炭化物・遺物を含むことから自然堆積層とは捉えられないが、基盤層である黄褐色粘土の傾斜からみて、G3グリッド付近から東へ向かって緩斜面が存在していることが分かる。この傾斜は、SB79001が存在するB4グリッドにおいて確認できないことから、この緩斜面

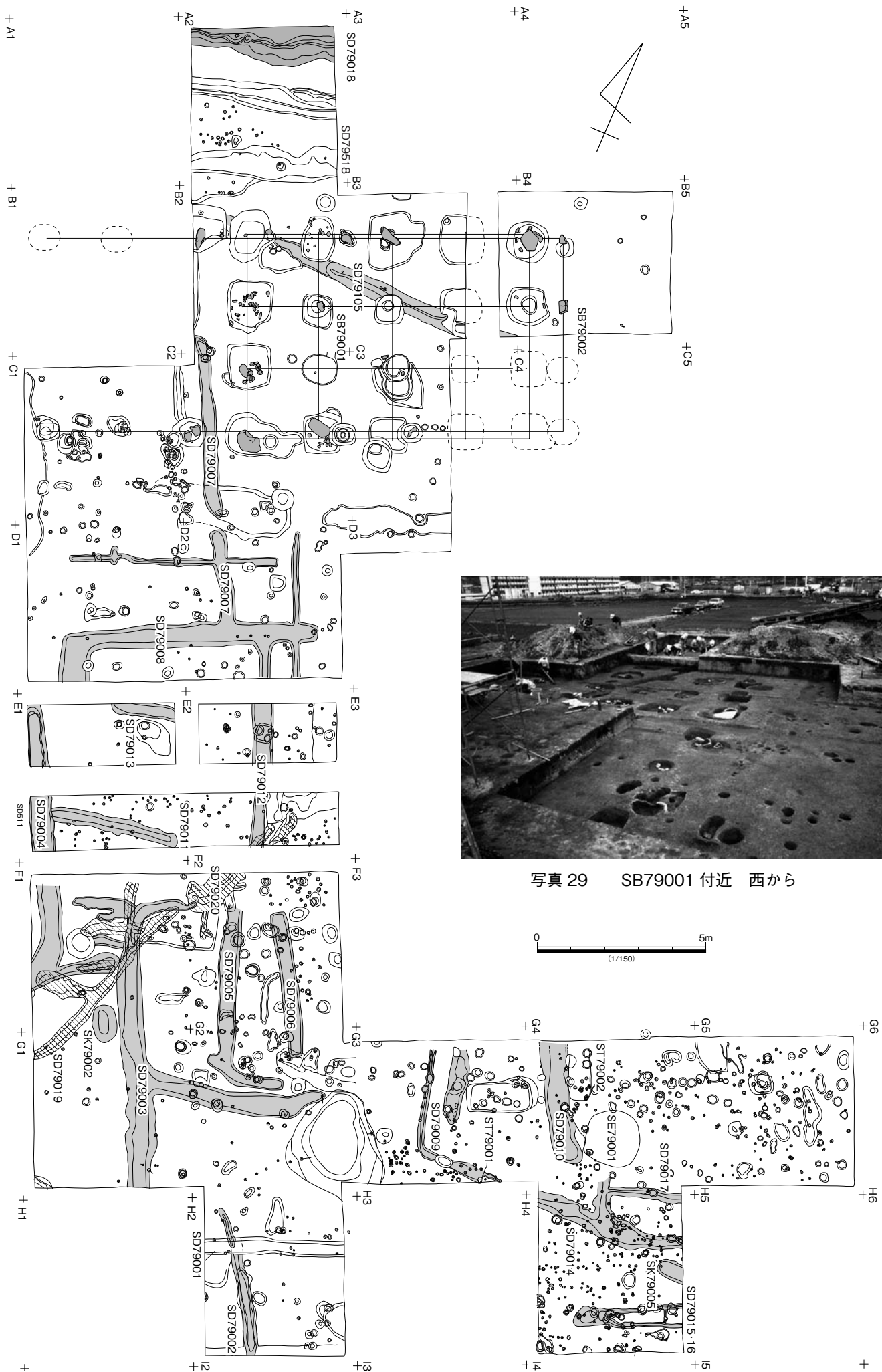


図 30 6次調査平面

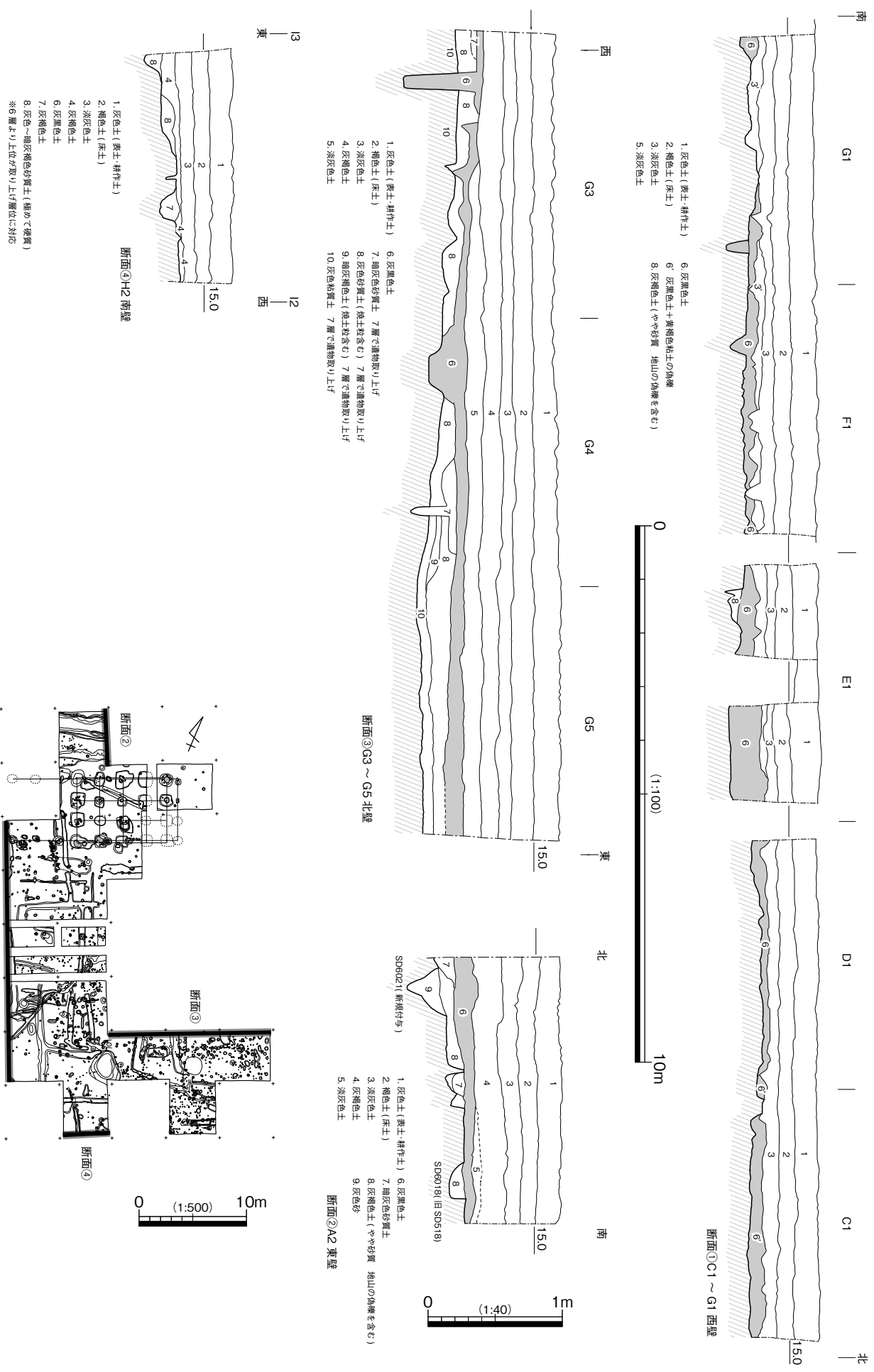


図 31 6 次調査断面

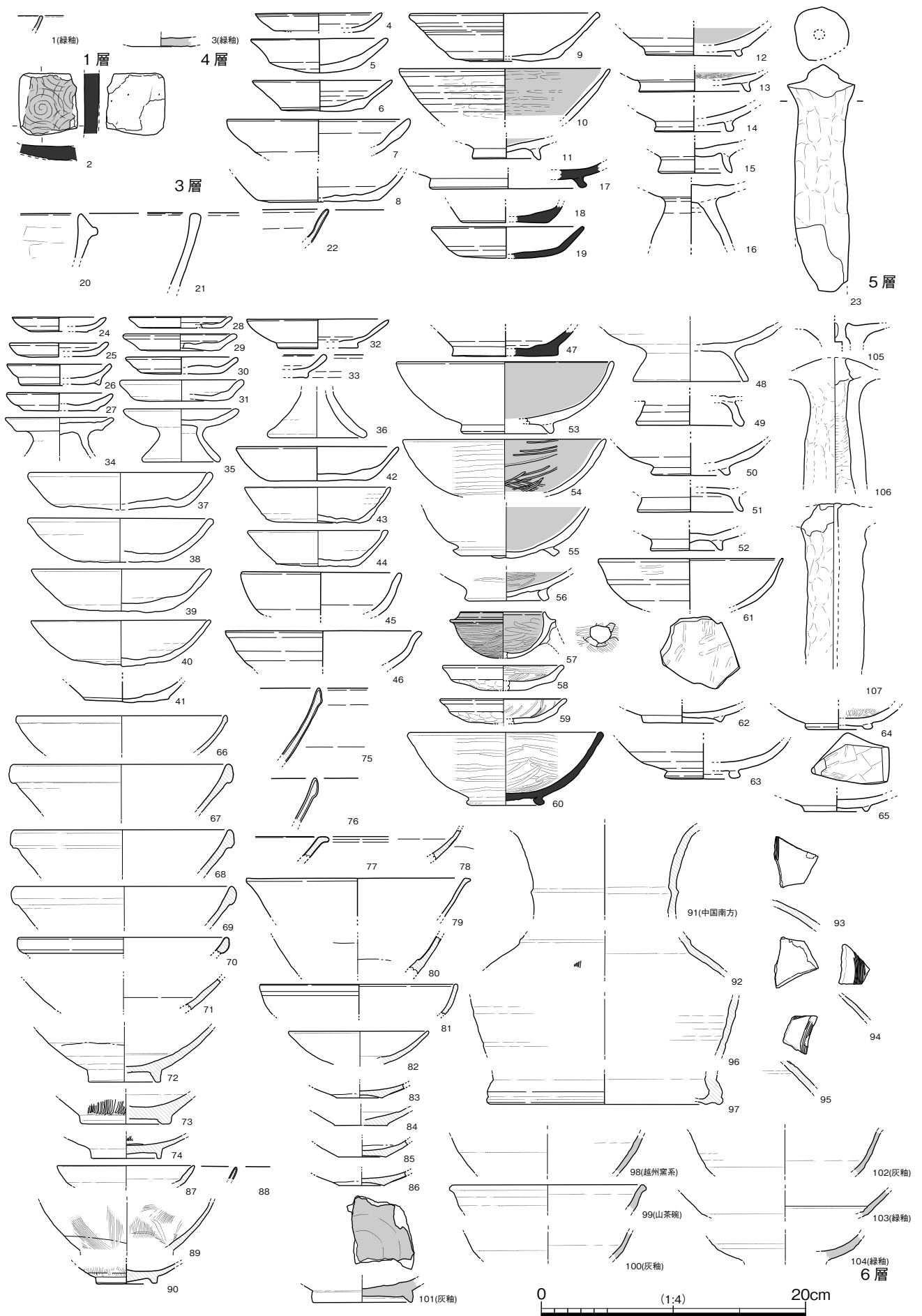
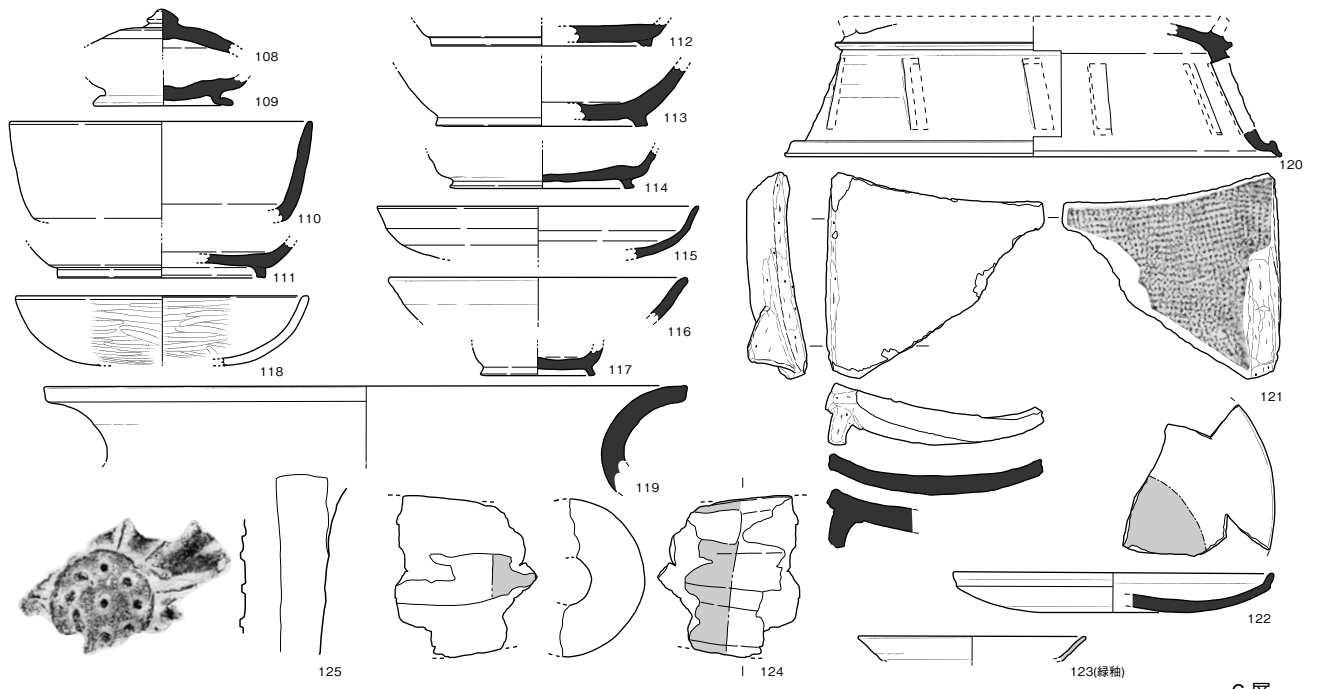
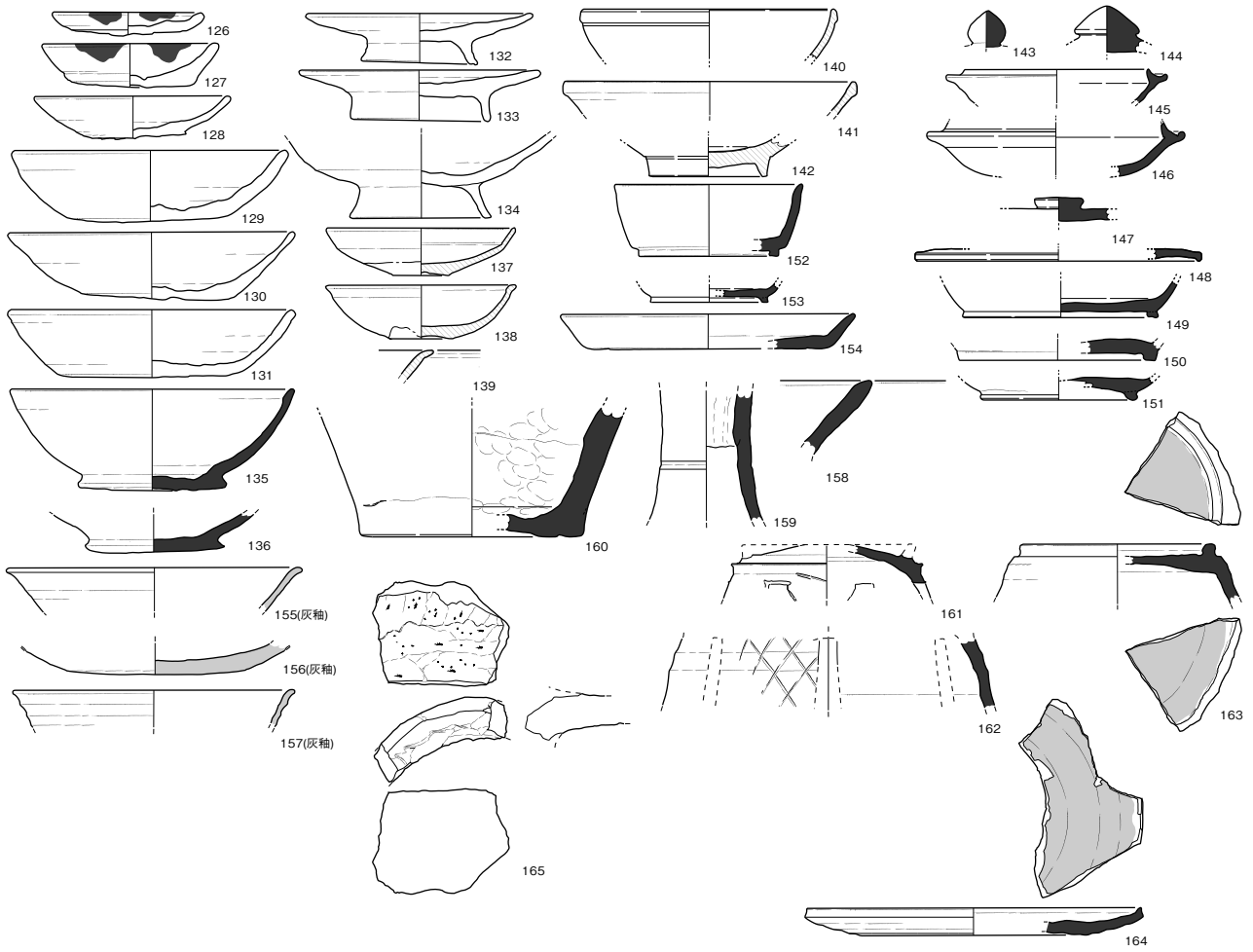


図 32 包含層出土遺物 (その 1)



6層



7層

図 33 包含層出土遺物 (その 2)

は先の調査区南西部の G1・H2 グリッド付近の高まりを
 かわして、南西方向から北東方向へ抜けるものと推定さ
 れる。この傾斜面は、南側の 18・23 次調査で確認され
 た低地帯 3 に接続する可能性が高い。7～10 層は 11 世
 紀以前の資料が主体を占めるものの、12 世紀代の資料も
 含まれていることから、6 層を含めた 11 世紀から 12 世
 紀にかけての遺構形成に伴い、造成等の低地帯を平準化
 させる動きがあったことを示していると考えられる。

以上のような堆積状況を考慮すれば、本次調査の報告
 で中心となる SB79001 の構築位置は、11 世紀以前の微高
 地上に相当すると考えられる。その後 11～12 世紀の継
 続した遺構形成によって地形面の平坦化が進行し、中世後半以降は耕作地として連続使用されたことが伺える。

図 32.33 は各層位からの出土遺物である。5 層より上位については、選択の上実測・掲載を行っている。1 は 1 層
 である現在の耕作土から出土した緑釉陶器碗であり、美濃あるいは近江産とみられる。2 は 3 層出土の猿面硯。3 は 4
 層出土の緑釉陶器の見込み部の小片で、近江産と考えられる。23 は 5 層出土の土師器燭台形土器であり、6 層出土の
 105～107 も同様で、煤痕の認められる 7 層出土の土師質土器皿・杯（図 33-126.127）とともに灯明具として用いら
 れたと考えられる。91～97 は、6 層出土の中国南方系の緑釉陶器壺であり、これらの破片は同一個体と考えられ緑
 釉下に白色化粧土がみえる。98 は越州窯系青磁碗である。99 は山茶碗、100 は灰釉陶器碗であり、美濃産と考えられる。
 灰釉陶器碗 101 は、10 世紀代の猿投あるいは美濃産とみられるが、内面が極度に磨滅し墨と赤色顔料が付着すること
 から、転用硯であると考えられる。102 は灰釉陶器碗であり、9 世紀末葉の美濃産とみられる。103 は篠産の緑釉陶器皿、
 104 は灰釉陶器碗であり 9 世紀後半の猿投窯産と考えられる。120 は須恵器円面硯で摘み出される形態の脚端部をもつ。
 121 は須恵器風字硯であり、底面は細かな格子叩き、硯面は極度に磨滅する。11～12 世紀の土師質土器群に伴う可
 能性が高い。122 は須恵器蓋の内面を硯面とする転用硯。123 は緑釉陶器皿であり、小片であり産地推定は困難である。
 124 は鞆羽口。125 の軒丸瓦は、複弁 11 葉蓮華文の讃岐国府式と考えられ、中房の 1 + 9 蓮子数が判明する数少ない
 資料となる。145.146 は古墳時代タイプ of 最末期の杯であり、7 世紀中葉に比定される。後述する SD78005 等、付近
 に 7 世紀代の遺構が存在することを暗示するものであろう。155 は灰釉陶器碗であり、美濃産の 9 世紀末葉とみられ
 る。156 は灰釉陶器の皿、あるいは壺とみられ、釉調からみて猿投窯産であると考えられる。161 は小型の須恵器円
 面硯、須恵器円面硯 162 は脚部外面にヘラ描きによる斜格子文を認める。164 は須恵器蓋内面を硯面とする転用硯で
 ある。転用硯を含め、これらの硯類は多時期に亘っており、国衙機能の継続を示すものであろう。軒丸瓦 165 は瓦当
 部が剥離しているもので、焼成雰囲気は讃岐国府式
 軒丸瓦 125 とよく似ている。接合面に密なケズリが
 観察される。

3. 検出遺構・遺物

SB79001 (図 34)

調査区北西部で検出された大型総柱建物である。
 梁行 3 間 (6m) 桁行 4 間 (8.2m) の柱構造をもち、建
 物主軸は条里地割の方向に合致する。柱間は、2.1m (7
 尺) でほぼ統一されており、柱通りも良い。屋内の
 柱穴は側柱に比べて小振りであることや、SP79241
 から出土したヒノキ材とみられる柱根 (図 34-167)
 の当たりが側柱柱穴の礎板石と比べて浅い位置にあ

ることから、側通柱式の総柱建物であったと考えられる。SP79241 等多くの柱穴に柱根や礎板石等が遺存しているが、
 これらの検出状況については若干の検討が必要となる。まず、側柱には礎板石とみられる平滑な安山岩・砂岩製の大



写真 30 標準土層 (A2 東壁) 西から



写真 31 SB79001 全景 北から

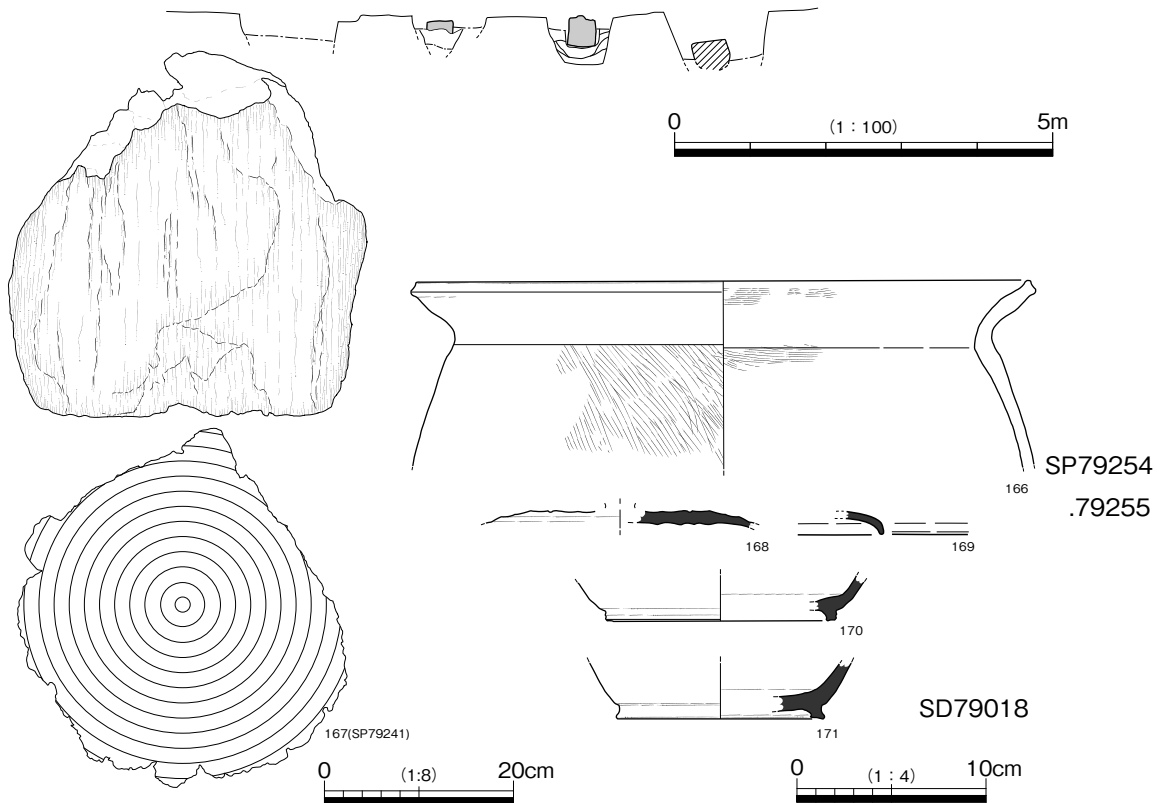
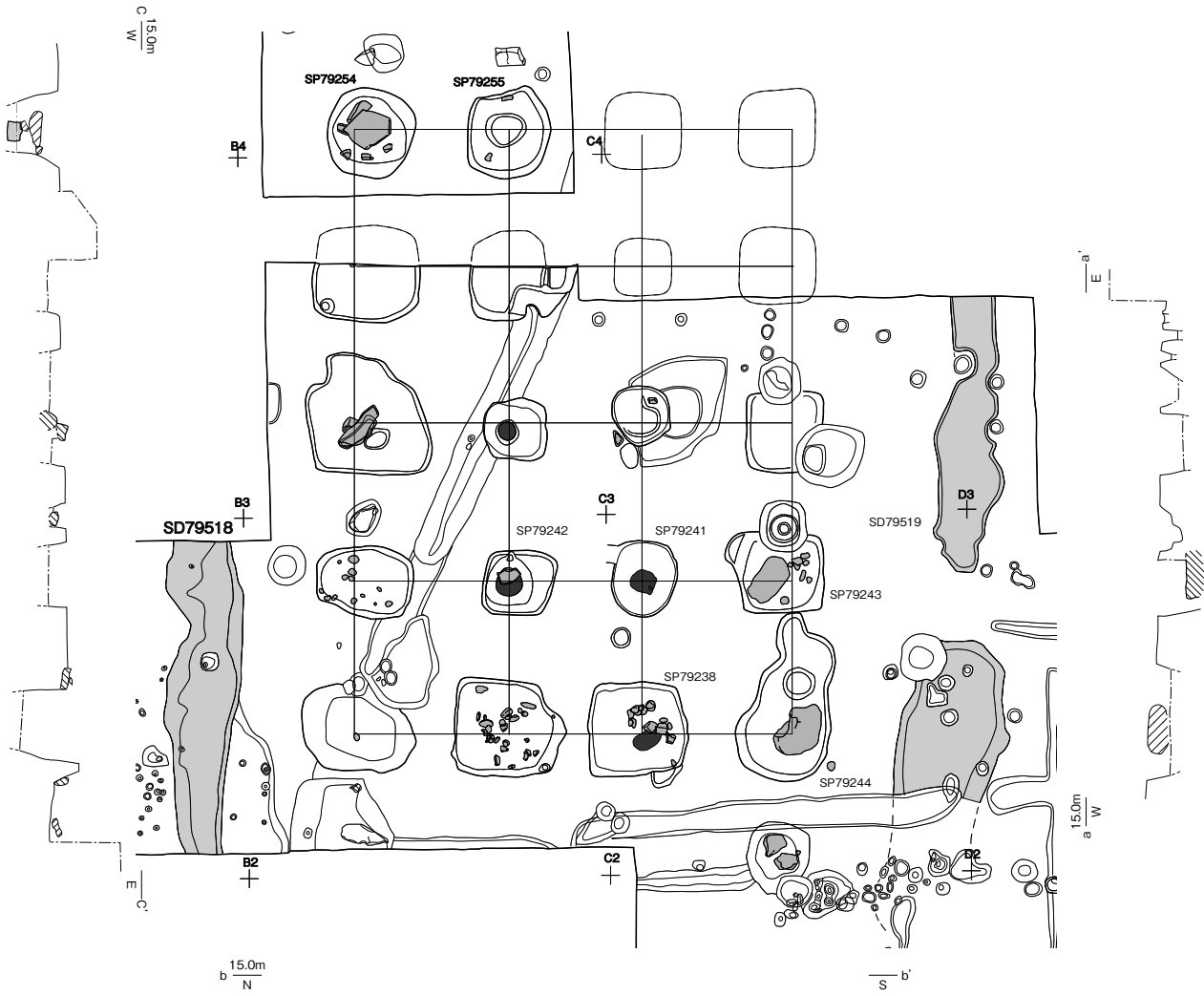


図 34 SB79001 平・断面及び出土遺物

型石材がみられるが、南側桁行の SP79244 と SP79243 では据付の高さが大きく異なっている。また、北東隅柱である SP79254 では、掘方からやや下に据付られた安山岩製大型石材の下位に柱根が遺存している。加えて、西側梁行の SP79238. 79302 では掘方上部に拳大の砂岩製の円礫、亜円礫が多くみられ、SP79238 ではこれらが柱根上部に位置していることが確認されている。これらのことから、当初、掘立柱建物として建てられたのち、礎石建物へと改築されたと考えられる。但し、屋内の束柱については、現状で礎石化した様子は窺えないので、礎石・掘立柱が併用された可能性も指摘しておきたい。南北桁行から 1.5～2m 離れた位置には、SD79518. 79519 が併走している。検出層位が本建物の各柱穴と同じ 12 世紀代の包含層である 6 層を除去した段階であることや、位置関係からみて、雨落溝と考えることができよう。

造営時期を考える資料として、SP79254. 79255 の裏込土下位から出土した土師器甕 (166) がある。資料は大きく 2 片に分かれるが、接合点は見出せないものの、形態や胎土からみて同一個体である可能性が極めて高く、初期の掘立柱建物としての造営の際に、両柱穴の裏込土に流入した資料と考えられる。口縁端部形態や肩の張る胴部形態からみて、8 世紀でも前葉に位置付けられる資料とみられる。また、北側の雨落溝である SD79518 からは須恵器蓋 (図 34-168. 169)・須恵器杯 (図 34-170. 171) が出土した。これらの須恵器蓋杯は、形態的にみて 8 世紀前葉から中葉の時間幅で捉えられる。

遺構の検出状況や出土遺物から判断して、本建物は 8 世紀前葉に造営されたと考えたい。また、礎石建物化した時期を窺い知る資料に乏しいが、ここではその時期を 8 世紀後葉に想定しておきたい。

SB79002 (図 35)

SB79001 と重複して検出された建物である。現況で梁行 3 間 (5.7m) 桁行 8 間の柱構造をもち、建物主軸は条里地割に合致した東西棟となる。本建物は、既刊の概報等では SB79001 に後出する柵列として報告されているが、再検討した結果、建物として提示することになった。各柱穴には根石とみられる板状石材が据えられており、柱通りは良好であるが、柱間は梁行で 2.1m 桁行では 2.0～2.2m と一定していない。各柱穴位置は、先行する SB79001 の側柱の位置を踏襲しているが、束柱がみられないことや西側に桁行が更に延びるなどの相違点があり、建物機能そのものが継続しているとは考え難い。

造営時期については、出土遺物に良好な資料がみられない。切り合い関係によって 8 世紀後葉に礎石建物化したと



写真 32 SP79244 の礎石? 検出レベルに注意



写真 33 SP79224 礎石下位の柱根



写真 34 SP79243 の礎板石



写真 35 SP79238 の柱根と上部の根石?

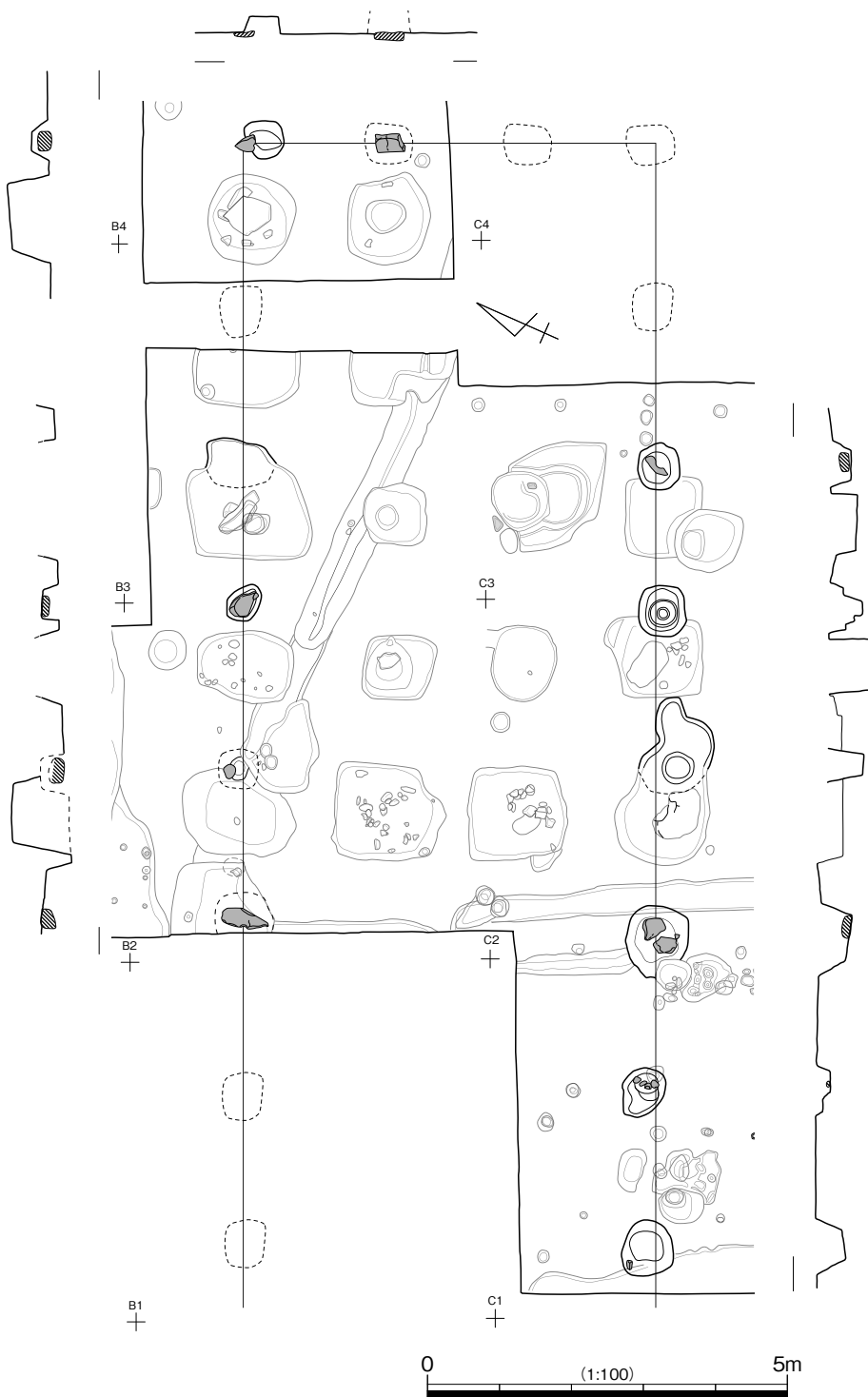


図 35 SB79002 平・断面

考えられる SB79001 に後出し、上面を 12 世紀代の 6 層が覆うことから、9 世紀から 12 世紀までの時間幅で捉えることができる。その中でも、SB79001 との柱位置が重複することや、調査区南部で検出された 11～12 世紀の柱穴と比較して大振りな掘方をもつことなどから、本建物は 9 世紀から 10 世紀に造営されたと考えておきたい。

SD79105 (図 30. 36)

調査区北西部で検出した正方位を指向する直線溝である。上面幅約 0.3m 残存深度約 0.3m を測り、断面形は U 字形を呈する。SB79001. 79002 に切られることから、調査範囲内では時期的に最も先行する遺構と捉えられる。埋没土からは、古墳時代タイプ須恵器蓋杯 (図 36. 189. 190)、須恵器杯 (図 36-193)、須恵器蓋 (図 36-194)、須恵器無蓋高杯 (図 36-195)、須恵器直口壺 (図 36-196)、須恵器甕 (図 36-197) が出土している。

須恵器蓋杯 (図 36-189. 190) や須恵器蓋 (図 36-194)、須恵器無蓋高杯 (図 36-195) の形態から、7 世紀中葉から末葉にかけて機能したことが推測される。調査範囲内において本溝と同様の方位をもつ建物が検出さ

れていないが、本調査地南東方向で行われた 16 次調査において、正方位を基準とした掘立柱建物が 2 棟検出されており、本溝の近隣に同様の方位をもつ建物が所在していることを示すものと考えられる。

SD79003 他 (図 30. 36)

ここで取り上げる溝は、基本層序 6 層と同じ埋没土をもつ溝群であり、基本的には条里地割に合致した方向性をもつものである。規模から考えて、建物遺構等に伴う可能性があるが、調査範囲内では明確化することができないので、一括して出土遺物を提示しておく。遺物の年代は、12 世紀を主体とし、一部 13 世紀代の資料を含むものとなっている。

SE79001 (図 37～40)

調査区南東部で検出した井戸である。直径約 2m 深さ約 2.4m の上面が円形の掘方もち、長さ 1.7～2.2m の縦板を用いて一辺が 0.8m の方形組を行い、3 段の横棧でこれを支持する。最下部には直径 0.45m、高さ 0.26m の曲げ物を

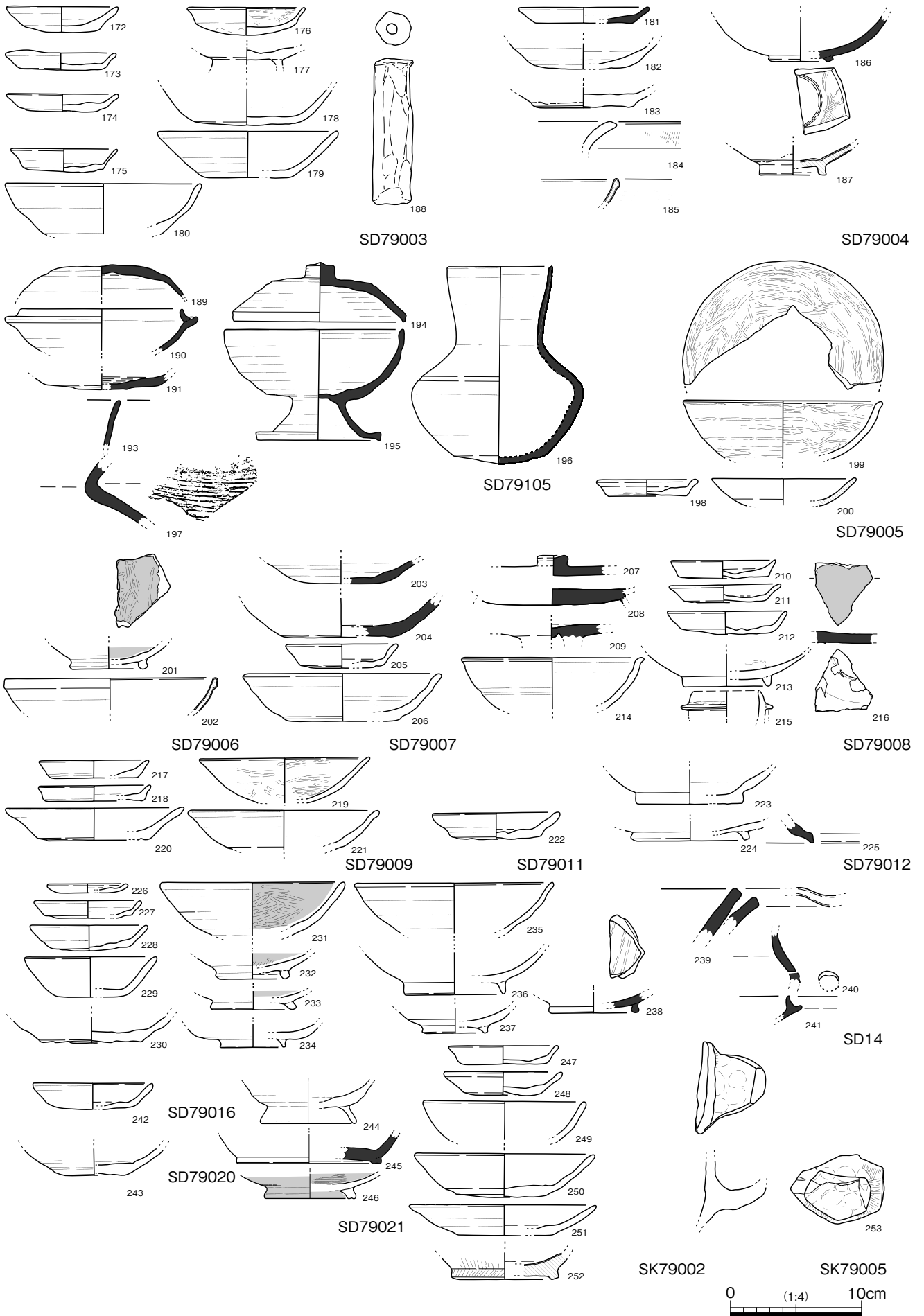


图 36 SD79003 他出土遺物

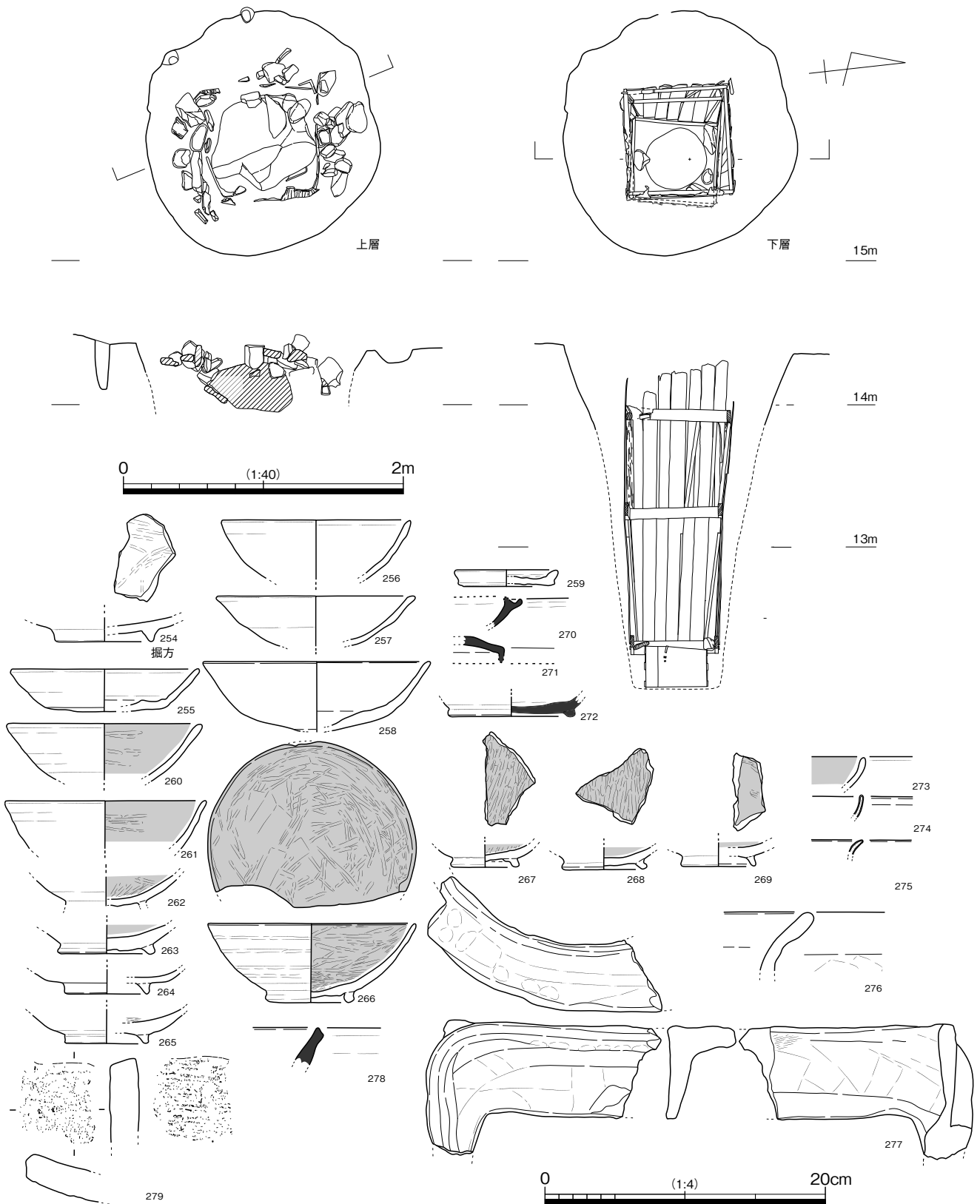


図 37 SE79001 平・断面及び出土遺物

配置し水溜め部としている。現在、横棧材と縦板が区分不可能となっており、横棧同士の留め方については不明である。廃絶時には、礎石転用の可能性がある大型石材で井戸枠上面を閉塞した後、小振りの安山岩製匣角礫と土砂で埋め戻している。掘方から 12 世紀代とみられる土師質土器碗（図 37-254）が出土した他の資料（図 37-255～279）はすべて井戸枠内からの出土資料であり、土師質土器皿（図 37-259）が最も後出する資料と考えられる。これらの資料

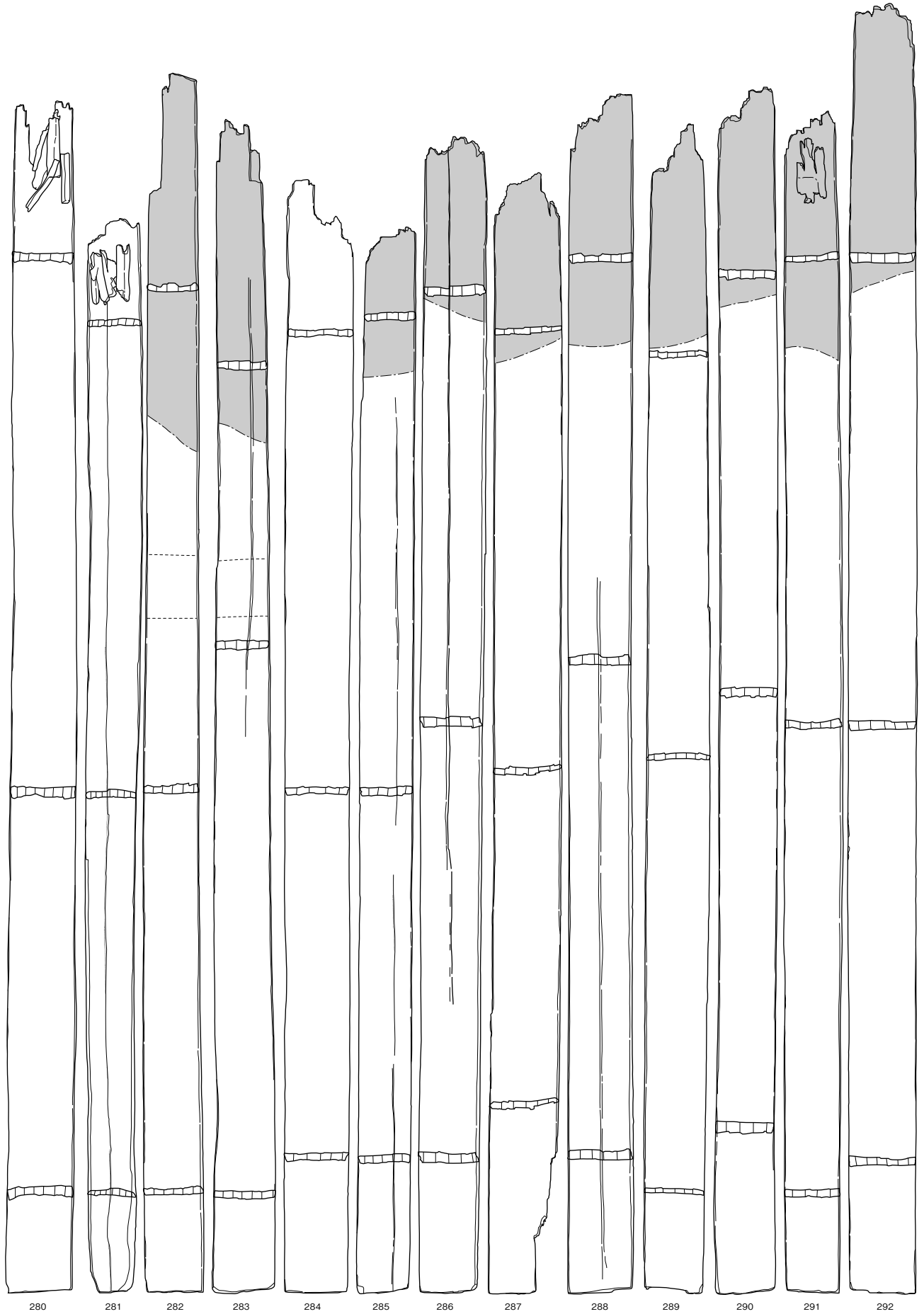
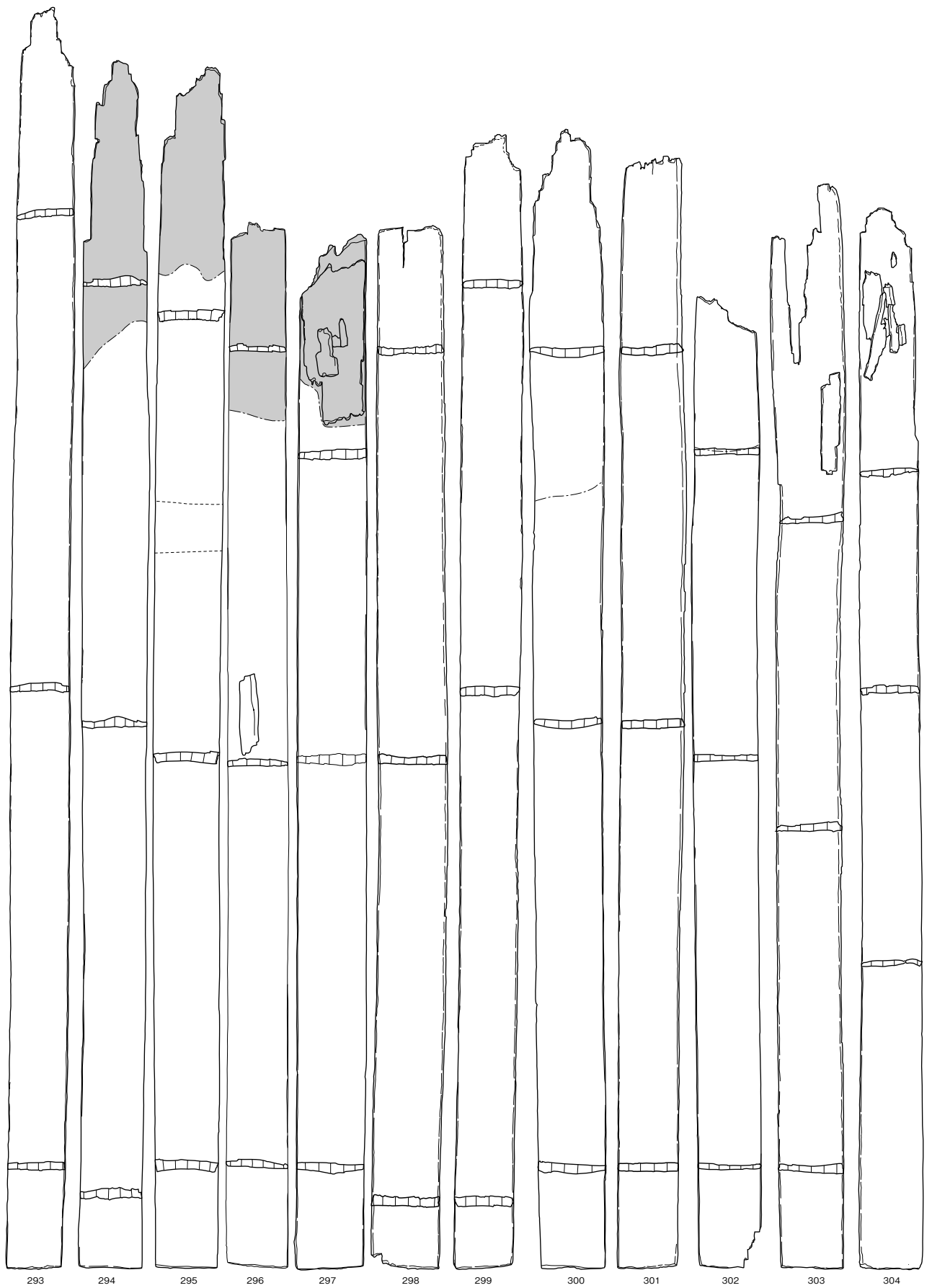


図 38 SE79001 井戸杵 (その 1)



293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

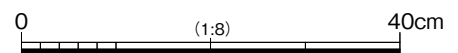


図 39 SE79001 井戸枠 (その 2)

からみて、本井戸は12世紀に構築された後、13世紀前葉には埋め戻されたと考えておきたい。図38～40は縦板・横棧材で、スギ材である可能性が高い。完存する資料については、上部が炭化しているものが多く認められる。最下部の曲げ物については、現在所在不明となっている。

ST79001(図41)

調査区南部のSE79001に近接した位置で検出された土壙墓である。掘方が長軸2.1m短軸0.9m深さ0.3mの隅丸方形を基調とし、北東部のみ小段が作出されている。主軸方向は条里地割に合致した東西方向を向く。埋没土は骨片を含む6層に類似した灰黒色土で一気に埋め戻されている。中央やや東よりには砂岩製壺円礫がまとまって出土している。図41-308は白磁碗底部、309は土師質土器皿である。土師質土器皿309の形態からみて12世紀代に構築された土壙墓と考えられる。

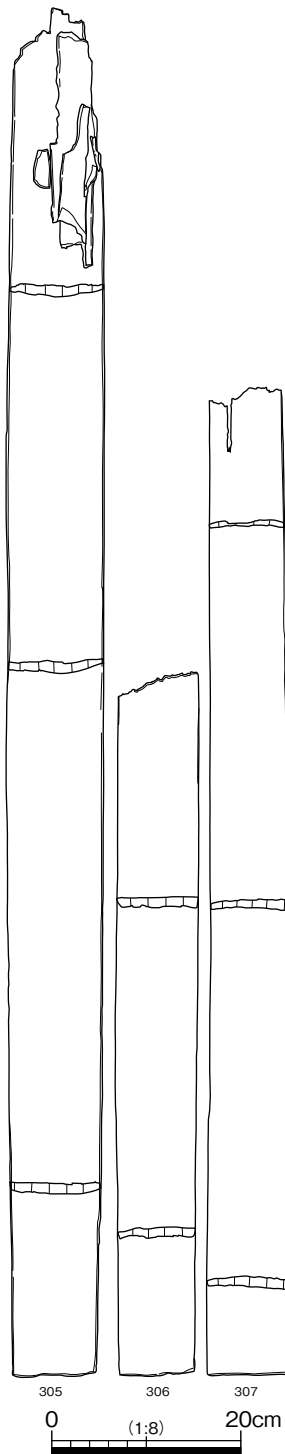


図40 SE79001 井戸枠(その3)

ST79002(図41)

ST79001に近接した位置で検出した火葬墓である。主軸方向は条里地割に合致した南北方位をとり、北側肩部が不明瞭となるが、長軸1.6m短軸0.6m深さ0.1mの隅丸方形の掘方をもち、底面には扁平な砂岩壺円礫を敷き詰める。骨片の出土の情報はみられないが砂岩製壺円礫

の表面には明瞭な被熱痕があり、埋没土の殆どが炭化物で占められていたことから、火葬墓として報告する。時期決定可能な出土遺物はみられないが、周辺遺構の状況からみて、12世紀代に構築されたものと推定しておきたい。



写真36 SE79001 上部の礎石状の大型石材



写真37 SE79001 井戸側



写真38 SE79001 調査状況



写真39 ST79001

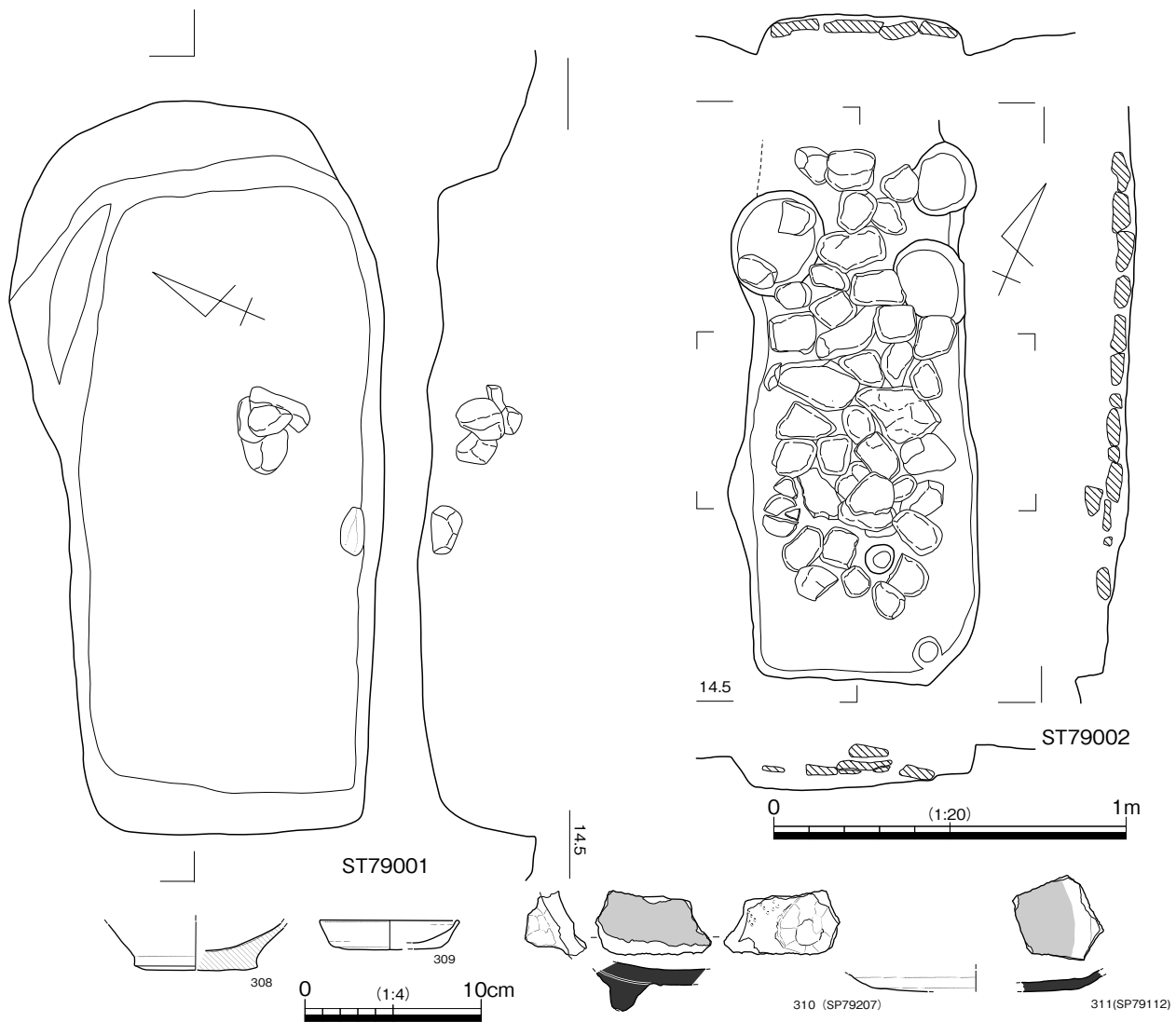


図 41 ST79001・79002 平・断面及び出土遺物他

その他の柱穴出土遺物（図 41）

調査区南部を中心に検出された小型ピットは、6層に類似した埋没土や出土遺物から、12～13世紀の所産とみられる。ここでは、これらの柱穴出土遺物の内、特徴的なもののみ図示した。図 41-310 は SP79207 から出土した須恵器風字硯であり、脚部と硯面の一部が残存する。焼成は瓦質に近い。図 41-311 は SP79112 から出土した須恵器転用硯であり、蓋内面を硯面に転用する。

4. 小結

本次調査では、7世紀中葉から末葉にかけての正方位を指向する直線溝 SD79105 や、8世紀前葉の造営から 8



写真 40 ST79002

世紀後葉に礎石建物化する大型総柱建物である SB79001、10世紀から13世紀にかけての建物・井戸などの遺構形成が継続した点が明らかになった。正方位を指向する SD79105 は、29次調査をはじめとした近年の調査で検出が相次いでいる同様の方位をもつ建物（群）の年代を推定する重要な資料となる。SB79001 は、倉庫群となる可能性も考えられるが、現段階で検証する材料に乏しい。一方で、礎石建物化し長期間継続する点は特定の機能が付託された建物で

あることは疑いなく、周辺における新たな調査が待たれるものである。また、硯や施釉陶器など官衙関連遺物が多く出土しているが、特に転用硯を含めた硯の集中が注目できる。SB79001 を含め調査地が国衙内に包括されることは十分に想定できよう。

第6節 7次調査（昭和55年度）の調査

1. 概要（図42）

7次調査は、讃岐国庁碑の北側の府中町5087-1番地で実施された。この調査地点は、木下良氏による推定南海道と国府津と讃岐国府を結ぶ南北路「馬さし大貫」との十字街に隣接する推定国庁域に含まれることが選定理由となった。調査は、昭和55年11月に開始され昭和56年3月に終了した。調査区の設定は、当時明らかになりつつあった国府・開法寺伽藍の軸線であり、条里地割の方向である北24°西の方位で5mグリッドに基づいて行われた。当初、南北2本トレンチを中心に調査を進め、調査区北端で築地に伴う南側溝（SD010）を確認したことから、延長部を確認するトレンチを追加し、最終の調査面積は396㎡となった。調査の結果、調査区南部では低地帯と中世前半期の井戸・柱穴群、北部では平安時代前半期の築地遺構を確認するなどの成果が得られている。調査前の土地利用は水田である。



写真41 7次調査地全景 南から

2. 層序（図42.51）

連続した壁面土層図が作成されていないため、図42の概念図を中心に説明を行う。現在の耕作土下約0.5mに灰黒色粘質土（5層）がほぼ全域に分布しており、5層と現在の耕作土の間層はすべて近世から近代の旧耕作土である。5層は層厚0.15mを測り12～13世紀を中心とした遺物を含む包含層であり、讃岐国府跡のほぼ全域で確認される中世前半の包含層に対応すると考えられる。5層を除去すると、調査区南部のSD80001を境とするA9グリッド以南では古代の基盤層である黄褐色粘土が現れる。A9グリッド以北では黄褐色粘土の基盤層が下降していき、6・7層とする黒色砂質土が堆積している。6・7層は12世紀以前の遺物を含む包含層であり、SD80001を除くSD80002やSE80001等古代末葉から中世前半期の遺構は6層上面で検出されている。SD80001を境とするA9グリッド以南では基盤層の黄褐色粘土が高まりをみせることになるが、この高まりは上面を5層によって削平されているものの、30次調査等で確認された南東の開法寺伽藍から讃岐国庁碑に向かって延び、7世紀から10世紀の建物群が乗る微高地斜面、若しくは微高地の先端部に相当すると考えられる。SD80001以北では、6・7層の堆積にみられるように低地帯（図7で表記した低地帯2）となっていることが窺える。SD80001は、29次調査のSD31の延長部と考えられ、排水目的で低地帯2に開削された溝と考えられよう。低地帯に分布しSD80001上部に堆積する6・7層と、その上面から穿たれた中世前半期の遺構との関係からみた低地帯2の変遷は、SD80001が9世紀までに埋没した後、6・7層の堆積が完了するまで凹地として取り残されていて、本格的な遺構形成は12世紀以降となると考えられる（表4）。

調査区北部ではSD80010・80014から成る築地遺構が確認されている。溝間の築地基底に掘り残された基盤層である黄褐色粘土と、低地帯2北肩部と想定されるSD80009付近の黄褐色粘土上面との比高差は約0.2mを測る。築地遺構が圍繞した国衙は、低地帯3との関係からみて、北側に存在すると考えてよいだろう。また、その場合には、築地遺構から約20m北に存在し、「セイリュウ」と呼ばれ木下良氏によって南海道推定ラインとされる東西路を国衙に包括することになるから、再考する必要性が生じてこよう。

3. 検出遺構・遺物

SD80010・80014（築地 図43～48）

調査区北部で検出したSD80010及びSD80014は、周辺の遺構検出レベルと比較して基壇状に掘り残された状態であ

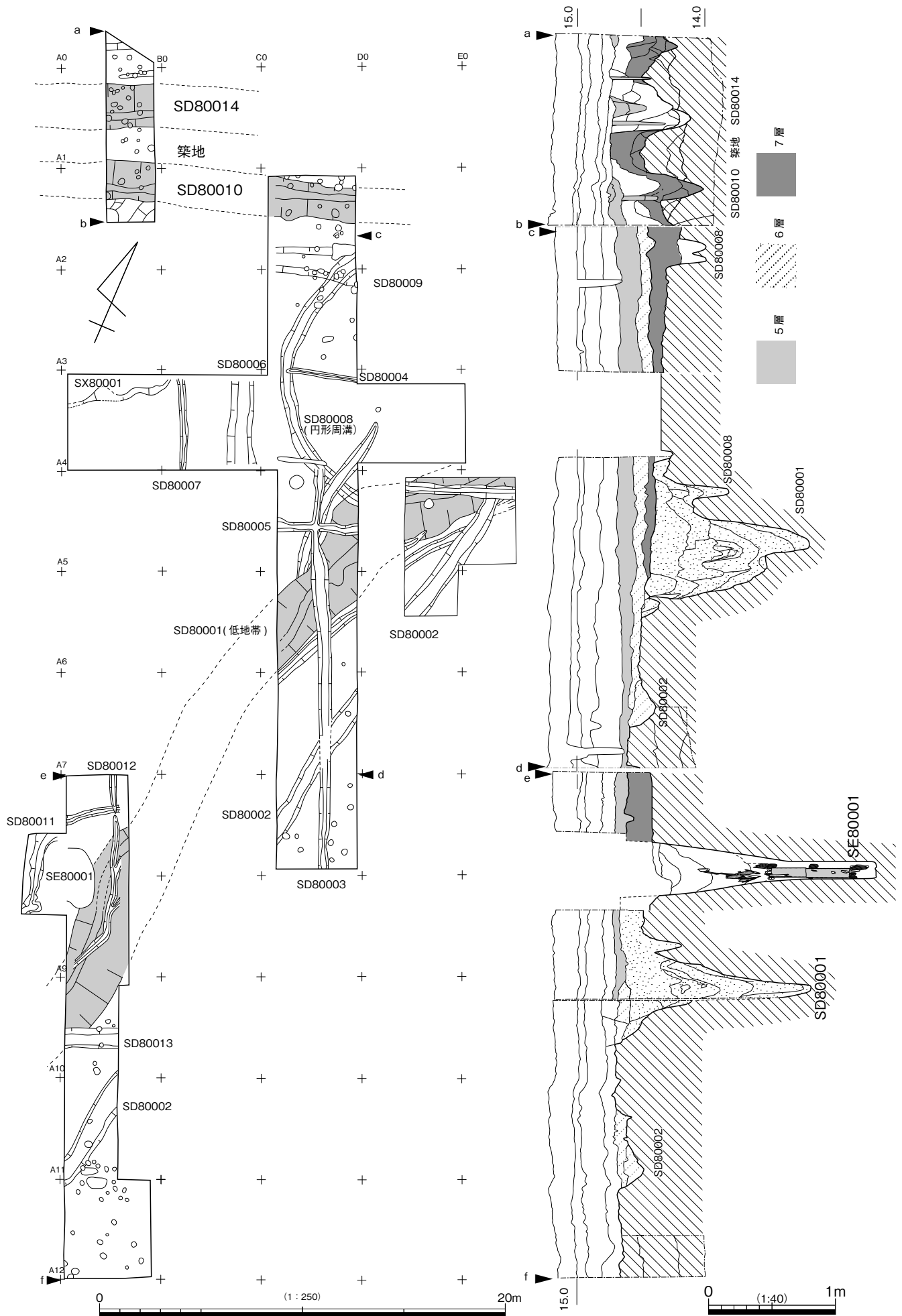


图 42 7 次平・断面

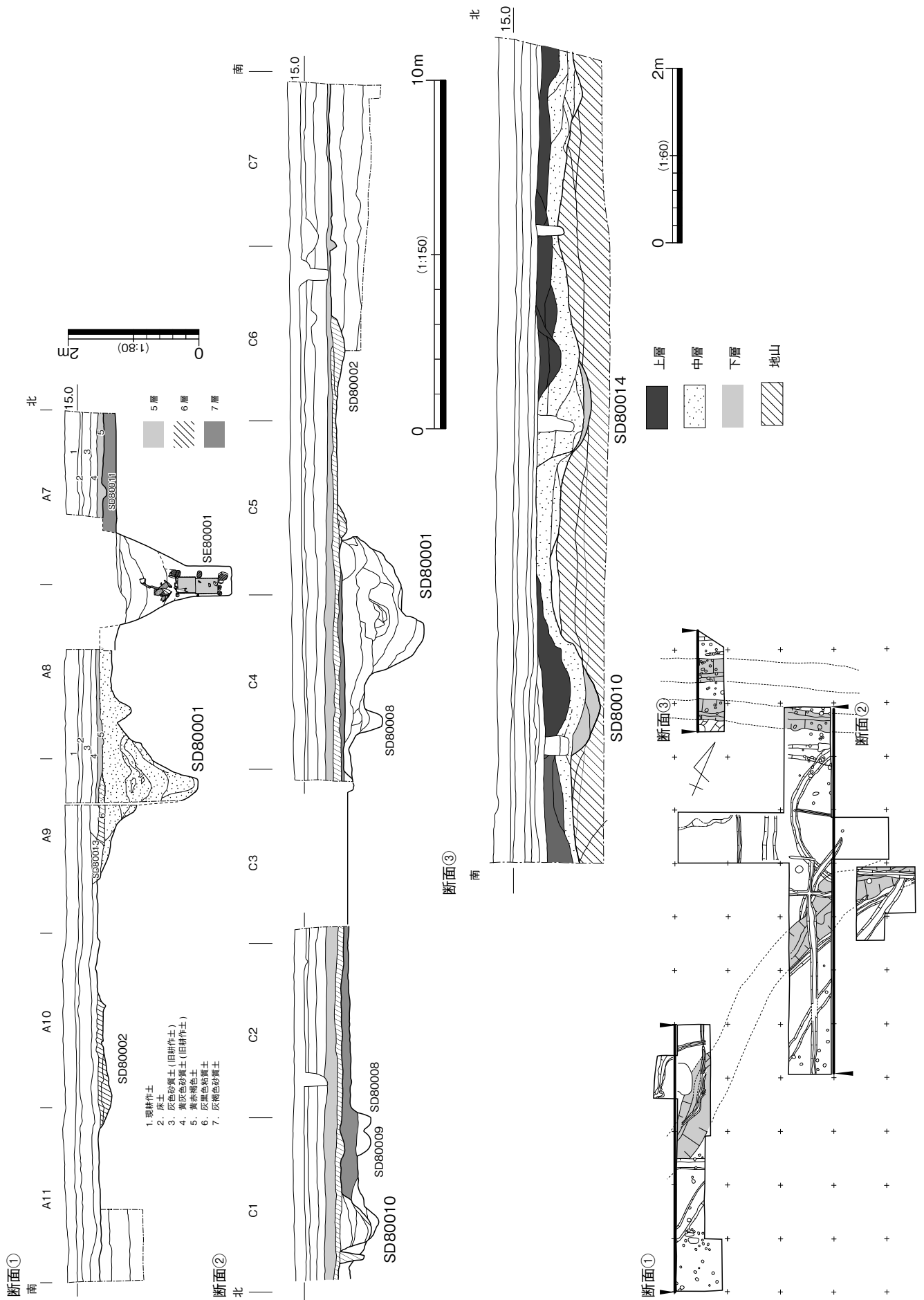


図 43 7次断面及び築地 (SD80010・80014) 断面

ることや、同時埋没が推定できる堆積状況、多量に出土した古瓦などから築地として報告する。検出状況はA1からC1グリッドにかけての延長約12mに亘って条里地割の方向とやや異なる北71°東の方位でSD80010が検出され、A0グリッドのSD80010から約8m北側でSD80014が確認されている。SD80014については、A0グリッド以外での確認ができていないが、後述する断面観察よりSD80010と同時に埋没している状況が確認できるため、両者が時間的に併存する点については疑いない。また、SD80010・80014の南北両側にも東西方向の溝が検出されているが、現状で埋没状況や出土遺物から同時併存を議論できる材料はみられない。

SD80010は上面幅約1.5～1.8m、築地基底からの深さ約0.4mを測り、SD80014と同時に埋没・掘り直しが行われている。SD80014は、上面幅約1m、築地基底からの深さ約0.3mであり、SD80010と比較して、溝底がやや浅く上面幅も狭い。築地基底部は、両溝の芯々間で約3.5m、上面では約2.1mとなる。この基底を掘り込んだ様子や築土を確認することはできず、基盤層である黄褐色粘土の上面には古土壌とみられる暗色帯が遺存している。この古土壌の直上から須恵器杯(図48-77.78)、層内から須恵器蓋(図48-79)須恵器杯(図48-80)など8世紀中葉から後葉の時間幅で捉えられる資料が出土しており、本遺構の上限時期を考える資料となる。下層と区分する層位は、SD80010では底面直上付近にみられる灰色粗砂、SD80014では底面付近の黄褐色粘土の偽礫から成る薄層である。この内、SD80014の下層については、築土崩落土の可能性もある。中層とする層位は粗砂と褐色粘土からなる偽礫を多く含む暗褐色粘土であり、両溝と築地基底を覆う形で堆積しているが、SD80014については本層位の段階で再掘削されている。中層が築地基底を覆うことからみて、本段階に築土が失われているとみた方がよく、SD80010から出土した瓦の多くが本層位に含まれる点も廃絶時の状況を示していると考えられる。A1区SD80010の中層から出土した完形の土師質土器杯(図45-31)の年代観から、築地の廃絶は10世紀中葉には完了していたと考えられる。上層はラミナが認められる暗灰色粗砂であり、SD80014上面では広範囲に広がり、SD80010上面では中層堆積後に再掘削された溝掘方内部を中心に認められる。出土遺物(図45-1～30)には11世紀から12世紀までの資料が含まれている。図43にみられる小規模な柱穴群・溝は、上層埋没後に穿たれたものであり、層位関係から12世紀以降の所産と考えられる。



写真42 標準土層(C2東壁) 南西から



写真43 築地遺構全景 南から



写真44 築地遺構断面 南東から



写真45 築地遺構 SD80010 断面 東から